

MediaNet^{NO.9}

2001/2002

慶應義塾大学メディアセンター



<特集> 図書館を結ぶ新しい協力のかたち

図書館システムの標準化：Z39.50プロトコル実装への取組み

危機に直面する洋雑誌コレクション

SPARC活動とは：学術出版と大学資源との協力活動

Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

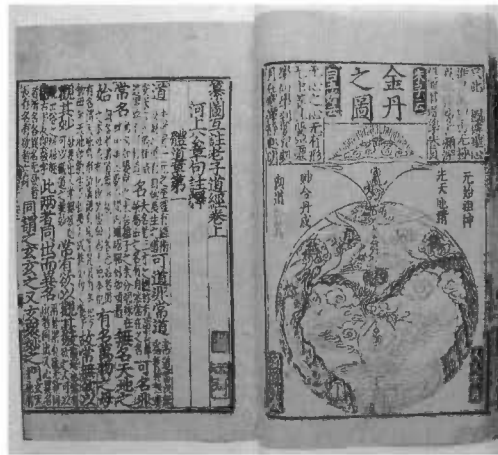
Information and Media Center for Science / Technology

Shonan Fujisawa Media Center

*Keio
University
MediaCenter*

纂図互註老子道德經二卷纂図互註南華眞經十卷 沖虚至徳眞經八卷

老子道德經題漢河上公章句註釋 南華眞經晉郭象注唐陸明德音義 沖虚至徳眞經晉張湛注
〔明〕刊本 8冊 四周双辺（有左右双辺葉）有界 十一行二十一字（注文小字双行）黒口 双
魚尾 内匡郭十八×十一・五センチ



『纂図互註老子道德經二卷纂図互註南華眞經十卷沖虚至徳眞經八卷』という文字を読んだだけで、すぐにこの資料がどういうものかわかるのは、漢籍に造詣の深い人だけであって、ふつうはどこからどこまでが書名で、どこで区切れるかもわからないだろう。そこでまず、書名から解説することにしよう。

書名の先頭にある「纂図互註」とは書物の形式の名称である。「纂図」とは必要な図を本文の中に挿入することで、「互註」とは本文に似通った意味の語を別の書物中から集めてきて注にするという意味である。「纂図互註本」は科挙の受験参考書として当時福建省建安で盛んに出版された。科挙とは世界史上、最も難しい試験といわれている中国の官吏登用のための資格試験である。科は科目で試験する学科目、挙は選挙で官吏を選抜挙用するという意味で、隋代から清代まで1300余年間続けられた中国の特殊な制度である。

「纂図互註」に続く「老子道德經」は老子のことで、「南華眞經」は「莊子」の別名、「沖虚至徳眞經」は「列子」のことであり、合わせて道家三子のことを示している。また「二卷」、「十卷」、「八卷」とある巻数は、それぞれの内容が何巻になっているかを示すもので、実際の資料の冊数とは別のものである。古典籍では冊数よりも巻数が重要とされるが、これは後の所蔵者等によって分冊や合冊にされてしまうケースがあり、まったく同じ内容のものでも冊数が変わってしまうことがあるためである。これらのことを合わせると、本書は科挙の受験用に図や註釈を盛り込んで編集された道家三子の古典解釈書であるということがわかるのである。

本書についてももう少し詳しく紹介すると、これは中国で南宋末～明前期にかけて、覆刻された『纂図互

註六子全書』の中の道家三子の部分である。「六子全書」の「六子」とは道家のほかには儒家類に属する「荀子」「揚子法言」「中説」を指すが、六子の揃いはめずらしく、本書の同版は日本では静嘉堂文庫が六子の揃いを所蔵しているほか、天理図書館、内閣文庫、宮内庁書陵部に一部があるにすぎない。

また蔵書印からは清末の文人で蔵書家としても名高い傅増湘（フ、ゾウショウ）の旧蔵だったこともわかる。この傅増湘という人物は清時代には袁世凱の秘書、民国成立後は王士珍内閣の教育総長、故宮博物院館長などを歴任した。『雙鑑樓善本書目』『藏園羣書經眼録』『清代殿試考略』等の著作があり、1929年11月、故宮博物院図書館長時代に中国の古典籍を捜すために来日している。数十万巻に及んだとされる彼の蔵書は現在、中国国家図書館（北京図書館）と四川大学図書館に所蔵されるが、一部日本の天理図書館にも入っている。本書は現在、料紙、版式などから元版を明代前期に覆刻したものとされているが、傅増湘の『雙鑑樓善本書目』では元版とされている。これは『雙鑑樓善本書目』自体が蔵書を売却するための宣伝を目的としているところがあるためで、版本の記述は必ずしも正確ではない。傅増湘のような場合は他人の蔵書については厳しく鑑定し、自分の蔵書については高く売る目的で実際よりも版を古く鑑定する場合が少なくなかった。しかし、これは現代にも当てはまることで、その道の権威であっても、自分の蔵書に対しては、どうしても見方が甘くなってしまうものである。

筒井 利子
(三田メディアセンター)

目 次

巻頭言

新たな戦略が求められるメディアセンターの活動

ーメディアネット所長に就任してー	細野 公男	1
図書館の風景	伊藤 行雄	4
デジタルライブラリ	原田 賢一	5
e-journal から想像するメディアセンターの未来?	駒井 正晶	6
本部事務長に就任して	天野 善雄	7

特集 図書館を結ぶ新しい協力のかたち

ライブラリーシステム研究会の経過とシステムの課題

図書館システムの標準化に向けて	入江 伸	8
危機に直面する洋雑誌コレクション		
ーよりよい洋雑誌コレクションの構築をめざしてー	廣田とし子	12
SPARC 活動とは：学術出版と大学資源との協力活動と今後の		
日本における学術コミュニケーション	加藤 好郎	17

義塾図書館における分担収集（保存）計画の実現

ーリソースシェアリング委員会報告ー	武 正恒	22
致道ライブラリーの開設	和田 幸一	24
看護医療学図書室によるこそ	吉沢亜季子	28
来往舎レファレンスライブラリーの開設	山田 雅子	31
三田メディアセンターにおけるエブックメーカー的な閲覧サービス	村上篤太郎	34
たとえば図書館システムの立上げ		
ー私のアイデンティティ、数理科学科図書室ー	入田 悦子	38
コレクション『創想ライブラリー』	宮入 暁子	40
SFCにおけるマルチメディアサービス	関 秀行	41
図書館・情報学科開設50年	田村 俊作	45
アダム・スミス自筆書簡をめぐって		
ー選定から資料保存までー	市古 健次	49

海外レポート

大学院生として体験したノースカロライナ大学

チャペルヒル校の図書館情報サービス	酒井由紀子	55
サンディエゴ生活	和田 幸一	60
UCSDでの6ヶ月	古賀理恵子	61
アメリカの図書館員から学んだこと	三瓶美和子	62
環太平洋電子図書館会議について	加藤 好郎	63

ティールーム

進化する教科書の物語	加藤万里子	21
闘病記つれづれ	小池 智子	44

スタッフルーム

思い出つれづれ	森園 繁	52
メディアセンターでの二年半	岡林 隆	65

資料紹介

慶應義塾大学日吉メディアセンター編『情報リテラシー入門』	平尾 行藏、山田 雅子、藤井 康子	62
------------------------------	-------------------	----

資料

スタッフによる論文発表・研究発表	67	
年次統計資料	71	
纂図互註老子道德經二巻纂図互註南華真經十巻冲虚至徳真經八巻	筒井 利子	表Ⅱ
三田メディアセンター小展示ニュース	20	
日吉メディアセンター企画展示一覧	23	
慶應義塾図書館貴重書展示会	48	
三田図書館・情報学会月例研究会	85	
編集後記	86	

巻頭言

新たな戦略が求められるメディアセンターの活動 —メディアネット所長に就任して—

ほそ の きみ お
細野 公男

メディアネット所長
メディアセンター所長
三田メディアセンター所長
慶應義塾図書館長



1. 図書館を取り巻く環境の変化

図書館はしばしば社会の縮図といわれるが、もしそうであるのなら、大学図書館は、大学という社会の縮図ということになる。今日大学を取り巻く研究・教育環境は、多様化・複雑化の一途を辿っており、自己点検・自己評価への取り組み、21世紀COE (Center of Excellence) 計画への対応、専門大学院の開設など、大学は大きな転機を迎えている。そしてこうした動きに適切に対応し、支援機能の整備・充実に一層貢献することが、図書館に求められている。

ITの著しい進歩と普及によって、情報へのアクセスの仕方や利用形態に生じた著しい変化も、図書館の活動に大きな影響を及ぼしている。インターネットやI-モード(携帯)を介したキャンパス外からのアクセスは、ごく普通のこととなった。これは図書館・情報サービスを提供する場が、図書館の外へと大きく広がりつつあることを示している。また、電子ジャーナルやデータベースなどの電子メディアの増大も、この傾向に拍車をかけている。

インターネットの普及は、利用形態の変化や電子メディアの増大だけでなく、図書館を取り巻く情報流通体制・制度の変容をももたらした。たとえば、デジタル資料の利用に関しては、著作権ではなく契約が大きな力を持つようになり、新たな対応が迫られている。また、情報入手の方法の多様化、複雑化が進み、個々の図書館がそれぞれ独自に取り組むことが困難になりつつある。その結果、コンソーシアムの形成など有機的な協力体制の整備が、ますます重要になった。

このような現象・事態は、今後図書館が大きく変貌しなければならないことを物語っている。従来のパラダイムに対する挑戦に直面しているのであり、業務体系の見直しや意識改革などが必要である。これは図書館にとって大きな負担となることは間違いない。

しかし、大学における研究・教育環境の激変、ITがもたらした革命は、図書館の役割・活動に新たな可能性をもたらしたことも確かである。その顕著な例が学内からの外部への情報発信における図書館の関与、貢献である。現代社会が大きく変容する中で、大学がその使命・役割を適切に果たし影響力を維持するためには、情報発信が不可欠だからである。ITの発展は技術的には情報発信を非常に容易にしたが、情報の無秩序な生産、蓄積、発信がもたらす弊害も目立つようになってきた。情報の管理に関しては、図書館は豊富な知識、経験、ノウハウを有しており、効果的・効率的な情報発信体制の確立に、大きな役割を演じることができよう。

科学技術・学術審議会のデジタル研究情報基盤ワーキング・グループから審議のまとめとして出された『学術情報の流通基盤の充実について』では、大学から発信される学術情報が簡便に利用できるようにするために、情報の総合的な発信窓口を設置し統一的な規約によって発信する必要があることが、指摘されている¹⁾。今後学内外で多くのデジタル資料が生産されるようになることは確実であるが、それが無秩序に発信されるのは望ましくないからである。

2. メディアセンターの今後の戦略

メディアセンターは、前述した社会環境の変化、時代の要請に的確に対処できるように、日々努力を重ね情報提供サービスの高度化に努めてきた。少なくともわが国においては、先導的な役割を演じてきたことは自他ともに許すといってもよからう。したがって現在求められるのは、この路線を今後どのように発展させていくかを考えることである。

そのための方向としては二つ指摘したい。そしてこの二つは相互に密接に関連しているといえよう。

一つは、ITの進歩と普及を勘案して、既存のサービスの質を高めることと、多様性を増すことである。これは従来型のサービスの延長として捉えることができる。たとえば、電子ジャーナルなど外部から得られる情報や、学内で生産されるデジタル資料の提供体制をさらに高度化することである。また、端末機器を設置したオープンエリアのあり方の再検討も考えられる。法科大学院などの専門大学院および既存の学術大学院での研究・学習環境は、メディアの多様化の進展にあわせて新たな視点から捉える必要性が生じ得るからである。したがって、IT利用の側面からの支援をさらに高めるための方策を展開し、より効果的な情報提供体制を確立する必要がある。

電子ジャーナルで代表されるような外部から入手するデジタル資料の増大は、従来の図書館業務に大きな影響を及ぼす。また、学術雑誌の価格の高騰は、雑誌の購読中止を招きかねず、研究・学習環境の低下をもたらす。電子ジャーナルの購読に関しては、国の助成と複数大学間でのコンソーシアムの設立による対応が不可欠である。62の国立大学では平成14年度予算で生命科学分野の電子ジャーナルを体系的に購読するための経費が措置されている。私立大学図書館においても同様な援助が得られるように、強気に働きかける必要がある。

デジタル資料の増大は、蔵書つまり所有するという考え方を弱め、外部情報の中継役としての役割を強めることになりかねない。これは情報流通を仕切ってきた図書館の立場を相対的に弱め、その影響力の低下につながる。このような事態を回避するためには、たとえば図書館間での協力によって共同購入・共同利用を図るなどして、できるだけ多くの学

術雑誌の利用機会を保証する方策をとらねばならない。コンソーシアムの形成はその一方法だが、国立大学図書館における活発な活動に比較して、私立図書館界ではその動きが鈍いようである。これは機関間の格差がその一因といえようが、なんらかの打開策を考えていく必要がある。

所蔵する資料のデジタル化を行ってそれを提供する体制の確立も、今後の課題である。メディアセンターが作成に係わった学内でのデジタル資料には、日本石炭産業関係資料、慶應関係写真資料、雑誌『三田文学』関連資料など種々あるが、その多くは実験的・試作的色彩が強い。利用に供しているのは、『慶應義塾図書館史』、『慶應義塾写真データベース(福澤諭吉の留学時代から現在のキャンパス風景にいたるまでの写真資料)』、『両羽博物図譜』のみである。国立大学図書館では平成7年度以降、電子図書館システムの開発・運用を行うための経費が措置されているので、定常業務の一環としてデジタル化を推進することが可能である。一方メディアセンターでは、予算の制約上こうしたプロジェクトを遂行することは、なかなか難しい。何らかの知恵を絞る必要があるといえよう。

しかし、従来のアナログ資料(印刷形態をとる資料)がないがしろにされることがあってはならない。アナログ資料の充実は依然として非常に重要であり、今後も十分整備していくことが不可欠である。この二種類の資料を有機的に組み合わせることによってのみ、初めて効果的な情報提供サービスが可能になるからである。

二つ目は、学内で発生する調査・研究の成果としてのデジタル資料の管理と、インターネットを介したそれらの外部発信に、深く関与することである。つまりデジタル資料の一元管理の母体となるとともに、学内・学外への情報発信を行うための拠点として機能することを目指すべきである。これは大学図書館の新たな使命であるといっても過言ではない。これまで学内において図書館以外でも種々の書誌あるいは数値データベースが構築されてきたが、近年はイメージの形態をとる資料も作成されている。これらは研究・教育を遂行するための資源として貴重であるので、単に作成するだけでなく、広く世界的に利用できるようにすべきである。

そのためには、学内に存在するデジタル資料の所在・状況を把握し、一元管理するための目録 (Association of Research LibrariesのDigital Initiative Databaseと同種な目録) を作成・維持すると共に、現物の管理も行う必要がある。膨大な経費を投じてデジタル化した資料が、数年も経たないうちに所在不明になったり消滅してしまうことがよくある。これはデジタル資料の本質的な欠点である。また、メタデータや著作権などの管理も忘れてはならない。

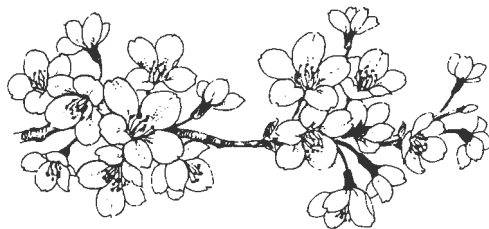
学内でデジタル資料の生産に関連する組織として、DRM (デジタル・コンテンツ研究運用機構, Digital Content Research & Service Museum) がある。DRMの事業の中には、「各種資源の整理・統合・デザインに関わる基本構想の検討と実践」、「各種資源のデジタル化・ネットワーク化に関わる全塾的連携の検討と実践」があげられている。こうした事業にメディアセンターは、種々の面で貢献することができよう。たとえば、慶應義塾がもつこのような情報材を世界的に認知させるためには、RLG (Research Libraries Group)が行っている Cultural Materials Initiativeに参加することが必要である。さらに、資料の電子化にあたって大学内および大学

間で事前に情報を交換して、電子化の重複を避けるようにすべきであるが、そのための調整業務にも携わるべきであろう。

今後のメディアセンターは、ITを活用することによってより費用対効果比の高い図書館サービスを展開することと、学内外を問わず学術情報の流通体制の整備に貢献すべきである。後者に関しては、学内のデジタル資料を外部へ発信するための窓口となるよりも、統一的な情報発信体制の確立も含めた情報管理に主体的に関わることに、重点をおくことが望ましい。この種の業務は図書館が最も得意とする分野だからである。メディアセンターに対する期待や要望は、今後ますます強まろう。それに的確に応え、激動期にある大学の研究・教育をこれまで以上に支援するためには、新たな活動を構想しそれを実現する戦略が必要なのである。

- 1) 科学技術・学術審議会 計画・評価分科会 情報科学技術委員会 デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ. 学術情報の流通基盤の充実について. 平成14年3月12日.

〈2002.9.17 受理〉



巻頭言

図書館の風景


 いとう ゆきお
 伊藤 行雄

(日吉メディアセンター所長)

前期の授業もようやく終わりに近づき、イチョウ並木の緑がいつそう色濃くなる頃、日吉の図書館は試験準備の学生たちであふれかえる。新たな学年での最初の年中行事をまえにして、ノートが飛び交い、携帯電話で情報を交換する学生の姿が見られたとしても、けっしてめずらしい光景ではない。刊行されたばかりの、闇の情報誌に裏切られてあわてふためくもの。キーボードをたたきながら文献検索の旅路につく学生たち。これも豊かな自然に恵まれたキャンパスの、さわやかな青春のひと齣である。

とはいうものの、図書館を日々のすみかのようにして勉強している学生たちにとって、試験のためにだけ入館する学生は、たいてい迷惑な存在なのだ。人をはばからずにおしゃべりの花を咲かせる数人のグループ。花はつぎつぎと蕾を開き、やがて談笑の渦をまきおこしそうな瞬間がくる。こうしたふらちな利用者に声をかけ、静粛を呼びかけるのもスタッフの仕事のひとつなのだ。忙しい業務の合間をみて館内を巡回してまわるという役割など、できれば避けたい仕事だと思われるが、ルールをまもれない学生がいる以上、これを看過することはできないだろう。

さて、試験が終われば学生たちには長い夏休みが待っている。サークル活動やアルバイトに精をだすのもいい経験だが、きびしい受験戦争をたたかいぬき、ようやく本来の勉学の道を歩みはじめた学生たちにとって、そうした日々を送るだけではけっして賢明な過ごし方だとは思えない。この季節はアルバイトや旅行の準備とはちがう、はてしない知への冒険の旅立ちの季節でもある。

この旅立ちの準備は、じぶんが創造的な知の現場に立っているという認識からはじめなければならない。じぶんの内側にひそんでいる感性を刺激し、養い育てる場をもとめている学生が多く存在するのは事実である。ある課題に直面してその意味を問い、問題を展開し結論をもとめる。こうした基本的なトレーニングを、学生時代のできるだけ早い時期に経験することができればその後の学生生活がいつそう

豊かになる、というのが私の考えである。それにはまず、かなり負担に思われる演習やセミナーに積極的に参加して、じぶんに磨きをかけることが何よりも大切なのだ。そのとき図書館は学生にとってもっとも知を刺激する楽しい場所となるはずである。

しかし、情報通信技術が猛スピードで進歩していく時代に、文献資料を探し、必要な情報をもとめるにはその検索方法の技術やさまざまな知識を習得しなければならない。カウンターで丁寧に教えてもらうことも可能だが、それにはおのずと限界がある。

幸いに、情報リテラシー教育が各学部の協力を得て、年ごとに学生のあいだに浸透しつつある。また、今年の5月には事務長の平尾行蔵、レファレンスデスク担当の山田雅子、藤井康子の諸氏による『情報リテラシー入門』（慶應義塾大学出版会）が出版された。学生たちが「情報リテラシー」の授業を聴き、本書を利用することによって、最新の情報環境をじょうずに活用できるようになれば図書館利用者としては本物である。

日吉の図書館と学生とのことばかりに話が終始してしまっただが、2月に来往舎の完成と同時に開設された「レファレンスライブラリー」の運用の方法や、7月にスタートした「教養研究センター」にたいしてメディアセンターがどのような支援を提供していくか、また、あらゆる分野の研究者にどのようなきめ細かい支援体制を構築していくか、日吉キャンパスの今後を考えるうえで重要な課題も山積している。

メディアセンター所長に任命されて間もなく10ヶ月。日吉図書館の建設委員会のメンバーの時代から図書館についてかなり知っているつもりであったが、定例の委員会や会議にできるようになってそれが誤りであることがわかった。仕事熱心なスタッフのあいだで教えられることの多い日々を過ごす昨今である。

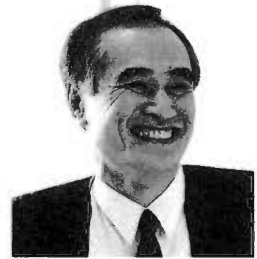
<2002.8.31 受理>

巻頭言

デジタルライブラリ

はらだ けんいち
原田 賢一

(理工学メディアセンター所長)



理工学メディアセンターの所長をお引き受けして、ちょうど一年になります。就任後の間もない頃、事務長をなさっている廣田さんから当センターの概要や当面の課題などにつきまして、説明を受けました。一番の問題は、学術雑誌、特に洋雑誌の購読料の高騰でして、今年度は予算の70.0パーセントをこの費用に当てる予定です。研究書や解説書も、科学技術の発展と新しい研究領域の創造とともに絶えず整備していかなければならないことは当然ですが、とりあえず最新の研究成果を得るための雑誌の購読を維持していくことに対処するのが精一杯、それどころか購読雑誌を切り詰めなければならない状況にまで追い込まれています。

この問題の解決のためには、狭隘化への対処も含めまして、IT技術つまり通信とコンピュータを利用する技術に期待したいと思っています。私の専門はコンピュータソフトウェア、それも特殊なソフトウェアに関する研究です。このような事情から、私の周囲の研究が図書館のデジタル化にどれくらいお役に立てそうかということ、現実を離れてときどき考えることがあります。

以下は、単に技術的な側面だけからのお話です。図書に関する情報とその中味(コンテンツ)がすべてデジタル化されていると仮定してのことですが、各メディアセンターをインターネットで接続することによって、見かけ上、慶応義塾に唯一の図書館が実現できるはずで、そうならば、キャンパスや開館時間にとらわれずに、いつでも、どこからでも閲覧できるようになります。つまり、資産の共有と随時・即時の利用が達成でき、場所も取らなくて済み、貸借の手間や返却の催促も軽減されます。このようなバーチャルな図書館同士の接続を拡大し、相互運用の形態をとれば、全国規模、地球規模での図書の共用化が可能になるはずで、

音声や動画なども含め、デジタル化されて送られてきた図書は、コンピュータによって自動的に分類・整理され、データベースに格納されますから、人手による登録作業は不要になることでしょう。

図書の検索と閲覧については、そのためのソフトウェアを利用者が直接用いるかわりに、いま注目を集めているモバイルエージェントと呼ばれる技術を利用すると、個人をソフトウェアの形に変え、それを世界中の図書館に送り込むことによって、希望にそった文献だけを選択して手元に返信させるということも可能です。つまり、個人の希望に沿った文献を集めてくるようにコンピュータの中からプログラムを発生させ、それを各バーチャル図書館に送信し、そこでこのプログラムを実行してもらいわけです。このエージェントは、いくらでも複製できますから、自分を何人も複製して地球規模で一斉に文献の収集ができることになります。その結果は、電子メールと同じように、自分の都合の良いときに開いて読むことができます。さらに、機械翻訳の技術が飛躍的に向上すれば、収集してきた文献はどれも自然な日本語の文章で閲覧できるようになります。

こんなことを想像しますと、図書館は、何坪かの場所を使って、コンピュータと超大容量の記憶装置、それに超高速の通信回線によって置き換えられ、メディアネットの中核部として収まることになります。

以上は勝手な想像ですが、IT技術は現在も目まぐるしく変化しながら発展していますので、技術の成熟を待たずにシステムを刷新することは、利用者の方々の便からも、また制度・運用上からも無理なことは明らかです。当センターは、スタッフの方々の努力によりまして、着実な足取りでデジタル化へ向けて進展しています。ささやかですが、現在、修士・博士の学位論文のデータベース化を試みています。始めに申し上げました問題に対処していくために、当面は、資源の共有化と電子ジャーナルの共同契約の推進とともに、学部内コンピュータネットワークの利用を考えまして、ITCからの一層の技術援助をいただきながら、安定した技術に基づく図書館のデジタル化を推し進めていく必要があると強く感じています。

〈2002.9.10 受理〉

巻頭言

e-journal から想像する
メディアセンターの未来？こま い まさあき
駒井 正晶

(湘南藤沢メディアセンター所長)

慶應では図書館でなくメディアセンターと呼ぶんですよと外部の方にご説明すると、いったい図書館とはどう違うのかと聞かれます。ちょっと困ることが多いのですが、心の中では、図書館+情報技術(IT) = メディアセンターという風に勝手に解釈しています。

図書館に付加されたITは、蔵書に関する情報のデジタル化と蔵書そのもののデジタル化の2つに大別できます。前者は蔵書カードが姿を消したことに象徴されますが、これだけではメディアセンターと呼ばれることは決してなかったでしょう。後者を象徴するものとしてはデータベースの充実なども考えられますが、私にとっては電子ジャーナル(e-journal)の導入です。

SFCでは、現在約3500タイトルの定期刊行物を電子ジャーナルの形で読むことが可能です。SFCで継続購入しているものに限れば、洋雑誌の約半数、和雑誌の約2%が電子ジャーナルの形で提供されています。私たちは雑誌記事の多くを自分の研究室やその他の場所で画面上であるいは紙に印刷して読んでいます。

e-journalの導入は利用者とメディアセンターの両方に多くの便益をもたらします。まず利用者にとっての利点としては、メディアセンターに行かなくても済むことによる、あるいは誰かが読んでいて待たなくてはならなかったり、どこか別の棚に入っていたりといった恐れがないことによる時間の節約、第二にメディアセンターが閉まっている時間にも読むことができるという時間の自由の2点があげられます。メディアセンターのもつ雰囲気が好きで足を運ぶことが苦痛でないとしても、時間の自由という利点は研究者にとって極めて大きいものではないでしょうか。

一方、メディアセンターにとっては、第一の利点は場所の節約です。SFCのメディアセンターでは年間に2万冊のスピードで蔵書が増えており、あと2年でスペースが足りなくなると予想されています。

もちろん定期刊行物だけが蔵書ではありませんが、e-journal化がこの問題の緩和に寄与することは間違いありません。第二の利点は、蔵書管理に関する業務の減少です。具体的には、新着雑誌の登録や配架、バックナンバーの製本、書架の並べ替え等々、冊子体で受け入れることに伴う人員と経費の両面での負担は大きいものがあります。第三は災害時の問題です。アレクサンドリアの図書館はまるごと焼失したということですが、メディアセンターが万一何らかの災害に巻き込まれたとしても、e-journalであればその後の利用が不可能になるわけではありません。

もちろん問題点もないわけではありません。一つはいわゆるデジタル・ディバイド的な問題ですが、これは存在するとしても、間もなく問題ではなくなるでしょう。しかし、e-journalに固有の問題点として、ブラウジングを行うのが困難であることが指摘されています。今後ブラウジング機能を向上させることは期待できそうですが、現状では問題があることは否定できません。第三は災害の問題です。これは上記の利点のコインの反対側ともいえるもので、出版社などのサーバーが災害に見舞われると、利用できなくなる恐れがあります。

長所と短所を考えると、利用者にとってはe-journalと冊子体の両方があればそれに越したことはありません。しかし、場所の節約と蔵書管理の簡略化の実現には、e-journalが冊子体に代替していくことが必要です。このようなことが、和雑誌へ、そして一般の図書に及べば、メディアセンターの姿は一変するでしょう。私の研究分野の周辺では、情報技術の発展にともなって、都市の終焉ということがいわれるようになってきました。どこからでも情報にアクセスできるようになれば、情報センターとしての都市は終わるという発想に基づくものです。とすれば、情報センターそのものであるメディアセンターの行く末はどうなるのでしょうか。もちろん、都市の終焉論には多くの反論が寄せられています。

<2002.9.18 受理>

巻頭言

本部事務長に就任して

あまの よしお
天野 善雄

(メディアセンター本部事務長)

今年6月に4年半ぶりにメディアセンターに戻ってきました。図書館・情報学分野は、それでもなくとも進歩の速い分野だと言われているようですが、私がメディアセンターを離れていた4年半は、特に色々な事柄が大きく変化した時期であったのではなかったでしょうか。紙媒体による情報伝達手段の電子化が急速に進展し、今や自然科学系では、冊子体の雑誌発行数を電子雑誌発行数が凌駕する勢いを示しています。その昔はデータベースといえば、図書や雑誌を検索対象とするものが一般的であったと思いますが、今日では、そうした捉え方だけでなく、この数年間に爆発的に増大してきたWeb上の学術的なホームページやデータベースといった情報資源をメタデータとして組織化しようという動きが世界的に浸透しているようです。Web上の情報資源は、学術的であろうがなかろうが、全く無秩序な状況に置かれていることは確かだと思います。こうした状況をそのままにしているのは、将来に大きな禍根を残すことになるでしょう。

一方メディアセンターとしてもこの間にずいぶん大きな変化を遂げました。各地区メディアセンターで行っていた資料整理業務を本部で集中的に処理しようという、いわゆる集中処理機構の出現です。この集中処理機構導入の基本理念は、各地区メディアセンターの資料整理要員が要らなくなることで、人員削減を行うと同時に、利用者サービス部門に不足している要員を振り当てるという、リエンジニアリングを推し進める点にありました。集中処理機構が立ち上がっておよそ4年経過した現段階では、そろそろ機構そのものを見直してみる時期にきているのかもしれませんが。集中処理をすることによって、改善された点、逆に不具合が生じた点など、色々精査してみる必要があるだろうと思います。

他方では、私が4年半前にメディアセンターに在籍していた頃に抱えていた問題がそっくりそのまま今に至るまで継承されているものもあります。それは書庫の狭隘化であり、資料、特に洋書の高騰化の

問題であります。現在本学の5つのメディアセンターでは1年間に約9万冊強の蔵書が増加しています。いくら電子化が進んだとはいえ、小さな公共図書館規模の蔵書が、文字通り年々増殖しているわけですから、これを収容する器には余程のサイズが要求されるはずですが。メディアセンターとしては、山中湖にある保存書庫棟に加え、横浜市白楽にある企業の倉庫を借り受け、古くなった各地区メディアセンターの蔵書を収蔵し、職員を配備して、サテライトセンターとしてこれを活用してきましたが、収容能力50万冊程度では、それこそ瞬く間に限界を超えることははっきりしています。平成13年度末で、既に各地区メディアセンターから40万冊規模の蔵書が収容されています。将来にわたり、慶應義塾大学として所蔵すべき適切な蔵書規模を明確にした上で、その規模と現有の収容能力とを比較して、不足する書庫スペースを計算し、どこにどのような書庫を備えるべきかを、大学当局に示し、理解を求めていく必要があるのではないのでしょうか。洋書の高騰化は、皮肉なことに洋書の利用が活発な医学・理工学系で顕著に現れているようです。例えば理工学分野では、再三にわたり、洋雑誌の購入を打ち切るという措置をとらざるを得ない状況に追い込まれています。研究者や学生にとって有用な情報が年々増えていく中で、こうした措置をとることは大変残念なことだと思います。図書予算の編成や配分方法を変更するなど、思い切った発想の転換が求められているのかもしれませんが。

6月に就任してから約1ヶ月間、私は本部の職員をはじめ各地区の多くの職員と面談を重ねてきました。色々な立場の職員の話しを聞くことによって、これからのメディアセンターにとって何をすることが大切なのかを把握したいと思ったからです。面談を通じていくつかのポイントは明らかになってきました。それらの解決に向けて、担当理事、所長等のご指導を受けながら、各地区事務長と共に進んでいく所存ですので、どうぞよろしくお願ひいたします。

〈2002.8.22 受理〉

ライブラリーシステム研究会の経過とシステムの課題 図書館システムの標準化に向けて

いりえ しん
入江 伸

(メディアセンター本部課長)

はじめに

2001年9月20日、第1回ライブラリーシステム研究会を慶應義塾大学三田キャンパス北館で開催した。この研究会には私立大学の図書館システム担当、図書館システムメーカ、書店のシステム担当、さらには国立情報学研究所(以下NII)、国立国会図書館など、合わせて40人もの方々に参加していただいた。この参加者の多様さが研究会の特徴といえる。

参加者は、図書館と図書館システムの関係者が集まり、一緒に勉強し、システムの標準化を考え、普及していこうという呼びかけにこたえてくれた方々である。呼びかけは早稲田大学の金子昌嗣氏、丸善の佐藤康之氏、紀伊國屋書店の加茂健二氏と筆者の4人で運営委員会を作って行なった。

この報告では、研究会発足の過程と意義を個人的な立場で解説しながら、これからの図書館システムの方向性について考えたい。

1. 研究会発足の背景—図書館のおかれた現状—

日本の大学図書館をめぐる経済的環境は日々を追う毎に悪くなってきている。この背景として、高等教育をめぐる環境の悪化が言われるが、現在の大学図書館をめぐる危機の原因はそれだけではない。これまで図書館という組織が、大学の経営部門に対してその努力を積極的に「説明」してこなかったために経営的な信頼感を失っていることが危機を一層深めているように思われる。また、システムの部分では、図書館実務とそれを支える研究開発的機能との連動が効果的に行なわれてこなかったことも、その原因の一つかもしれない。

図書館システムでは、NIIとの連携以外の標準化がほとんど進んでこなかったことに顕著に表われている。図書館システムメーカは、NIIからのインターフェース仕様と、現場からの個別要求の間で終

わりのない修正作業を繰り返している。この状況が図書館システムメーカの担当者から考える時間を奪い、システムの専門家の観点から図書館へ提案する余裕を与えない要因となっている。また、図書館システムのSEは驚くほど図書館を知らない。このような状態で業務システムのデザインをしても、いいものができるわけがない。図書館システムをデザインするSEに業務を知ってもらおう努力は図書館業界の仕事だと思う。

一方、図書館の現場でも、システム開発に対する能力は落ちている。15年前の大学を考えてみよう。図書館は事務部門の中でも、汎用コンピュータを使いこなしていた部門で、多くの大学で独自に図書館システムを開発していた。システムの複雑さ、技術の高度化などの要因はあるが、当時に比べ図書館のシステム部門は力をなくしている。その理由を考えると、図書館システムというものが変化し、システム開発を図書館で抱える必要性がなくなってきたこと、図書館での開発技術を担う人が採用されなかったこと、新しいサービス(デジタルサービス)への対応のためにスタッフが分散していったこと、図書館でのスタッフのジェネラル化が進んでいったことによると思われる。一方で専門スタッフの育成を言いながら、片方でスタッフ不足をアウトソーシングで補うために管理的な能力が必須となり、業務の空洞化を補う専門的なスタッフの育成についての戦略は明確となっていない。

この15年間、図書館システムの標準化はNIIが進めてきた。この標準化は現場からの意見としてまとめられたものではなく、中央集約型で政策的、かつ強力な指導力があったため、個別の大学はNIIへの依存心を強めていった。NIIの共同利用目録はTRC-MARCと同様に図書館目録システムの標準化を作り出すことに成功し、その功績は大きい。しかし、極めて強力であったため、現場での計画立案や標準

化のための努力を不要にしていった。そのため、NII以外の要望は、各図書館の現場担当者の業務を背景とした個別のものであり、この個別の仕様の実現へ右往左往するのが図書館システムメーカーであるという図式ができあがった。

この責任はメーカー責任と言うより、その方向性をはっきりさせることのできない図書館業界にあるだろう。情報サービスが国際舞台で戦われている中で、図書館システムがこのままであっては戦えない。米国や近隣の国では国際舞台をターゲットにしたシステムが開発され、日本への販売網を広げている。図書館にとって海外の優れたシステムが一部の国内仕様に合わないという理由で利用できない、ということはサービスの低下につながっていく。また、図書館システムメーカーにとっては、海外のパッケージと正面から戦う時代になっている。こういった図書館の現場からのシステム標準化の流れが極めて重要な課題として認識され始めた現状が、研究会発足へとつながった。

2. 個人的な思いの暴露と研究会

2.1. 図書館をユーザとした仕事

研究会発足の動機と呼びかけたメンバーについて、以前勤務していた平和情報センター時代の仕事と交流について話す必要がある。それはデータ遡及と形態素解析ソフトウェア（Happiness）の導入である。

2.2. データ遡及で考えたこと ―何で標準は一つじゃないの？―

図書館というところと仕事をして一番はじめに驚いたことは、MARCフォーマットだった。区分データセットをモデルにしたレコードフォーマットには汎用コンピュータで可変長文字列を扱おうという意気込みを感じながら、特殊な分野でしか通用しないセンスを感じていた。この思いの中でJP-MARCの解説書を読みながらタグ解析のプログラムを作ったことが図書館らしい仕事の初めだったと思う。初めはCOBOLで書いたが、面倒になってPLIとアセンブラに書き直したことを覚えている。その後データ遡及用ツールとして、JP-MARCの加工ツール、すなわちJP-MARCデータへの漢字分かちなどのアクセスポイント付与プログラムを作った。そのうちに

LC-MARCコンバータを作る話になったが、インディケータが何やら分からなくて手を出せなかった。米国はLC-MARC、日本はJP-MARCという対応関係は目録規則と文字コードの違いからある程度仕方がないこととして理解していたと思う。その後、学術情報センターが影響力を持つようになり、NCフォーマットにしばしば出くわすようになる。このNCフォーマットによって、書誌階層ブームが全国の図書館を巻き込んでいく。この頃よく作ったプログラムはJP→NCコンバータ、NC→JPコンバータ、TRC→JPコンバータ、JP階層化プログラムなどであった。NCは和書・洋書が同一フォーマットであり、インディケータもなく、プログラマにとっては理解しやすかったが、記述形式が複雑であり、区切り記号が正しく記載されていないことが多くてエラー処理に苦労した。その頃、強く思っていたことは、思想の違うデータをどんなプログラムを書こうが同一データにはできないということである。プログラムを通せば通すほどデータは劣化していく。目録データについては可逆的なコンバートは不可能である。どうして同じ図書の見出しを取るのに何種類かのフォーマットと異なる規則が存在しなければならないのだろうと強く感じながら、一方でそのプログラム開発はソフトハウスとして比較的収益のよい仕事だったので、夜なべをしてプログラムを書いていた。

2.3. Happinessとともに ―デファクトスタンダードの意味―

もう一つの仕事は、Happinessというキーワード自動抽出(自動分かちとも言われた)ツールの図書館システムへの組み込みであった。

国立国会図書館の一部や学術情報センター、早稲田大学での採用もあり、比較的高価ながらも図書館界ではデファクトスタンダードに近い感覚があった。そのためHappinessの処理結果が一つの基準を作っていた。そもそもHappinessは文献情報検索でのキーワードを均質にするためのソフトであったため、図書館のように書名だけを処理することを想定していなかったが、分かち文やキーワードという文化が深く根付いていたために普及していったのだと思う。ここで面白いことは、ツールが普及し、標準的な地位を持ち始めると、それに合わせるように

〈特集〉図書館を結ぶ新しい協力のかたち

周りが動いていくようになり、そのツールが異なるシステムを関連づけていくようになるということだ。システム基幹部分の機能的な各ツールの標準化は、そのような役割を果たしていくことを実感してきた。ある時期、Happinessの組み込みによって、いろいろなメーカーや図書館と話し合う機会が生まれ、そのことが標準化を考えるきっかけを作ったと言える。Happinessはまた、メーカーや図書館との対等な付き合いを演出してくれた。この話し合いから始まった対等な交流がこの研究会の根底にある。Happinessを媒介にして知り合った大学とメーカーは、早稲田大学（IBM WINE）、慶應義塾大学（Fujitsu iLis）、明治大学（Fujitsu iLis）、中央大学（IBM DOBIS）、同志社大学（HITACHI）、立命館大学（NEC ALIS）、関西学院大学（HITACHI Biblion）、近畿大学（IBM WINE）など多い。このソフトを導入するために、各メーカーのシステムの分析・調査をおこなった。

比較的Happinessは関西地域の大学で多く導入してもらった。これは、ツールのような製品を利用してマネジメントする開発スキルがあったからだろう。関西では、いいものはいいと言ってくれる空気を感じて仕事をしていた時期があった。この気持ちで、第4回の研究会を関西（同志社大学）で開催することにさせたのかもしれない。

2.4. 直接的なきっかけ

3年前に、慶應でもZ39.50 Target開発プロジェクトが認められて開発が始まった。当初の予定では重複チェックの補助的なシステムとしての位置づけであったが、せっかく作るのであればと、きちんとしたTargetを作ることにした。

その頃、Z39.50関連システムで進んでいたのは、図書館情報大学と東京工業大学（以下東工大）だった。東工大は助成金の関係もあり、トータルなシステムを稼働させることが目的だったようで、その時の条件でとにかく稼働できるシステムを目指していた。そのコンセプトは今でも優れたものであるが、標準化の問題もあってパッケージとしては普及しなかった。

慶應義塾大学メディアセンターでは、書誌データの交換を目標に置いていたので、MARCフォーマットにこだわっていた。そのために、東工大のシ

ステムを選択せずに丸善に開発を委託することにした。

研究会発足の直接的なきっかけは、この開発方針のミーティングであった。当時の状況としては、Z39.50を実装しても日本の大学との横断検索をするためには個別のカスタマイズが必要であった。この問題を解決しなければZ39.50システムのメリットを発揮させることができない。分かってはいるが開発コストを考えると大きな現実である。横断検索の最低限のTargetをNII、早稲田大学、東工大、北米の代表的なシステムとした。早稲田はINNOPACに標準装備のTargetがあがっているが、その詳細な仕様は公開されていなかった。開発コストに見合う成果をあげるには、日本で標準化の流れを作らないと一歩も進めない状態だったと思う。

3. いろいろなこと—研究会への個人的な考え—

●SEという職業への不満

SEという職業は大変にインターナショナルな属性を持っている。世界を席卷しているOSは常に米国製だし、国際的な市場競争がすぐに開発システムに影響してくる。こんな世界に生きている職業人が何でアプリケーションデザインとなると自分の意見を持ってないのだろうか。図書館の担当に対しては、その発言を控える人も多い。そもそもアプリケーション開発というものを考え違いしているのではとやんわりと指摘することが多い。

業務担当者や基本的な仕様を論議してこそ意味があると思う。ただ、彼らに図書館という仕事を説明できる機会は少ない。彼らに日本の今の図書館だけでなく、図書館の世界的な流れを紹介できる場所を作りたいと思っていた。これによって図書館システムについてコラボレーションできる環境を整備していきたい。

●標準化と規格

図書システムの標準仕様についての見解を尋ねられた国立国会図書館の担当の方が「私たちは規格委員会（JIS）ではないので回答できない」と答弁したという本当か嘘か分からない話がある。違う話として、いろいろなコードのJIS規格を知らないSEがいることも事実だし、そういうSEが設計したシステムも多いだろう。

この変化の激しい時代において、上からの標準化ではなく、現場での高度な知識とそれを背景にした標準化思考を求められている。現在のNII主導のシステム化では、世界のスピードについていけないという危機感さえも感じている。

例えば、NIIのグローバルILLシステムの開発には少なくとも2年は掛かっているが、OCLC PASSPORTの全てのサービスを受けることが出来ない。必要であれば、2年前にすぐにもOCLCのサービスを受けることも可能だった。日本の大学が米国の大学と真剣に戦おうとしたら、この2年間は短いのだろうか？

●海外パッケージの導入

毎年、開催される図書館フェアでは外国からの図書館システムの出展が見られる。丸善の「校倉」というシステムはオーストラリアのパッケージの日本語化バージョンである。このパッケージはUnicodeで実装されているため、アメリカ・オーストラリア・中国・ヨーロッパでも実績があるらしい。このような外国のシステムを日本の地域性だけで排除することは利用者として損なことではないか。また、この洗練されたシステムと近い将来競合する日本のメーカは戦っていけるのだろうか。日本の図書館が、研究・教育機関として国際競争を戦わなければならない近い将来までに、何を準備しておいたらいいのだろうか。情報産業に携わるものが、国際的に展開されている情報戦争にこれほどまでに無関心でいられるとはどういうことなのだろうか。

●規格に正面から向き合うこと

ちょうど3年程前に、Webの画面をプログラムで解析することによって横断検索をしようという試みがあった。この仕組みは山手線コンソーシアムのOPACでも利用することができる。これで横断検索はできるからZ39.50のような複雑なシステムは不要であるという意見もあった。確かにZ39.50プロトコルは古いが、その時代にデータベースレベルでネットワークを透過するアクセスプロトコルの基準を作って実装していったことの意味を理解しようとしていない。データベース透過の検索システムについて標準化の論議をするということは、データベース構造やインデックス構造まで標準化しようという試みである。Web画面のプログラム解析で話を終

わらせてしまうことは、データベースアクセスレベルの標準化という大きな課題からの逃亡であると思う。

4. 研究会の目標と経過

研究会の目的は、システムの業務レベルの標準仕様を決めていくということである。ただ、共通仕様といっても、実際のシステムへ適用されて、その効果が認められなければ意味がない。また、全く新しい規格を作るには、組織的にも土台がない。システム標準化でもっとも緊急なことは、システム外部インターフェースの標準、特に書誌データベースの検索のための標準は緊急で重要な課題である。そのために、Z39.50の標準化を中心的課題に選択した。

これまでの研究会の詳細と経過については、第4回で早稲田大学の金子氏が発表されているものがあるので、研究会ホームページより参照していただきたい。<http://libsys.lib.keio.ac.jp/>

5. 第5回研究会の予定と今後

Z39.50 Targetの標準としての推奨プロファイルを確認し、国際的な関係機関へ報告するという活動は第5回で最終回を迎える。これからは、このプロファイルの広報とZ39.50の実装、およびこのプロトコルで実装された日本の代表的データベースを公開していく活動が必要になる。今回の議論の基本となっているZ39.50プロトコルはV2.0という1998年に標準化されたものを基本としている。インターネット環境の進化に伴ってZ39.50プロトコルそのものも変化している。この変化にもついていく必要がある。

XML, XPATH, OPEN URLも同様の流れを持つシステムと言える。この勉強を共通しておこなっていく場も必要だと思う。これ以降、研究会をどのように運用するかについてはこれから議論を始める。研究会はとにかく予算がなく、メンバーの方々には手弁当で参加していただいた。講演者へのお礼も十分ではない。

協力していただいた皆様に感謝するとともに数々の無礼をこの場を借りて謝罪したい。

〈2002.10.24 受理〉

危機に直面する洋雑誌コレクション

—よりよい洋雑誌コレクションの構築をめざして

ひろた
廣田 とし子

(塾監局総務部課長)

(2002.10まで理工学メディアセンター事務長)

研究・教育に必要な不可欠な文献を収集しいつでも利用できるように蓄積しておく。それが我々の仕事だ。慶應では長年、潤沢な予算をバックに充実したコレクションを構築してきた。特にSTM系 (Science, Technology & Medicine) と呼ばれる科学技術・医学系において、学術雑誌とりわけ洋雑誌は最も重要なリソースである。医学メディアセンター (医学MC) 理工学メディアセンター (理工学MC) においては、蔵書の3分の2が雑誌であり、雑誌のうち7割以上が洋雑誌であり、さらには予算の7割を洋雑誌購読に支出している。医学MCおよび理工学MCは国内でも有数の科学技術系専門図書館であり、これらの充実した洋雑誌コレクションは塾内の研究者のみならず国内他機関の医学研究者・医療従事者・理工学研究者にも利用され、日本の科学技術研究の発展に貢献してきた。ところが、その洋雑誌コレクションが危うい。本稿では、この雑誌コレクションの危機について概観するとともに有効な雑誌コレクション維持のためにどんな手を打つべきか考察してみた。

1. 洋雑誌価格の高騰とコレクションの縮小傾向

日本国内の洋雑誌コレクションは1990年まで順調に増加してきたが、1990年代に入ってから逆に転じ、近年は毎年のように受入タイトル数が減少している。一方、Ulrich's¹⁾によれば、世界の雑誌刊行数は急増しており、刊行点数に対する所蔵タイトル数の割合はさらに急降下していることがわかる。(図1、2) 世の中に存在する学術情報資源をできるだけ網羅的に収集し備えておくのが大学図書館の使命だと考えるならば、この点において、日本の大学図書館は確実にその能力が低下していると言える。²⁾ 慶應義塾も決して例外ではなく、1990年代前半までは何とかコレクション維持してきたものの、医学

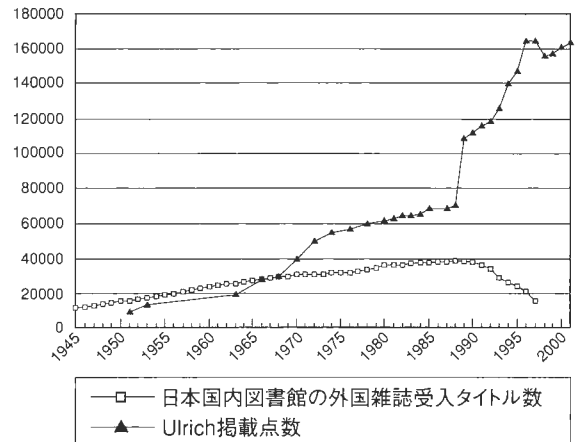


図1 日本国内大学図書館の洋雑誌受入純タイトル数とUlrich掲載点数の推移³⁾

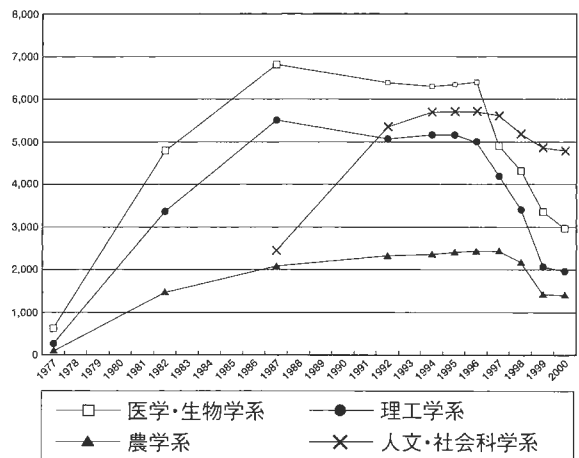
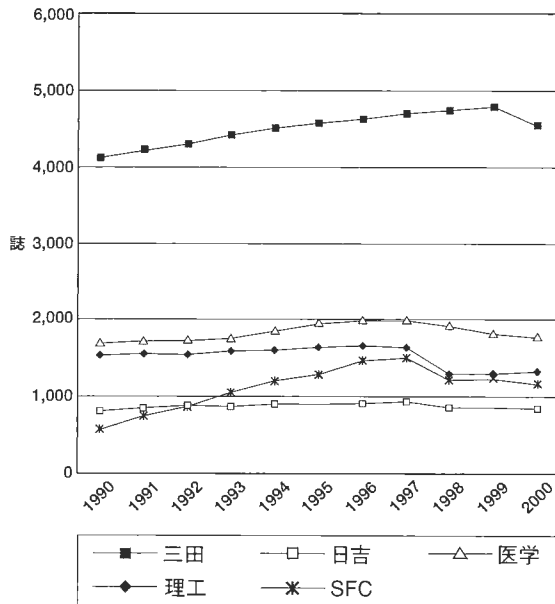
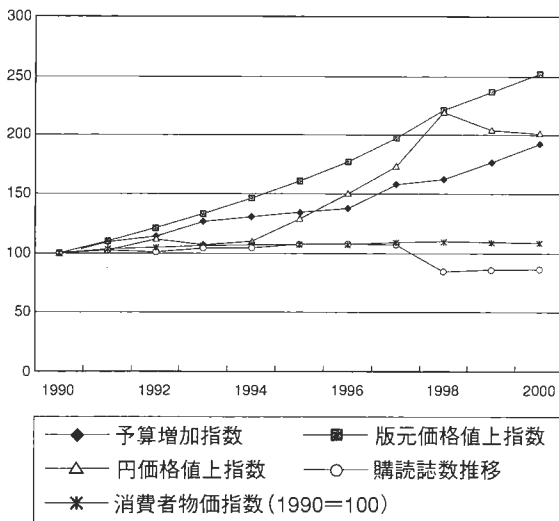


図2 外国雑誌センター館受入タイトル数の推移

1977~2000⁴⁾

MC・理工学MCでは1990年代の後半から減少傾向に転じている。(図3)

これらのコレクション減少はとどまることのない誌代の値上がり傾向の結果である。図4は理工学MCにおける過去10年間の受入種類数、予算の伸び、誌代の伸びを指数化したものであるが、予算の伸びが誌代の伸びに追いついていない様子がよくわかる。このまま図書予算が伸びないと洋雑誌コレクションは縮小するばかりである。

図3 地区別洋雑誌購入数の推移⁵⁾図4 理工学メディアネットセンター図書予算と洋雑誌価格推移 (1990年を100とした指数)⁵⁾

2. 誌代値上がりの理由

過去10年間、誌代は着実に値上がり続けてきた。では、なぜ値上がりするのか？さまざまな原因が言われている。一つには研究成果の増加により、雑誌1誌あたりのページ数が増加していること。例えば、Wileyの刊行する化学誌 *Angewandte Chemie* は1990年の総ページ数1816pに対し、2002年には6100pに増加している。また研究分野の細分化により次々新しい雑誌が刊行されるものの1誌あたりの購読部数は減っており、結果として雑誌の単価が上がっているというもの。また1990年代に

入って各社とも雑誌の電子化に莫大な投資をしており、それが冊子体価格に反映されているというもの。価格値上げは出版社の経営戦略であり、何が理由なのか正確なことはわからない。しかし、最後の電子化云々が図書館側にとっては最もそれらしく納得がいく。値上がりの始まった当初、電子化が一段落すれば価格の値上がりは沈静化と言われていた、しかし今だ値上がりはとまらない。出版社の電子化事業は単なる最新号の電子化にとどまらず、利用インターフェースの開発、バックナンバーの電子化など次々と新しい段階に進んでおり、新しい投資が行われている。

3. 解決策の検討

洋雑誌コレクションの先細りを食い止めるためにはどうすればよいのか？ここではいくつかの可能性について、検討してみることにする。

3.1. 電子ジャーナルへの移行とリソースシェアリング

塾内で重複所蔵している洋雑誌を一本化し、一方、同タイトルについて塾内を1サイトとした電子ジャーナル導入契約を結ぶことによって、より経済的に洋雑誌コレクションを維持することができないだろうか。

2000年に設置されたリソースシェアリングWGの活動によって、塾内の雑誌所蔵状況がわかってきた。2000年6月現在の調査によれば、塾内の重複洋雑誌はのべ3253誌、うち購入誌は2020誌、これら重複しているものをすべて塾内1本化した場合の削減金額はおよそ3000万円と見積もられている。(表1)つまりすべてを1本化すれば新たに3000万円の財源が捻出できるということである。一方、Wiley、

表1 各地区メディアセンターにおける継続洋雑誌重複タイトル数(延べ誌数)

	重複誌数		継続洋雑誌数
	寄贈誌含む	購読誌のみ	
全地区	3253	2020	9691
三田	1172	683	4552
日吉	519	383	841
理工学	297	155	1331
医学	139	89	1786
SFC	958	542	1181
KBS	167	167	NA
看護短大	1	1	NA

2000年度標準統計より

〈特集〉図書館を結ぶ新しい協力のかたち

Elsevierなどいくつかの大手出版社の電子ジャーナルは複数キャンパスを1サイトとして契約を結び、電子加算料金を支払うことによって各キャンパスで分散購読しているタイトルのすべてにどのキャンパスからも同様に電子的にアクセスすることが可能となる。したがって、重複整理による捻出額>電子加算料金となればより経済的と言えそうである。また、これにより、従来地区が所蔵していなかったもの(他地区所蔵のもの)までアクセス可能となり、冊子体整理により、整理のための人件費・製本代・所蔵スペースなどの経費も削減できる。自地区の所蔵タイトルについても研究室にいながらにして利用できるという点で利便性が向上する。しかし、システムの安定性、ネットワークの安定性、保存の問題など、電子ジャーナルの環境が果たして従来の冊子体のコレクションに代替しうるものなのか不安要素もまだまだ多い。(表2)また電子ジャーナルのパッケージ導入は自館の蔵書構築方針を放棄し、予算の運用の柔軟性をより低下させるものだとする意見もある。⁶⁾

表2 電子ジャーナル導入による長所・短所比較

プラス要素	マイナス要素
経費減	経費増
・重複整理による節約額	・電子加算料金
・製本代	
・整理(チェックイン、製本準備等)	
・スペースコスト	

他地区所蔵タイトルへのアクセス	出版社のシステム安定性
検索インタフェースの提供	ネットワークの混雑による影響
研究室から利用可能	保存の保証が不明確
図書館閉館後も利用可能	

このように様々な要因があるとは言え、全く何の手も打たずにただ雑誌コレクションの先細りを待つだけというよりは慎重に道を選んで進む方がはるかに様々な可能性がある。

3.2. コンソーシアムによる電子ジャーナルの導入

前節で検討したようにリソースシェアリングを前提とした電子ジャーナルの導入には一定の効果が望めそうである。では、より効果的・経済的な電子ジャーナルの導入方法はないものか? 欧米ではコンソーシアムによるグループ購入が盛んである。今回人事部主催の国外集合研修に応募し、米国の主要なコンソーシアムを訪問し担当者インタビューする

という貴重な機会をいただいた。ここでは各コンソーシアムの紹介を行うとともにコンソーシアムの効果的な利用法について考察してみる。

3.2.1. コンソーシアムの概要

OhioLINK (Ohio Library and Information Network)

<http://www.ohiolink.edu/>

オハイオ州の大学図書館、州立図書館82館からなるコンソーシアムで、加盟館の分野・規模は多岐にわたる。冊子体の所蔵純タイトル数が1200誌であるのに対し、コンソーシアムによるグループ購入の結果、アクセス可能な電子ジャーナル数は4100誌となっている。従来販売対象とならなかったような小規模大学にも販売することができるため、出版社にとっても魅力が大きい。

独自のサーバに、購入した電子ジャーナルやデータベースのデータが蓄積され、統一インタフェースで加盟館に提供されている。アーカイブが手元に残る、安定したレスポンスが維持できる、サーバに搭載された統計ソフトウェアを蔵書構築に活用できるなどのメリットがある。また運営組織として、加盟館から選出された委員による運営委員会・機能別委員会(蔵書構築委員会、レファレンス委員会、システム委員会等)があり、実務面の方針決定を行っている。館長会議、大学理事による会議体もあり、予算獲得などの面で機能している。これらを事務的にサポートするとともに、出版社との交渉・契約(Executive Director Tom Sanville氏が担当)、サーバの維持管理などを担う専従職員が複数名、オハイオ州コロンバスの運営オフィスに常駐している。州からの資金が全予算の約15%を占め、事務職員の人件費、サーバの維持等の面で、この資金が大きな力となっている。

加盟館のローカルOPACと連携した共通OPACシステムやそこからILLのオンラインオーダーができる仕組みを持つ。また学位論文の電子化や美術品のデジタルイメージ化などの事業も行っている。

CIC (Committee on Institutional Cooperation)

<http://www.cic.uiuc.edu/>

中西部のBig Tenと呼ばれる大規模な研究大学13校のコンソーシアム。図書館ではなく大学本体のコンソーシアムであり、一部門として図書館セクションがある。外部からの資金はなく加盟館の会費

(\$75000) だけで運営されている。6~7名いる職員の人件費ほか事業費が会費でまかなわれている。図書館部門はイリノイ大学アーバナシャンペーン校に設置され、図書館員1名とアシスタント1名が交渉や関連事務を行っている。

各図書館とも大規模であり購買能力があるため、出版社はあまり割引をしない。

その他の事業として、大学出版局と共同で学内業績の電子ブック化を行っている。

NERL (NorthEast Research Libraries consortium)

<http://www.library.yale.edu/NEALpublic/>

アイヴィリーグの大学図書館からなるコンソーシアム。正式メンバー21館、準メンバー35館。正式メンバーは年会費\$3000で運営に対して権限をもつものに対し、準メンバーはライセンスに参加することはできる(1データベースあたり100ドルの手数料+購入実費)が要望を出すことはできない。いずれも大規模の研究図書館であり、独自で契約できるだけの予算規模を持つという点でCICに近いが、CICよりも予算の総額が大きいので、足並みをそろえることによって出版社と交渉し、よりよい条件を引き出している。事務局はエール大学図書館にあり、専従事務員を1人雇用。交渉は、エール大学図書館の蔵書構築担当副館長であるAnn Okerson氏が担当している。

加盟館から各2名登録された代表メンバーが購読希望や購入の検討を行う。5館以上の図書館から購入希望があったものはグループ購入を検討するが、1~2館の場合は事務効率がよくないので、検討しない。検討の結果、購入することが決まると交渉に入り、条件が決まると契約書を交わす。請求書はエール大学に送付され、各館からお金を集めて業者に支払いをする。OhioLINKとは異なり、加盟館は希望するもののみ参加すればよい。

他の事業として、ピッツバーグにある共同保存施設における脱酸処理がある。

3.2.2. コンソーシアムの成功要因

- 図書館・出版社の双方にとって、労力の簡素化につながる方法が望ましい。たとえば、複数年契約や契約窓口・契約書の一本化など。特に複数年契約は図書館に蔵書構築を検討するための十分な時間をもたらすという点で意味がある。また出版

社にとっても利益の確保という点でメリットがある。

- 価格割引の点ではあまり効果がなくとも、利用条件(外部利用者の利用、ILLへの提供、ダイヤルアップ利用等)で大きな改善が見られることがある。
- OhioLINKは規模の異なる図書館から構成されており、一見、小規模図書館のみに有利のように見える。しかし、実際は相互補完的になっており、小規模図書館は従来購入できなかったタイトルにアクセスでき、大規模図書館は総体としてより充実したコレクションをパワフルに使えるという実態となっている。個々の契約に細かくこだわるのではなく総体としてよりよいものをめざす(think big)という姿勢が成功に結びついていると言える。
- 強力な交渉担当者の存在がコンソーシアム運営には不可欠である。OhioLINKのTom Sanville氏、NERLのAnn Okerson氏ともにビジネス経験があり、すべての交渉を自身で行い、多くのノウハウを蓄積している。また両氏は国内外の多くのコンソーシアムのオピニオンリーダー的存在でもあり、各種セミナー・メーリングリストを組織し、ノウハウの共有に努めている。
- 加盟館の図書館員がコンソーシアムに貢献できる時間と体制があることが求められる。いずれのコンソーシアムも方針決定やその調査のために加盟館の図書館員が多くの時間を費やしている。またメーリングリストやセミナーなどを通じて頻繁に情報交換を行っている。ある程度、自館の利益を越えて共同体に貢献するような姿勢がないとコンソーシアムは機能しないのではないかと。

3.3. 学術雑誌高騰への対抗運動

ここまで、いかに効果的・経済的に雑誌(冊子+電子)を購入するかという検討を行ってきたが、欧米では値上がりに対する直接的な抗議行動も行われている。例えば、Natureの電子版が最初に公開されたとき高額な購読金額にもかかわらず最新号が見られないという事態に研究者がボイコット運動を起こし、状況が改善されたという事例がある。またARL (Association of Research Libraries) が創設したSPARC (Scholarly Publishing and Academic Re-

sources Coalition) では、商業出版社の学術雑誌高騰に対抗するために低コストの一流雑誌を創出するという活動を行っており、一定の効果をあげている。⁷⁾ また SPARC は学術雑誌高騰に関する提唱運動も行っている。学術雑誌高騰は雑誌論文の生産者であると同時に消費者である研究者に深く関わる問題であり、図書館と研究者が共通理解を持つことが重要だと思われる。日本では国立大学図書館協議会が SPARC に参加しており、提唱運動のための日本語訳のホームページを立ち上げている。

4. 最後に

雑誌のキャンセル、電子ジャーナルの導入、リソースシェアリング、いずれもとどのつまりは蔵書構築ということである。我々にまず求められているものは利用者に対する理解、研究分野に対する理解、コレクションに対する理解である。その基礎があってはじめてよりよい洋雑誌コレクションを再構築することができるのではないだろうか。

参考文献・注記

- 1) Ulrich's International: 全世界で刊行されている雑誌のカタログとして、最も定評のあるもの
- 2) 相互協力や有料ドキュメントデリバリーサービスの充実によって、自館に備えずとも比較的迅速に安価に論文を入手できるようになっている。その意味では全てを所蔵する必要性は従来よりも低下していると言える。
- 3) 平成 13 年度国立情報学研究所講演会 土屋 俊「電子ジャーナルと大学図書館」発表資料より学術雑誌総合目録による国立情報学研究所 宮澤 彰 教授調べ
- 4) 平成 13 年度国立情報学研究所講演会 土屋 俊「電子ジャーナルと大学図書館」発表資料より
- 5) 標準統計等、業務統計数値より作成
- 6) Kenneth Frazier 著 尾城孝一訳「図書館員のジレンマ ―ビッグ・ディールのコストについて考える―」
http://home.catv.ne.jp/rr/ojiro/big_deal.html
- 7) Buckholtz, Alison 著 高木和子訳「SPARC: 学術出版および学術情報資源共同に関するイニシアチブ」情報管理 45 (5):2002, p.336-347

〈2002.9.10 受理〉

SPARC 活動とは：学術出版と大学資源との協力活動と今後の日本における学術コミュニケーション

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務長)

はじめに

学術情報の電子化が進み、学術研究の形態が歴史的な変革を遂げている現在、学術情報の収集基盤と世界への発信力を強化することは、「科学技術創造立国」を掲げるわが国にとっては、重要な課題である。しかしながら、現状では欧米等の諸外国に比べ電子的対応の遅れが目立ち、諸外国との格差が拡大しているという危機的状況にある。国際社会での責任を果たすためには早急な対応が必要である。

現在、インターネットの普及により学術雑誌の電子化も急速に進展している。しかしながら、電子ジャーナルを含む外国出版社が発行する学術雑誌の価格高騰も同時に深刻な問題になっている。学術情報流通の新しい枠組みを構築しようとする活動 SPARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition：学術出版と大学資源との協力) が欧米等で進展しており、安定した価格で学術情報を購入できる流通システム構築に努力している。

1. SPARC の設立経緯と組織

SPARC は 1998 年、研究図書館協会 (ARL) の発案で北米に創設され、現在では、組合員となっている世界中の 200 団体が組合費を収めて運営と事業を支援している。組織については、ワシントン DC に本部をおき、フルタイムスタッフが 2 名、パートタイム 1 名、ヨーロッパに、スタッフ 1 名を配置している。事業計画については、出版パートナーシップとその活動の提唱が中心になっている。

2001 年 6 月に SPARC ヨーロッパを創設、ヨーロッパを拠点とする大学および研究図書館の連合体であり、後援団体 (LIBER, CURL, JISC, SCONUL, UKB) が支援している。その目的は、ヨーロッパにおける大学教育と活動の提唱を組織化して進めていくことにあり、オープンアーカイブの可能性を示しながら、ヨーロッパの学術団体に働きかけを行っている。

2. 日本のジャーナルクライシス

我が国においては、個々の研究者のニーズが優先された結果として、大学全体としての体系的な資料収集が不十分であるし、大学間の格差も著しいものがある。また、価格の高騰により、国内で収集される海外学術雑誌タイトル数も大幅に減少している。1989 年がピークで 3 万 8 千タイトルあったものが、バブルの崩壊と同時に、1997 年には 1 万 5 千タイトルに減少している。この傾向は今も続いている。しかも、このタイトル数は 1951 年のタイトル数と同じで、戦後 6 年の外国からの情報量と戦後 50 年の情報量が同じということになる。尚且つ、日本は電子的な資料の導入が遅れ、諸外国との間でも大きな格差が生じている。

3. 図書館の今までの取り組み

このような雑誌の価格高騰に対して内外を問わず大学図書館は次のように対応してきた。

1) 予算不足にともなう学術雑誌のキャンセル

このことによって当然のようにタイトル数は削減される。情報量の減少にともなう、サービスの低下をもたらし、このことによる副産物もあった。それは、利用ニーズに関係なく惰性で購入していたものの購入の見直しである。機械的に購入していたものに対して、そのニーズの見直しと不要なものの切捨てができた。

2) リソースシェアリングへの取り組み

- ILL による有機的な資料の提供。
- DDS による国内外の情報の収集を可能にした。
- レアタイトルの分担収集による予算の有効利用。
- コンソーシアムを組むことにより、電子ジャーナル等の電子化された情報を廉価に、しかも多くのタイトルへアクセスすることが可能になった。

以上、コンソーシアムへの取り組み以外については、消極的な取り組みと言わざるを得ない。米国の

ARLは前述したとおり、このことの解決に対して積極的な対策を打ち出した。それがまさに SPARC 活動である。

4. SPARC の目的

大きく次の二つにわけることができる。

1) 予算の節約と安定的購入モデル構築

- 価格の上昇の抑制
- 出版界への競争原理の導入
- 図書館等の権利・権限拡大

2) 価格設定の情報提供

- 価格決定の公表
- 問題の把握と具体的な解決方法の立案
- 研究者と図書館との融合

5. SPARC の成功例

- ワーウィック大学数学部

Algebraic and Geometric Topology 誌は、イギリスワーウィック大学数学学部において研究者が奨励金の配分方法の改善策として考えたもので、雑誌を立上げるのに年間2,500ドルの販売権を放棄している。そのお陰で現在、この雑誌は無料で提供されている。但し1年分の暫定的なアーカイブ措置は1ページあたり10セントで提供している。

- Journal of logic programming, machine learning

Journal of logic programming (50人の編集委員)の商業出版を停止し、2001年に別の学術雑誌を立上げた。また、Machine learningの編集委員会も商業出版を中止し2001年に無料の電子ジャーナルを立上げた。ふたつのケースは、編集委員が一齐に辞職し、共に競合誌を立上げることで成功した例である。

- Bio One の活動

生物科学分野の重要タイトルのオンラインアグリゲーションを立上げ、2001年4月現在45タイトルを収集している。このことを可能にしたのは印刷物でしか入手できない学術誌を発行している団体の協力である。これらの学術誌はコマーシャルベースにのらずにデジタル化することができるという画期的なものである。図書館のニーズと目的に直接つながるものなので図書館から立上げ資金が提供されている。このことは、図書館と学術団体の初めての協力

事業となった。

- 低価格の SPARC 学術誌 (代替誌は廉価で情報量は同じ)

既存の学術誌10誌の価格合計が40,677ドルに対して、SPARCの提供する代替誌10誌の価格合計が5,238ドルになっている例があり、同じ内容・情報量にもかかわらず35,439ドルの予算の削減につながるようになってきている。

- 乗り換えつつある著者

代替誌が発行されても、既存の雑誌を購入しなければ確かな情報を入手できないのではないかと、という不安が研究者にはつきまっていたが、現在では、むしろ出版の選択肢が拡充されたことにほかならないということが判明し、代替誌に投稿する傾向が強まっている。

Evolutionary ecology の編集委員会は、Evolutionary ecology research を創刊した。この雑誌は3年を経過している。一方Evolutionary ecology は、以前は年間8回の出版をしていたが、最近では年間2回の出版しかできず、今年はその出版さえも危ぶまれている状態である。

同様のもうひとつの例が、Tetrahedron letters (エルゼビアの学術誌) である。同誌に寄稿する研究者がやはり減少している。その理由は、SPARCが支援する競合誌(代替誌)であるアメリカ科学協会のOrganic lettersに投稿が移行しているからである。

- 代替誌の評価の方がリード (Organic letters, Tetrahedron letters)

前述の2誌の評価を、ISIのJournal citation reportsによるインパクトファクターで比べると、Organic letters が2位、Tetrahedron letters は14位となっており評価もすでに逆転している。同時に価格も抑制されている。OrganicとTetrahedronの購入費には年間3,000ドルの差が出ている。勿論、Organicの方が廉価であることは言うまでもない。

- 価格引き下げ圧力 (AAPAがSPARCと話をただけでPhysical Anthropologyの価格が引き下げられた)

米国自然人類学会 (AAPA) は、利益優先の出版社に対して新しい取引形態を要求すると同時に、出版社に対してSPARCと連絡を取り合っていること

を伝えると、団体価格を2,085ドルから1,390ドルまで引き下げてきた事実もある。

6. 日本における学術情報発信の現状

1) インターネットによる研究方法の変化

電子メールによる海外の研究者との情報交換、オンラインジャーナルによるインターネットを介した文献の取得、論文の執筆・投稿の電子化が研究者に必要となってきた。また、各種文献データによる研究情報のサーベイやホームページによる研究情報の交換も盛んに行われるようになってきている。これらのことが活発に行われることで、ダウンロードした論文のコレクションによるパーソナル・ライブラリーの構築が行われ、STM (Science, Technology, Medicine) の研究者からは、図書館に行かなくなったあるいは行く必要もなくなったとの声も聞こえてくる。

2) 日本発のオンライン英文ジャーナルの必要性

研究の国際化が進み、電子メールを用いた情報交換、Webを用いた研究情報の獲得など国際的な共同研究が盛んになり、日常化すると同時に、国際的な競争も盛んになってきており、その競争力を強化するためには、オンラインでの学術情報の発信は急務である。

国内の研究費の配分方法も変わってきている。そのことは、文部科学省のCOE21 (トップ30) の配分方法に代表される。研究費の獲得、そのことによる生産性の向上により一層の日本の科学技術推進が盛んになるのである。

3) IPAP (物理系学術誌刊行協会) の取り組み

物理系4雑誌を電子化し、日本物理学会、応用物理学会との密接な連携により雑誌も強化している。同時に編集制作系の電子化も行っている。

また、海外文献データベースとのリンクと海外学協会との連携を保ちながら、先行グループの役割として政府系のシステム開発への協力および他分野へもこれらの事業を波及させるために努力している。

7. SPARC JAPAN 活動とは

学術情報を低価格で購入するための出版社との価格交渉や文部科学省からの補助金獲得による各大学の負担削減と安定価格での購入を目的として、国立

大学図書館協議会は電子ジャーナルに関するタスクフォースをくみ、電子ジャーナルの価格の引き下げおよび平成14年度66大学のコンソーシアムに対しての補助金(3億9千万円)を獲得した。このことについては、私立大学は遅れをとったが、平成15年度の補助金については、一定の目処もついている。また、ISIの交渉においても既に成果を示している。今後の組織作りが急務となる。

一方、情報発信の観点から現在の動きを見てみると、各大学が学内にポータルシステムを構築し、全国規模のポータル機能にそれらを集約し、そのことで学協会、大学の研究者からの学術情報発信が集約できる。そのポータルシステムは、同時に海外出版社からの電子ジャーナル収集のポータル機能を果たすことになり、安定した情報収集が可能になる。現在、国立大学ではそのポータル機能を果たす機関として国立情報学研究所(NII)が考えられており、学術情報の流通に関する施策の推進が計画されている。つまり学術コミュニケーションのプロセス変革と学術コミュニケーションに対する図書館や学術団体の影響力を拡大する方針をとっている。そのためには、NIIに対する文部科学省の支援とメタデータ作成の研究支援が必要になってくる。

このような視点から、慶應義塾も参画すると同時に、独自の事業展開あるいはコンソーシアム、コラボレーション等の共同開発による事業拡大を考えると来ている。塾内情報発信の一元化、データの標準化(メタデータ化)を推進できる組織の上げが急務と考える。

参考文献

- 1) 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会
情報科学技術委員会 デジタル研究情報基盤
ワーキング・グループ 学術情報の流通基盤の充
実について(審議のまとめ) 2002年3月
- 2) 日本学術会議情報学研究連絡委員会学術文献情
報専門委員会報告 電子的学術定期出版物の収集
体制の確立に関する緊急の提言 2000年6月
- 3) Buckholtz, Alison. Igniting Change in Scholarly
Communication 2001年1月9日 国立情報学研
究所における講演レジメ
- 4) 五神 真. 研究者サイドから見た学術情報発信の

〈特集〉 図書館を結ぶ新しい協力のかたち

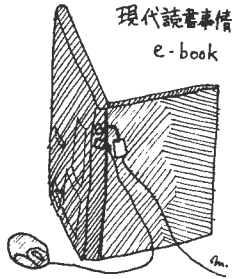
動向と課題 2001年1月9日 国立情報学研究所
 における講演レジメ

- 5) 加藤好郎 “慶應義塾における学術情報基盤整備
 とその充実” 塾監局紀要. 第29号, 2002年10月
 〈2002.9.27 受理〉

三田メディアセンター小展示ニュース

回数	展示期間	タイトル
第176回	平成13年4月16日～4月28日	「The Books from the 20th Century」
第177回	平成13年5月7日～5月18日	「EU-Japan Friendship Week」
第178回	平成13年5月18日～6月1日	「書物の変遷：パピルスからDVDまで」
第179回	平成13年6月1日～6月15日	「平成12年度新収貴重書」
第180回	平成13年6月18日～6月28日	「戦後図書館改革と日本図書館学校の開設」
第181回	平成13年7月23日～8月4日	「高校教科書に見る古典」
第182回	平成13年9月25日～10月6日	「アダム・スミス」
第183回	平成13年10月15日～10月27日	「デヴィッド・ヒューム」
第184回	平成13年11月5日～11月17日	「三田界隈の浮世絵」
第185回	平成13年12月3日～12月15日	「江戸時代の町地図」
第186回	平成14年1月15日～2月2日	「ファクシミリ版の世界」

ティールーム



進化する教科書の物語

かとう まりこ
加藤 万里子

(理工学部助教授)

私は天文学の本を1冊しか書いてない。現在も教科書として使っている「100億年を翔ける宇宙」の初版を出したのが32歳のとき。私はまだ非常勤講師で、こどもがお腹にいる時に原稿を書いた。出産後まもなく本も出版され、その直後に専任講師として慶応に就職するという、私にとってのトリプル快挙であった。

この教科書は自分の講義でつかうために書いたもので、それまでの慶応大学での講義ノートをもとにしたものだ。講義中の学生の顔をひとりひとり思い浮かべ、気軽な会話や質問から、どんなところを疑問に思うか、学生の立場を反映させたものであった。いわば特定の学生のために書いた、オーダーメイドの教科書である。天文分野の友人には、教科書や一般書を数多く書く人もいますが、私は不器用かつ省エネな性質なので、これ1冊で満足している。

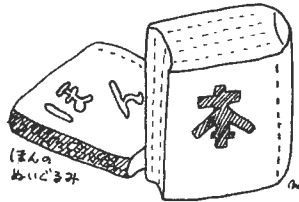
天文学の進展は早く、内容がすぐ古くなる。たとえば、アメリカの太陽系探査衛星ボイジャーが、天王星のそばを通り過ぎて鮮明な写真を撮ると、最新の写真を教科書に入れる。3年後にその衛星がこんどは海王星を通過したので、海王星の写真も入れる、という具合である。それで版ごとに図の入れ換えや文章の手直しなどをちょこちょこやることになった。大きな改定は2回、表紙カバーのデザインも変え、本のサイズも大きくした。

自慢じゃないけど、これは本が売れて毎年増刷りするからできる芸当である。一般むけの本としても好評で(やっぱり自慢だ)、いろいろな大学でも教科書として採用されてきた。慶応の学生むけオーダーメイドの本であっても、一般にも通用するらしい。16年間で2万部というのは教科書としては記録的だそう。初版以来、いろいろな人から間違いの指摘や改善のためのコメントをいただき、最新の成果も採り入れて、

じわじわと厚くなった。

現在の版には、巻末におまけとして銀河の点字の図がついている。これは法学部に全盲の学生が入学し、私の講義を履修したのをきっかけに、バリアフリー版(立体触図とフロッピーのセット)を作った記念である。それ以来、私の講義では、バリアフリー版を紹介して、点字の一覧表を配るとともに、点字の図にも触ってもらうことにしている。

日吉駅の向こう側(通称ひょうら)の古本屋には、前年度に履修した学生が使った教科書がならんでいるが、古い版では天体の写真も章末問題も違う。同じ題名なのに、しょっちゅう改定している本なんて、図書館にとっても、古本屋さんにとっても迷惑な話に違いない。



ところで、「100億年を翔ける宇宙」という、教科書のくせにやけに抽象的なタイトルは私が考え出した。出版者の担当さんいわく「本が売れるかはカバーとタイトルが重要

で中身は関係ありません」だったので真剣に考えたのだ。たとえば天文学の講義が木曜日だから、「木曜日の天文学」もいいかんと思ったが、本屋さんに行ったら「雨の日の天文学」というすてきな本があってボツ。結局20個ばかり考えた中から担当さんが選んでくれたのがこのタイトルだ。表紙カバーは、最初は担当さんのデザイン、現在の版には私も注文をつけた(表紙をデザイナーに頼むとお金がかかるので定価が高くなる)。あれこれ考えただけ、思い入れもある。

図書館の本は表紙カバーがとられていることが多く、そっけない。管理上の事情はわかるが、本を見る時、きれいなカバーも楽しみのうち。でも専門書は表紙もタイトルも地味である。中身で勝負せよということだろう。

(カットも著者)

<2002.9.13 受理>

義塾図書館における分担収集（保存）計画の実現 —リソースシェアリング委員会報告—

たけ まさつね
武 正恒

(医学メディアセンター事務長)

はじめに

メディアセンターが扱う図書予算（三田の学部、日吉研究室分を含む図書支出及び図書資料費の計）は平成12年度（約17億3千万円）をピークにして、以後、僅かながら減少の傾向に転じている。私立大学全体ではこれより早く10年度に頂点を迎えている²⁾ので困難な財政のなか義塾は2年間にわたり瘦せ我慢を続けたことになる。

このような背景のもと、図書予算のより効率的な運用を目指して「購入方式検討委員会」（主査：風間SFCメディア事務長）、「リソースシェアリング委員会」（主査：筆者）（以下リ委員会）が事務長会議の諮問という形で12年6月に発足した。両委員会ともすでに報告書を提出しているが、ここではリ委員会が提案し一部実現の緒についての洋雑誌の分担収集・保存の動きについて報告する。

1. 継続洋雑誌重複リストの作成

分担収集をどのように実現するか、様々な切り口が考えられるが、議論の結果、比較的高価でかつ定期的に出版されるため経費、保存スペースが把握しやすい継続洋雑誌の重複整理を取上げることにし、まず信頼できる基礎データの作成を当面の目標とした。具体的には本部の協力でKOSMOS II, KOHEIデータベースから抽出した洋雑誌の書誌・所蔵、発注先・価格、予算等のデータをアクセス及びエクセルで加工し、さらにそれを1点1点チェックするという地味で根気のいるものであったが、各委員の努力により重複受入3253タイトルのうち継続購入契約の対象となる827タイトル、1855所蔵について重複リストを完成させ関係者に配布した（12年10月）。このリストは各地区メディアの所蔵範囲や電子雑誌契約の有無まで掲載しているため、現場の選書担当者から実際的な選書ツールとして歓迎された。

また、「雑誌は最終的に全塾1タイトル1所蔵の実現を目標に契約の継続と保存に責任をもつ館を個別に指定することで、他館は重複雑誌の解約、カレントオンリー扱いや保存年限の設定など利用実態に応じて様々な対応が可能になる」との考え方を提言としてまとめ提出した。

2. 保存責任館の設定（第2期リ委員会の発足）

提言に基づき具体的な解決策を検討するよう新たな指示を受け第2期リ委員会が発足した（13年3月）。まずこれまでの論点を整理し今後の作業方針を決めるため、メディア各地区協議会、本部評議会の開催時期に合わせて以下の中間報告を提出し意見を求めた（13年5月）。

- ①重複雑誌は原則として1館を保存責任館（その雑誌の継続購入と保存に責任をもつ）として指定する。これには教員が選書権を持つ学部（研究室）予算購入の雑誌も含まれる。
- ②指定にあたっては各地区の特性を反映した大まかな主題を設定し、担当雑誌を割り当てる。
 - 三田：人文・社会科学（哲学、歴史、文学、政治学、法律学、経済学、芸術、その他）、心理学
 - 日吉：人文科学（言語学）、その他一般的な分野
 - 医学：医学
 - 理工：理工学、計算機科学、統計学、その他
 - SFC：建築学及び他地区のコレクションとしては馴染みにくいユニークな分野

さらに具体的に担当館を指定した試案を作成、合わせて検討を依頼した。事務長会議から各地区へ回付された中間報告及び試案は、各メディア内及び地区協議会などの場で議論され基本的に同意を得ることができた。このため、リ委員会では試案をさらに精査する作業と平行して以下の3点を全塾雑誌委員会に提言し実際に業務を遂行する現場の協力を依頼

した。

- ①保存責任を持つタイトルは雑誌担当者が参照できるように、KOHEIに保存コードを入力する。
- ②保存責任雑誌がタイトルチェンジされた場合、継承雑誌をそのまま保存雑誌として扱う。
- ③やむを得ず保存責任を負う雑誌の継続購入あるいは永久保存扱いを中止する場合、その事実を事前に他館に通知し購入、保存の引継ぎについて協議する。

幸い、以上についても全塾雑誌委員会の了解を得たため、保存館データをKOHEIに入力し洋雑誌の継続購入とその保存を必ず1館が保証するシステムを完成させた。

まとめ

図書館にとって増え続ける資料を収納する書庫を確保する努力はおそらく終わりのないものであろう。かつてのマイクロ化に代わり今日では電子化がその切り札として期待されているが、これとても向後はともかく過去に出版されたものまで対象とする万能の解決策というわけではない。

り委員会では資料購入費、書庫建設費を節減する手段として洋雑誌に責任館を指定し、他館はそれを意識して蔵書構築を行うことを可能にする仕組みを用意した。現在は同様のことを和雑誌について試みている。和雑誌は価格こそ洋に比べ低額であるが受入数が格段に多いため、省スペースの面で大きく貢献できることを期待するものである。

注) 「図書館年鑑2002」による。ちなみに国公立大学のピークは11年度であった。

〈2002.10.20 受理〉

日吉メディアセンター企画展示一覧

企画展示委員会

		展 示 期 間	内 容
平成12年度	第4回	平成12年12月1日～ 平成13年1月31日	オスカーワイルド没後100年
	第5回	平成13年2月1日～3月31日	世界遺産
平成13年度	第1回	平成13年4月1日～5月31日	福澤諭吉と慶應義塾
	第2回	平成13年6月1日～6月30日	「ショア」関連資料
	第3回	平成13年7月1日～9月29日	シネマの魅力
	第4回	平成13年10月1日～10月31日	古代ローマ帝国の栄光ーポンペー
	第5回	平成13年11月1日～11月30日	星野道夫の世界 ーそして絶滅の恐れのある動物たちー
	第6回	平成13年12月1日～ 平成14年1月7日	狂気と精神医学
	第7回	平成14年1月8日～3月30日	奇才！平賀源内
平成14年度	第1回	平成14年4月2日～6月1日	福澤諭吉と慶應義塾
	第2回	平成14年6月3日～6月29日	植物の不思議
	第3回	平成14年7月1日～9月28日	竹久夢二

致道ライブラリーの開設

わだ こういち
和田 幸一

(湘南藤沢メディアセンター課長代理)

本稿では、2001年5月に開館した致道（ちどう）ライブラリーの特徴を説明する。筆者は、2001年1月から開設準備に関わり、2002年5月まで、致道ライブラリーに勤務した。

1. 鶴岡タウンキャンパスと致道ライブラリー

致道ライブラリーのある山形県鶴岡市の鶴岡タウンキャンパスは、山形県と、鶴岡市を含めた庄内14市町村、東北公益文学科大学（以下、公益大）、慶應義塾大学（以下、慶應）により、2001年4月に開設された。慶應では、このキャンパスをTTCK=Tsuruoka Town Campus of KEIO と称している。

鶴岡タウンキャンパスは、市役所から徒歩3分という鶴岡市の中心地にある。目の前に全国桜名所百選にも選ばれている鶴岡公園があり、致道ライブラリーからもその桜を見ることができる。広義には、この鶴岡公園、周辺の庄内藩校の致道館（国指定史跡）、致道博物館などとともに形成される文教ゾーンの総称が鶴岡タウンキャンパスである。本稿では、新設した施設であるキャンパスセンターを中心としたエリアと後述のバイオリボ棟を鶴岡タウンキャンパス（以下、TTCK）とする。

慶應は、TTCKに先端生命科学研究所（Institute for Advanced Biosciences, 以下 IAB）を設置した。IABは、細胞のコンピュータモデル構築に関する研究を行い、IT主導型バイオサイエンスの世界の拠点となることを目指している。また、湘南藤沢キャンパス（以下、SFC）の学部生・大学院生の両方を対象としたバイオキャンプをTTCKで行っている。バイオキャンプでは、学生が一学期間TTCK内の宿泊施設に滞在し、先端生命科学研究所の施設を利用してバイオテクノロジーの基礎実験を体験するもので、SFCの授業の一環である。期間中は、生命科学関係のほか、体育、庄内の自然・文化を学ぶ「山形文化論」といった授業も開講されている。2001年

9月には、SFCの政策・メディア研究科修士・博士課程に設置されたバイオフィオマティクス・プログラムをTTCKでも受講できることとなった。なお、IABの実験実習施設であるバイオリボ棟はキャンパスセンターから約2km離れたところにある。

致道ライブラリーはキャンパスセンター内にあり、鶴岡市、公益大、慶應の三者が連携・共同運営する図書館である。誰でも利用でき、公益大・慶應所属者に加え、庄内14市町村在住・在学・在勤の方には貸出サービスも行っている。致道ライブラリーの「致道」は、藩校「致道館」、引いては論語の「致道＝君子ハ学ビテ以テソノ道ヲ致ス」に由来する。

致道ライブラリーの概略は、ホームページ（文末の関連URL一覧参照）でも確認していただきたい。

2. 致道ライブラリーの蔵書

致道ライブラリーはコンピュータと自然科学分野関係だけの資料を収集している。これは、IABの研究主題に合わせると同時に、TTCKから徒歩5分の距離にある鶴岡市立図書館との資料の重複を避けたためである。図書だけでなく、DVDやVHSビデオ、CD-ROM等の視聴覚・機械可読資料を積極的に収集しているのが大きな特徴である。館内での視聴のほか、ほとんど全てが貸出可能である。

表1 資料別蔵書冊数(2002.11.1現在)

	参考図書	一般図書	慶應コーナー	庄内コーナー	合計
和書	427	6,103	81	64	6,675
洋書	89	55	1	1	642
AV・機械可読資料	6	588	4	1	599
合計	516	6,654	82	65	7,916

表1からわかるように、蔵書の中心は和書で、IABの研究主題を中心とした生命科学分野の専門書のうち1990年以降に出版されたものはほぼ網羅している。生命科学分野の図書は単冊でも収集するが、それ以外の分野はシリーズ購入を基本としている。例

えば、数学、物理、化学、地学といった自然科学分野では、講座・大系ものを所蔵している。大学生向け図書や専門書のほか、一般向けのものも多く、具体的には、「ブルーボックス（講談社）」、「岩波科学ライブラリー」などの自然科学のシリーズを全冊、「岩波新書」、「中公新書」、「講談社学術文庫」など14種類の文庫・新書や「NHK ブックス」、「朝日選書」といったシリーズから、コンピュータ、自然科学関連図書を網羅的に購入している。また、ちょっと変わったところでは、各種動植物図鑑も積極的に購入して貸出に供している。一般的な動植物図鑑はもちろん、カメムシ、クラゲ、キノコといった個々の動植物に加え、鳥の羽根、落葉といった変わったものを対象とした図鑑もある。2002年8月に一時的に作ったコーナーでは貸出可能な図鑑は259冊を数えた。また、一般図書とは別に、庄内、慶應コーナーを設け、慶應所属者に庄内を、庄内の方々に慶應を知ってもらうために、それぞれ「鶴岡市史」、「福澤諭吉全集」などの基本的な図書を収集している。

視聴覚資料は、専門的なほんの数本を除いて、日本語あるいは日本語を含むバイリンガルのものである。「NHK スペシャル」、「生きもの地球紀行」等NHKや英国BBCで放映されたもの、「National Geographic」のシリーズも所蔵し、生命科学に加え、動物や鳥、海など自然そのものに関するものも多い。

なお、いずれの資料も、専ら高校生以下を対象としたものは収集していない。

雑誌は、和雑誌24誌、洋雑誌8誌を継続所蔵している。和雑誌の内容別の内訳は、自然科学系の一般向誌5誌、専門誌15誌、慶應・公益大関係4誌である。新聞は、全国紙4紙、地方紙2紙、業界紙2紙の計8紙である。

このほかに、洋雑誌19の電子ジャーナル（うち4誌は冊子体付）を購入している。さらに、慶應内各地区メディアセンターとの協力で、1300を超える電子ジャーナルやDBにアクセスが可能である。ただ、いずれも契約上、慶應所属者以外の利用は認められていないため、館内には外部接続できる端末は設置しておらず、研究室などから利用する形を取っている。

3. 致道ライブラリーの利用傾向

利用者は、公益大・慶應所属者とそれ以外の市民に大きく分けられる。入館時には、ICチップ付の図書利用カードで自動ゲートを開けるか、都度入館名簿に記入する。公益大、慶應ではそれぞれのキャンパスカードが図書利用カードを兼ねている。

開館から2002年10月末までの入館者数・貸出冊数は、図1・2の通りである。2001年4月の貸出は、正式開館前に慶應所属者のみにサービスを開始していたものである。市民の図書利用カード保持者（貸出登録者）は2002年10月末現在724名で、小学生から90歳以上の方まで多岐に渡る。

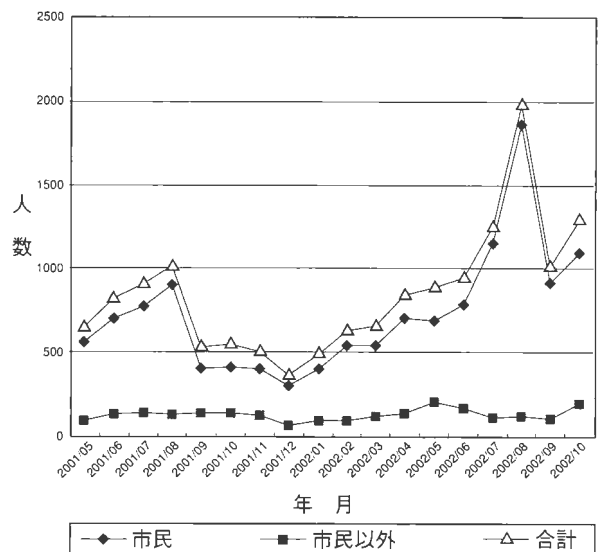


図1 月別入館者数

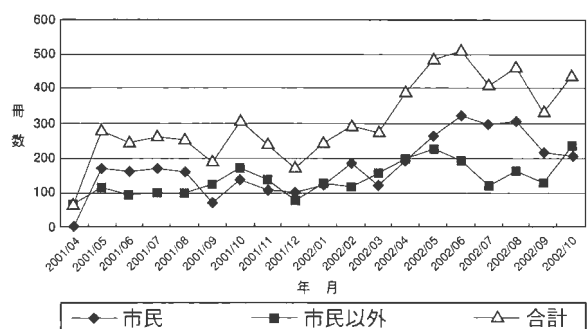


図2 月別貸出冊数

入館者数・貸出冊数で、市民以外とは公益大・慶應所属者のことである。公益大所属者の利用は、入館者数で全体の0.7% (111人)、貸出冊数で1.1% (53冊)とごくわずかである。慶應所属者は、鶴岡に常駐する者として、教員15名、職員15名、バイオインフォマティクス・プログラムの大学院生11名(うち4名は留学生)、半期ごとに入れ替わるバイオキャンプ参加の学生約20名である。春夏の授業がない期間には、バイオキャンプの学生に代わり、TTCK内の宿舎で研究会の合宿を行う学生が利用者に加わる。

入館者数、貸出冊数とも、波があるが、全体からすると、増加傾向にあるとあってよい。2002年度の入館者数・貸出冊数とも、4月から10月までの累計で2001年度の合計を上回っている。蔵書冊数が増えたこと、市民に致道ライブラリーの周知が進んだことが大きな要因であろう。慶應所属者の人数が増えたことも挙げられる。ただ、所蔵資料の分野が限られているだけに、単純に貸出冊数を増やしていくことは難しいだろうし、それだけを目指すべきではない。

4. 市民への周知

山形県庄内地域でのTTCKの認知度は高い。2001年4月から2002年10月末まで、山形ローカルのTTCK特集番組やNHK全国放送の「サイエンスアイ」を含め、TTCKはテレビで10回取り上げられている。致道ライブラリー所蔵の新聞のチェックでは庄内のコミュニティ紙などを含めると、関連記事は129件に上る。鶴岡市内に限れば、開設から1年半以上経った2002年10月になってさえ、TTCKのロゴ入りで「ウェルカム慶應義塾大学」と書かれた商工会議所作成のステッカーやポスターを街中いたるところで見ることができる。また、国や地方公共団体・議会、大学関係者から、町内会、小学生まで377グループ、計6816名の見学・視察者の訪問を受けている。そこで初めて図書館の存在を知る訪問者も多い。知っていても、大学関係者のみが利用できる、専門書だけを置いている、という誤った認識を持っている人も多かった。

こうした事実を踏まえ、下記の通り、利用拡大・促進対策をとってきた。

- ①ホームページの開設 2002.6.11
- ②広報つるおか(鶴岡市広報)への関連記事の掲載 6回
- ③鶴岡市内の公民館、市立図書館、市庁舎等の公共施設での、PRポスターの掲示・利用案内チラシの配布 2001.9
- ④市立図書館、市庁舎での蔵書カバーや蔵書リストの掲示 2001.11、2002.2
- ⑤企画コーナーの設置
入門書を集めた生命科学入門コーナー 2001.10.19～2002.3.30
貸出可能な図鑑を集めた図鑑コーナー 2002.8.1～9.30
- ⑥慶應IABの教員を講師とした「市民のための生命科学入門講座」の開催
2001・2002年度とも、各全5回、受講者はそれぞれ約100名
- ⑦慶應義塾図書館が所蔵する江戸・明治期の資料の展示会「明治を開く～福澤諭吉の著作を中心に」の開催 2002.11.6～11.18
- ⑧慶應IABの教員を講師とした鶴岡市内の小・中・高校の「理科教諭向け最先端科学セミナー」の開催 2003.2(予定)

特に⑥、⑦は、IAB、慶應を市民に知ってもらうという意味もあり、これも致道ライブラリーの大きな役割である。パイオラボ棟エリアをのぞくTTCKそのものは公園として整備されており、誰でも自由に立ち入り散策できるが、そこに建つキャンパスセンターで市民の方が自由に出入りできるのは致道ライブラリーだけなのである。

5. 三者での共同運営

致道ライブラリーのように、異なる学校法人、地方公共団体が共同で運営する例を筆者は他に知らない。具体的には、備品・資料購入費・光熱水費・消耗品費等、運営費用を等分に負担するとともに、職員をそれぞれの組織から派遣している。従って、全ての書架や椅子、さらには蔵書の一点一点も、それぞれの法人の所有かが決まっている。しかし、利用者はそれを意識して椅子に座ったり、本を借りたりすることはない。また、職員も同様で「これは鶴岡市の仕事」、「慶應の仕事」と区別せずに、「致道

ライブラリーの仕事」として全員で行っている。ただ、公益大は、鶴岡市の隣、酒田市に2001年4月に開設されたばかりで、2005年4月に鶴岡タウンキャンパスに大学院を設置する予定のため、資料購入費および職員の2つについては、現在まで鶴岡市と慶應の二者で負担している。

複数法人による運営で、それぞれの法人の金銭・人事的負担が減り、より多くの蔵書の購入・職員の配置が可能となった。職員が多いことで、開館時間も長くすることができ、図書館システムの改修や各種の業務で複数の目から見ることでよりよい結果を得ることができた。「三人寄れば文殊の知恵」という諺もあるように、3つの違った視点から同じ図書館を見られ、いろいろな発想が得られるという利点

がある。例えば、慶應には専門図書館の運営、鶴岡市には市民への対応というノウハウがあり、お互いに補完しながら致道ライブラリーを運営しているのである。

もちろん、三者での運営に当たっては、方針を三法人の責任者間の調整で決定する必要があり、面倒な面もあるが、上記のようにメリットも大きい。近年、大学図書館では、図書館間の相互協力やコンソーシアムの結成、また市民への公開も盛んになっている。致道ライブラリーはこれをさらに一歩進めた形で、新しい図書館の1つのモデルになるかもしれない。

〈2002.11.18 受理〉

表2 関連URL一覧

致道ライブラリー	http://www.ttck.keio.ac.jp/chido/
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス	http://www.ttck.keio.ac.jp/
慶應義塾大学先端生命科学研究所	http://www.ttck.keio.ac.jp/IAB/
東北公益文科大学	http://www.koeki-u.ac.jp/
鶴岡市立図書館	http://lib.city.tsuruoka.yamagata.jp/



(TTCKキャンパスセンター 真中部分が致道ライブラリー)



(致道ライブラリー内部)

看護医療学図書室によるこそ

よしざわ あきこ
吉沢 亜季子

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

1. はじめに

2001年4月、湘南藤沢キャンパスに看護医療学部が開設された。慶應義塾大学9番目の学部であり、湘南藤沢キャンパスでは総合政策学部・環境情報学部が続く3つめの学部となった。

文部省から看護医療学部設置の認可がおりたのは、2000年12月のことであった。新学部発足にあたり、それまでの日本における「看護」という枠組みを考え直し、新たな発想で取り組んでいこうと「看護医療」という言葉を一つのメッセージとして打ち出したそうだ。近年の医学のめざましい進歩や、少子高齢化社会の到来など、我々を取り巻く保健・医療・福祉の環境も変化している。そのような中で、看護教育の革新を図るべく「看護医療学部」が誕生した。看護短大創立以来13年を経た時点での発足であった。

2. 準備からオープンまで

開室準備には一年以上の期間を費やした。選書は医学メディアセンターと湘南藤沢メディアセンターの双方で行った。全主題を「医学・看護学」と「心理学・社会学・その他」の2つに分担し、それぞれが自館の蔵書に近い分野を受け持った。選書された資料の受入から整理・装備・納品までをメディアセンター本部が担当し、創設時の蔵書は15,000冊に及んだ。

2000年11月に筆者は図書室開設準備担当に着任した。オープンまで数ヶ月の最終的な準備作業を、湘南藤沢メディアセンターはもとより、メディアセンター本部、医学メディアセンター、看護医療学部開設準備室、湘南藤沢インフォメーションテクノロジーセンターと協力をしながら進めていった。貸出冊数と貸出期間などサービス内容や図書室内レイアウトの決定、ホームページや利用案内の作成、図書館システムKOSMOSIIのデータテスト、ネットワーク環境の整備に至るまでを行った。

また、看護医療学部の学部3年次には、信濃町キャンパスにおいて、主に病態学および臨床看護学の授業を行う。学部の主題についても信濃町キャンパスとの関わりは大きく、相互の連携は必須であることから、医学メディアセンターで2週間の研修を体験した。カウンター業務を中心に、医学関連のデータベースを使い、相互貸借(ILL)の作業も行った。申し込みは日本全国から次々と届き、依頼は国内のみならず海外へもし、その作業量の多さと速さには驚いた。利用者は常により新しい情報を求め、図書館員はその情報を迅速に提供することを意識していた。そうするうちに、開設後の看護医療学図書室のイメージも沸いてきた。

このような準備の日々を経て2002年4月4日に看護医療学図書室がオープンした。創設時の学部内の利用対象者は、教員40名と学部生100名でしかなかったが(現在は更に学部生100名が増えている)、学部生は必修科目が多くレポート作成の宿題がよく出るためか、オープン当初から図書室の利用は多かった(出席のチェックと単位の認定は結構厳しい)。

3. 蔵書と利用

蔵書は看護・医学関連の他、心理学・社会福祉など看護周辺分野の資料が中心であるが、限られた書架スペースを意識しながら予算を有効に使うように、常に工夫をしてゆく必要がある。改版を受入れると旧版は除籍する、教員の著作は寄贈してもらうなどがその一例であるが、湘南藤沢メディアセンターとの協力で、重複資料はなるべく持たないという相互補完的な選書方針での蔵書構築を目指している。湘南藤沢メディアセンターへは徒歩15分の距離で、キャンパス内の3学部は相互に授業を履修できることもあり、利用者の行き来は頻繁である。借りる時は双方へ出向かなければならないが、返却はどちらでもできる。看護医療学図書室で所蔵してい



看護医療学部校舎正面

る"脳科学"・"分子生物学"などの主題は環境情報学部所属者に,"医療経営"・"介護福祉"などの主題は総合政策学部所属者に,逆に一般教養的な資料は湘南藤沢メディアセンターの資料がよく利用されている。

下のグラフは,創設時から2002年7月末までの蔵書冊数と貸出冊数(延べ冊数)である。蔵書の内容は特定分野に特化した専門図書室的な構成となっており,看護・医学関連が蔵書全体の53%を占めている。

また,世界に通用する人材を育成するという学部の意気込みから,語学資料の収集も厚い。英語・ドイツ語・フランス語のみならず,東洋・西洋の諸言語を学ぶ学生もいて,途上国で医療に携わりたいと話していた。

貸出冊数は分野別蔵書冊数を反映して,看護・医学の分野が半数以上を占める。心理学は蔵書数の割に貸出冊数が多いが,湘南藤沢メディアセンターで

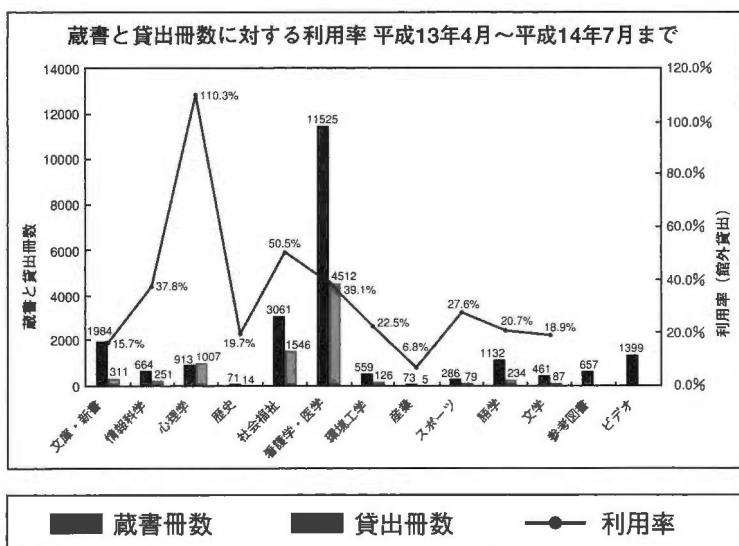
手厚く収集している分野であることから,双方の蔵書を利用することでカバーしていると考えている。とはいえ,創設時から16ヶ月で100%を越える利用率であるところをみると,もう少し収集してもいいかもしれない。

また,卒業前には看護師・保健師・助産師の国家試験を控えていることから,問題集と関連資料を取り揃えた「国家試験コーナー」を新設した。「福澤諭吉・慶應義塾コーナー」は一年生の授業でよく利用されている。教員自身の著作寄贈による「教員著作コーナー」は,研究分野が一目で分かることで教員同士の研究のコミュニケーションに役に立ち,学生は興味をひく著作があると著者である教員を直接訪ねているようである。入口ゲート付近に設けた「新着図書コーナー」は,利用者が新鮮な情報を求め立ち止まり閲覧する姿をよく見かける。今後とも,利用状況を観察しながら,魅力的なコレクションにしてゆきたいと思っている。

4. 雑誌とデータベース

国内雑誌は創設1年前の2000年から134タイトル,外国雑誌は創設年の2001年から55タイトルを所蔵し,それ以前の雑誌は複写依頼をして入手している。複写依頼はオンラインで簡単にでき,その殆どが医学メディアセンターか看護短大に所蔵があることから,数日後には複写物が送られてくるという状況である。複写ILLの窓口は湘南藤沢メディアセンターが担当し,実務的には看護医療学図書室を介さずに処理が行われている。国立情報学研究所の目録システム(NACIS-CAT)にデータを掲載している所以他大学からの複写依頼も受けている。

データベースは,医中誌Web・CINAHL・MEDLINEをはじめ,全塾で契約しているものと湘南藤沢メディアセンターで契約しているものがいずれもホームページからアクセスできる。スペース問題や利用上の便宜を考えて,外国雑誌はできるだけ電子ジャーナルの契約をしている。校舎内はネットワーク環境がよく整備され,インターネット上でのサービスを充実させることは好評である。こうした環境を更に良く



活用してもらうため、学期中に一度「データベースウィークス」を開催する他、毎月テーマを絞って「フリータイム制ワンポイントレッスン」を行っている。また、1年生の秋学期の授業で情報技術領域「データサイエンスⅠ」を2コマ担当し、「看護医療情報・データの検索と活用」というテーマで講義をしている。今後もホームページを情報発信のベースとし、研究室や自宅からいつでもアクセスして情報を獲得できる便利なものにしてゆきたい。もちろん、図書室にも足を運んでもらいたい。

5. おわりに

図書室の窓の向こうはのどかな山々、緑が眩しく鳥のさえずりが耳にやさしい。ちょっとしたリゾート地のような景色で癒される。学生たちにとっては都会的な遊びの誘惑もなく？美しい景色の中でゆったりとした気持ちで勉強ができるようだ。一方、図書室はこの一年間、試行錯誤をしながらどうにか軌道に乗ったところである。小さい図書室ながらも、同じキャンパス内には蔵書冊数30万冊を超える湘南藤沢メディアセンターがあり、塾内ILLで他キャンパスから資料の取り寄せをすることで利用者からの大抵の要求に応えられているのは、総合大学の強みである。

今後は、来年度に3年生を信濃町へ送り出し、再来年度には4年生が卒業論文と国家試験を控えて、看護医療学部の成果が評価される大事な時期を迎える。図書室も日々進化させ、学生たちが充実したキャンパスライフを過ごせるように、利用のサポートをしていこうと思う。

〈2002.9.13 受理〉



看護医療学図書室内

看護医療学図書室概要

開設年月日

平成13(2001)年4月4日
(看護医療学部開設平成13年4月)

施設名称

慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター
看護医療学図書室
(Library of Nursing and Medical Care)
[通称:看護医療学メディアセンター(NMC-MC)]

所在地

〒252-8530 神奈川県藤沢市遠藤4411
慶應義塾大学看護医療学部

アクセス

小田急線湘南台駅西口よりバス15分
JR東海道線辻堂駅北口よりバス25分

連絡先

電話番号:0466-49-6204(直通)
FAX番号:0466-49-3298
電子メールアドレス:nmc-mc@sfc.keio.ac.jp

開室時間

学期期間中(月~金)9:15~20:00(土)~16:00
休業期間中(月~金)9:15~18:00(土)~16:00

休室日

日曜、国民の祝日、慶應義塾の祝日(1/10, 4/23),
夏季・冬季休業期間中の一定期間

資料の貸出規則

冊数 学部生7冊/大学院生15冊/教職員50冊
期間 和書2週間/洋書1ヶ月/製本雑誌3日/
未製本1日
更新 1回まで(貸出期間内のみ)

所蔵資料(2002.4現在)

図	書	20,158冊(和14,687/洋5,471)
雑	誌	189タイトル(和134/洋55)
新	聞	8タイトル
視	聴覚資料	1,659点
そ	の他	各種オンラインデータベース
電	子ジャーナル	約2,000タイトル

施設・座席数

一般閲覧78席/マルチメディア編集室1室,4席
/マルチメディアブース6基,6席/グループワーク
ルーム2室,24席

情報機器

KOSMOS II OPAC専用端末2台/データベース専
用端末2台/複写機1台/CNSプリンタ1台/
無線LAN

収容可能冊数

一般開架書架22,000冊/電動集密書架20,000冊

来往舎レファレンスライブラリーの開設

やまだ まさこ
山田 雅子

(日吉メディアセンター係主任)

はじめに

「21世紀キャンパス 日吉」基本計画の成果として2002年4月、日吉キャンパス中央に新しい研究室棟である「来往舎」が完成した。地上7階からなる建物の4階以上には研究個室が設けられ、1階から3階までは、会議室や合同研究室など、共同研究の場が用意された。「来往舎」という建物の名称にも表れているように、基本計画に謳われている「開かれた研究・教育」の実践の場所として位置づけられている。

「来往舎レファレンスライブラリー」はこの3階東側に位置し、四面をガラスに囲まれた小さな研究図書室である。本稿ではレファレンスライブラリー開設までの経緯と、サービス開始以後2002年夏まで、約半年の現状を報告する。

1. 研究室資料

日吉キャンパスの蔵書は、予算枠により、「図書館」と「研究室」に大別されている。研究室資料といっても、その多くは図書館の建物に配置されているが、レファレンス資料や雑誌の一部は研究室棟、校舎に点在していた。来往舎開設後、レファレンスライブラリーの蔵書となったのは、主としてこれら点在していた資料である。

日吉キャンパスの研究室は学部別ではなく、専門分野別に分けられており、「部門」と呼ばれている。各部門の資料はそれぞれの合同研究室に所蔵されていた(表1参照)。

これまで研究室棟、第4校舎を利用していた語学・人文・社会・天文・人類・地学部門と第7校舎を利用していた数学が来往舎に移った。そのうち、語学・人文・社会・天文・地学部門の資料がレファ

表1. 部門による資料の配架場所

部 門	2002年3月まで	2002年4月以降
英語	研究室棟	来往舎 (レファレンスライブラリー)
ドイツ語		
フランス語		
諸国語 (中国語・スペイン語・ロシア語・韓国語・ギリシャ語・ラテン語)		
人文 (哲学)		
社会 (歴史・地理・近代思想史)		
天文		
地学	第4校舎	第4校舎
人類	第7校舎	来往舎 (数学合同研究室書庫)
数学	第2校舎 (図書室)	第2校舎 (図書室)
生物	第2校舎 (個室)	第2校舎 (個室)
物理	第2校舎 (個室)	第2校舎 (個室)
化学	第8校舎	第8校舎
心理学		
美術		
心理・美術・音楽		

レンスライブラリーに配架された。数学については来往舎内に別途書庫を設けており、また人類学は第4校舎使用を続けるため、資料を別置している。

2. レファレンスライブラリーの蔵書構築

たとえ広い面積は無理だとしても、新しい研究室棟の近くに最低限必要な資料を置くスペースが必要であることは、かねてから共通認識となっていた。1999年夏、最初の設計図が提案されたのを機に、「新棟(仮称)レファレンスライブラリー開設準備ワーキンググループ」を発足させた。語学・人文・社会部門から選出された教員とメディアセンターの担当者の計17名から構成されたワーキンググループは3回の会合を開き、蔵書構築やサービスに関する方針、具体的な作業について検討した。

書庫とするのか、積極的な資料提供の場とするのか、という議論を経て、レファレンスカウンター機能まで持たせた「レファレンスライブラリー」という方針にまとまった。収蔵資料は「幅広い語学研究、語学教育研究、各国文化研究・地域研究のためのレファレンスコレクション」と定義した。定義に基づき、不足する資料は徐々に補うこととなった。

このように基本的な方針を定めてから、具体的な

作業に移った。この段階でもっとも苦労したのが、レファレンス資料の振分け作業だった。研究室予算で購入したレファレンス資料は、研究室棟の他にも日吉図書館4階と地下書庫、さらに山中資料センターの計7か所に分散されていたからである。これらのレファレンス資料すべてを来往舎に移すことは、スペースの関係から不可能であったため、蔵書をスリム化させなければならなかった。そこでワーキンググループのメンバーを中心に、すべてのレファレンス資料を点検し、「レファレンスライブラリー」「日吉図書館」「除籍」の3種類に選別した。すでに山中資料センターへ別置した、利用頻度の低いレファレンス資料には手をつけなかった(図1参照)。

レファレンス資料の他にも、これまで日吉図書館4階と研究室棟に所蔵されていた資料の中から、新着雑誌、新聞の原紙やその他、レファレンスに関連するCD-ROMなどをレファレンスライブラリーに移した。

この移動の結果、図書と製本雑誌は日吉図書館に、レファレンス資料と新着雑誌、新聞はレファレンスライブラリーに整理されることになり、教員の利便にかなった配置に一步近づけることができた。

3. 現在の利用状況

レファレンスライブラリーは約500平方メートル、ちょうど日吉図書館1階のレファレンスコーナーと同等の広さである。東側中央にガラスの八角形の吹抜けがあり、隣り合わせてパソコンブースを西側に八角形に配置している。銀杏並木側のレファレンス資料には低書架と高書架を組み合わせ、新着

雑誌には、横置きにして背が見える専用書架がしつらえられた。閲覧席は14席、ガラスに面している場所が多いわりには、天井が高くないためか落着きのある空間となっている(図2参照)。

利用対象者は、原則として慶應義塾の教職員としている。学生、塾員が利用する場合は、日吉図書館で手続きをしてからの入室となっている。スタッフ在席時間は授業時間に合わせ、開講期の平日10時30分から18時30分とした。来往舎は建物の共有部分をカードキーシステムによって管理しているため、カードキーを所持する専任教員は開室時間に関わりなくいつでも利用することができる。そこで「開室時間」ではなく「スタッフ在席時間」と呼んでいる。メディアセンターにとって、レファレンスカウンターを増やすことは、昨今の厳しい状況の中では頭の痛い問題であった。そのため、スタッフは不在でも利用は可能、という認識のもとに土曜日と長期休業中も閉室することにした。

カウンターには、レファレンス担当者を配置し、所蔵資料を提供するだけでなく、最新のレファレンスサービスを提供することを目指している。4月から8月までの入室者数は以下の通りである。

4月	195名
5月	202名
6月	180名
7月	140名
8月	66名

8月までの入室者数の月平均は156名であり、今のところあまり多いとはいえない。これから、共同研究などのプロジェクトが本格的に活動することにより増加が予想される。

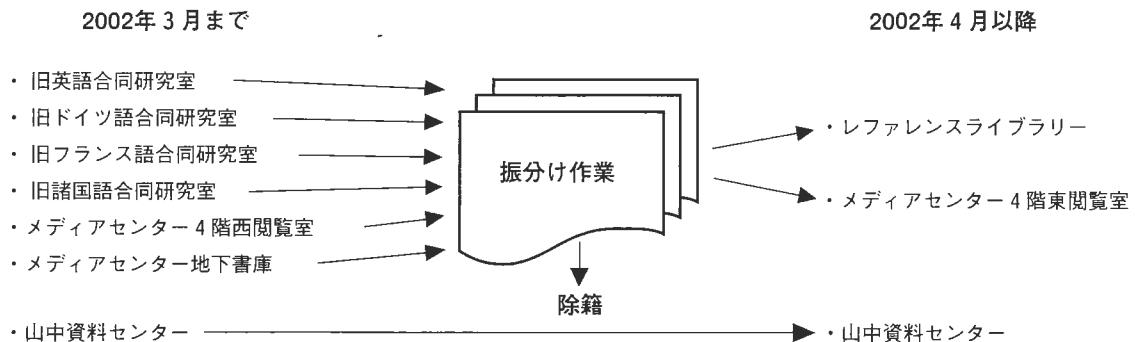


図1. 研究室レファレンス資料の配架場所

4. 今後に向けて

来往舎に移って、これまで研究室棟の書庫に収められていたレファレンス資料が、開かれた形で共用スペースの中心に、提供されるようになった。これは、「21世紀キャンパス 日吉」に記された、新しい研究室のあり方を象徴するものである。レファレンスライブラリー開設とスタッフの配置は、来往舎の建設にあたってメディアセンターが研究活動に対して何を支援することができるか、検討した結果を形として表現したものである。

日吉メディアセンターは、キャンパスの特性により、学習図書館としての機能に比重をおいて活動しているとはいえ、研究図書館としての役割も常に模索してきた。私たちは来往舎に一步踏み出すことによって、現在のメディアセンターのサービスがどのように変化しているのか、今まで以上に積極的に伝えていきたいと考えている。

開設後、新たにレファレンスライブラリー委員会を発足させ、教員とメディアセンターが協働して今

後の蔵書構築や運用について話し合う機会を恒常的に持つこととなった。「21世紀キャンパス 日吉」を機に日吉キャンパスの研究活動が大きく発展することに期待を寄せながら、日吉メディアセンターも研究・教育支援にさらに積極的に取り組みたいと考えている。

〈2002.10.1 受理〉

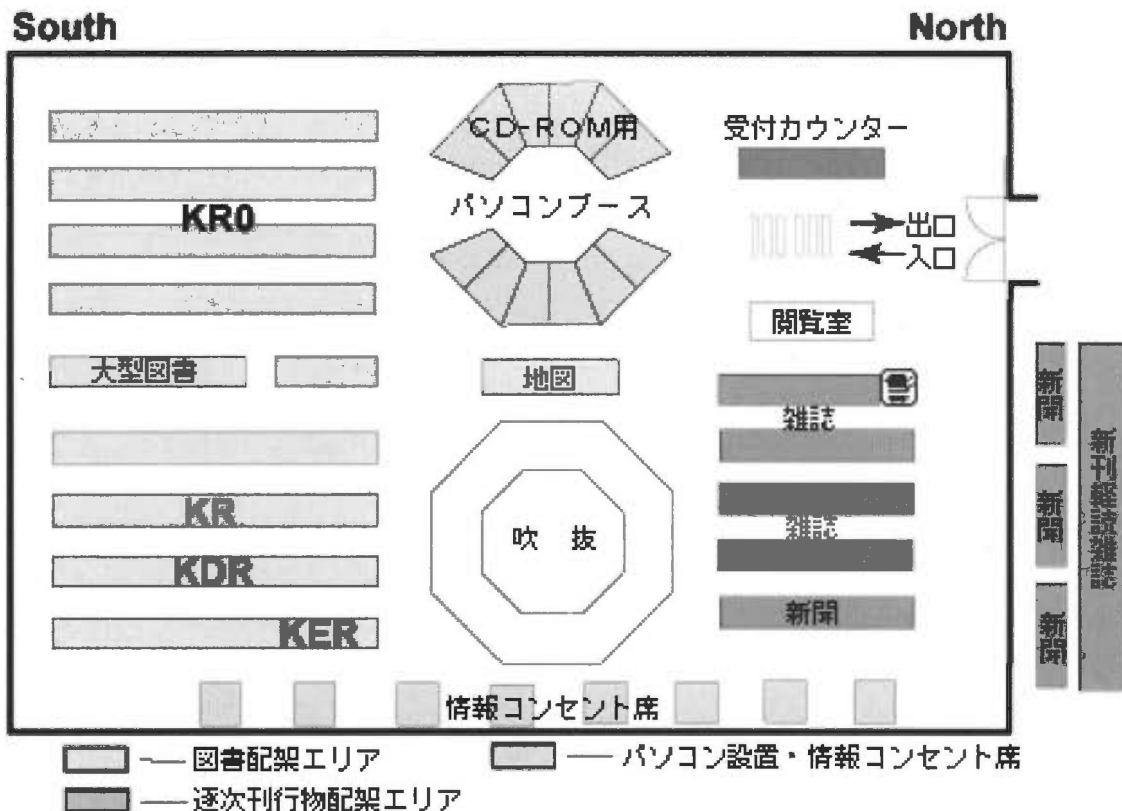


図2. 来往舎レファレンスライブラリー配置図

三田メディアセンターにおけるエポックメイキングな閲覧サービス

むらかみ とく た ろう
村上 篤太郎

(湘南藤沢メディアセンター事務長)
(2002.10まで三田メディアセンター課長)

1. はじめに

ランガナタンが「図書館学の五法則」の一つとして、「図書館は成長する有機体である」と言ったように、三田メディアセンター（以下、当センター）においても、成長するための様々な改善が従来から継続して行われてきた。本稿では、最近5年間における利用者サービスの根幹である閲覧業務に限定して、その主なエポックメイキングな事例を報告する。

2. 閲覧サービスの拡充

2.1. 開館時間延長

利用者からすれば、コンビニエンスショップと同様、必要な時にいつでも当センターを利用できることを希望している。そのため、当センターの開館時間延長については、以前から大学院生を中心に毎年要求があった。この問題を解決するためには、他大学図書館との開館時間の比較だけでなく、それを裏付ける費用対効果を示す客観的データも必要であった。そのため1999年2月に自動入館システムを導入し、磁気カード方式の学生証を所持している学部生、大学院生の詳細な利用状況が把握できるようになった。このことは自動入館システムが入館チェック体制の強化による館内安全性確保とカウンタースタッフの作業軽減というメリットと共に、大きな効果を呈している。ただし、磁気カード方式のIDカードや学生証が整備されていない教職員、通信教育部生、塾員、塾外利用者は自動入館システムの対象外になっており、従来どおりカウンター横の有人ゲートから入館する方式をとっている。

当センターの開館時間は、日曜開館や年末臨時開館を除いて、2種類に大別される。一つは授業期間中の平常開館（平日は8:45～21:00、土曜は8:45～19:00）であり、もう一つは長期休業期間中の短縮

開館（平日は8:45～18:00、土曜は8:45～16:00）である。開館時間延長を考える場合は、開始時間を早くする場合と閉館時間を遅くする場合という2通りの考え方がある。前者は開館時15分間の年間平均入館者数は28人（2001年度自動入館ゲート通過者実績）であり、後者の閉館1時間前の年間平均入館者数は57人（2001年度自動入館ゲート通過者実績）であった。このため、閉館時間を延長するということに限定して検討を開始した。閉館1時間前の平均入館者数は、閉館1時間前以前から入館していた利用者が、夕食等何らかの用事で一旦退館して再び入館する場合、および閉館まであまり時間がないと判明しているにもかかわらず、新規に利用者が入館する場合とが含まれている。しかしながら、この割合は不明であること、閉館1時間以上前に入館して継続的に利用している利用者数も不明であること、さらには前述した自動入館システム対象外の利用者の利用状況が反映されていないという不備はあるものの、少なくともこの数字が大きければ大きいほど閉館1時間以内の入館者が多いことを示し、開館時間延長の引き金になるものである。また当センターでは、閉館10分前から閉館を知らせる館内自動放送と同時にBGMが流れる仕組みになっている。そこで、このBGMが流れている10分間に、どのくらいの利用者が退館したかというデータを、閉館10分前と閉館後に、それぞれBDSに設置されているカウンター表示をメモすることによって、データ収集を開始した。この10分間に退館する利用者には、偶然に利用目的を果たした、あるいは果たせないことが判明して退館する場合、利用者の個人的な制約理由で退館する場合、本来であればまだ継続して利用を希望するにもかかわらず退館せざるを得ないために退館する場合の3通りが含まれている。しかしながら、ここでもそれらの割合は不明であること、閉

館10分以上前に退館した利用者数は不明であるものの、少なくともこの数字が大きければ大きいほど当センターの閉館時間の制約から退館した利用者が多いことを示しており、開館時間延長の根拠となるデータになるものである。そのため、閉館1時間前の平均入館者数と閉館前10分間の平均退館者数とのデータを平常開館、短縮開館の平日と土曜日ごとに毎月算出していった。それに基づき、2000年9月からは平常開館の土曜日の閉館時間を18時から19時に延長した結果が、次のとおりであった。

2000年度 平常開館土曜日	18時閉館 (4~7月)	19時閉館 (9月以降)
閉館1時間前の 平均入館者数*	58.3	39.5
閉館前10分間の 平均退館者数	90.3	78.2

*自動入館ゲート通過者のみ

あくまでも一定の制約のもとではあるが、この数字の減少は、1時間延長した時間帯の利用度低下を意味し、延長の効果が現れているものと考えている。参考までに昨年度の統計結果は次のとおりであった。

2001年度	平常開館		短縮開館	
	平日	土曜日	平日	土曜日
閉館1時間前の 平均入館者数*	39.5	39.8	79.3	95.3
閉館前10分間の 平均退館者数	56.8	71.9	82.3	109.1

*自動入館ゲート通過者のみ

現状では、データに基づけば、まず短縮開館の延長を優先して前向きに検討する課題と認識している。

2.2. 日曜開館の実施

2001年度は、学部生の学期末試験がある7月と1月の日曜日を合計7日、12時から17時まで開館した。当センターにおける初めての日曜開館であった。サービス体制は、年末の臨時開館（12月25日～28日の4日）とほぼ同様の閲覧・複写業務のみ

である。しかしながら、広報不足の問題なのか、利用者のニーズの問題なのか、原因はつかめていないが、同様な開館時間帯で運用している年末の臨時開館時の平均入館者数が906人に対して、日曜開館の平均は約3分の1の305人であった。

2002年度は、昨年度と同様なサービス体制で、日曜開館の日数を11月に2日増やすことを予定し、予算を確保している。これは昨年度、初めて全塾ゼミナール委員会の役員メンバー、さらには経済学部ゼミナール委員会の役員メンバーと、それぞれ個別に座談会を開催し、学部生の当センターに対する要望などを直接聞いたことがきっかけであった。すなわち、11月下旬に開催される三田祭において、研究発表を実施しているゼミナール生は三田祭前には少しでも長い開館時間を欲していることが判明したので、それを支援するために実施するものである。今後の日曜開館については、同様のサービス体制で、授業期間中は開館することを目標に予算化していきたい。なお、日曜開館経費については、データベース経費とリザーブブック経費とを合わせて、2001年度から私立大学等経常費補助金特別補助における教育・学習方法等の改善（教室外の学習環境：図書館機能の整備充実）として助成金を得ている。

2.3. 自動貸出機設置

2000年9月に自動貸出機1台を導入した。ここでは導入前後の状況を報告する。まず、導入するにあたっては、図書の表紙にバーコードラベルが貼られていることが必要要件であった。ところが、当センターでは、従来、図書の表紙裏、あるいは裏表紙裏に相当する箇所にOCRラベル、その後バーコードラベルが貼られていたので、貼付場所の問題からこのままでは導入できなかった。そのため1996年秋に、自動貸出機導入を視野に入れながら、これから受け入れる図書については、背を左側にした際の表紙、あるいは裏表紙にバーコードラベルを貼付することを提案し、実施に移した。その後、1997年度から4年次計画で図書の表紙、あるいは裏表紙に遡及的にバーコードラベルを貼付する作業に着手した。自動貸出機の利用者は、磁気カード方式の学生証所持者のみが対象になり、開館時間延長の箇所でも触れたように、それ以外の利用者は利用できない。そ

れを前提にして、1997年度は図書館図書の和図書を、1998年度は図書館図書の洋図書を、1999年度は図書館内の文学部図書を、2000年度は旧館内の学部図書を対象に順次バーコードラベルの貼付作業を実施していった。1999年度分の作業がほぼ完了したのを受けて、自動貸出機の設置環境は整備されたと判断し、2000年9月に自動貸出機を設置した。現状では、利用者に制約があること、機械が不具合になった際に対処しやすいこと等から、メインカウンター前に設置している。すなわち、当センターでの自動貸出機は、メインカウンターの補助的機能という位置付けである。それでもメインカウンターが混雑している場合、夜間等においてメインカウンタースタッフが少ない場合、あるいは利用者自身がセルフサービスでの貸出行為を苦にしない場合など、設置効果は表われている。今年度の利用実績は、毎月平均延べ900人が1,400冊（学部生、大学院生の毎月の全貸出冊数に対する平均12%）である。

2.4. 貸出制限冊数の増冊

貸出制限冊数については、1999年度から大学院生に対しては12冊から15冊に増冊した。その段階では、大学院生一人あたり年間約42冊の貸出実績があった。一方、学部生は人数が多いため、一人あたりの平均貸出冊数増伸を妨げることなどから、貸出制限冊数は5冊のままで推移していた。しかしながら、貸出制限冊数における大学院生との比率を考えた場合、当初は学部生の2倍の10冊が大学院生の貸出制限冊数であったが、この段階ではその格差が3倍に拡大してしまった。そのため学部生一人あたり年間約12冊という貸出実績ではあったが、貸出制限冊数を増やしてほしいという要望があったこと、貸出制限冊数の5冊に抵触する事例がカウンターで時々発生していたこと、前述した格差を多少なりとも是正したいこと、理工学メディアセンターが学部生に対する貸出制限冊数を7冊にしていたことから、自動貸出機設置と時期をあわせ、2000年9月からは学部生の貸出制限冊数を5冊から7冊に増冊して、サービスを拡充した。

2.5. 教職員からの延滞金徴収

延滞金制度は、利用者が延滞をしないように促すもので、延滞してしまった際の罰則として1日1冊

10円という延滞金を課している。当センターの延滞金制度の歴史は古く、昭和37年に、図書の館外貸出が大学院生2冊、学部4年生と通年スクーリング生とが1冊、学期中を通して借り出すことができ、その際の貸出期間は1週間、延滞すると1日10円徴収する方法が採用された。¹⁾この1日1冊10円という金額は、当時の封書(20g以下)の郵便料金であった。つまり、督促をする際の郵送料代に充当するものであったと思われる。現在の延滞金制度も、当時と全く同額で運用されているが、昭和37年当時と封書の郵便料金で比較した場合、現在では1日1冊80円が相場であってもおかしくはない。ただし、当センターは、延滞金を徴収することを目的にしているのではなく、延滞を防ぐための手法として採用しているため、値上げについては現在のところ検討していない。

一方で、延滞金制度が開始されて依頼、大学院生や学部生は対象者となっていたが、教職員は対象となっていなかった。おそらく長い間の教員の既得権である研究環境維持のために貸出、あるいは貸出期間という概念を意識したくないこと、学部予算で購入した図書に対する限定的な利用実態があったこと、などが理由に考えられた。その後、図書館諸先輩方の努力の賜物で、学部図書に対して学部生がカードによる検索、そして書架をブラウジングすることができるようになったこと、また貸出については、当初は貸出期間が限定され、長期休業期間における長期貸出の対象にはなっていなかったのを、図書館図書と同じような貸出規則に変更してもらえたこと、などから直接来館における学部図書の利便性が向上していた背景があった。その上で、OPACで検索が容易になり、塾内はもちろん、早稲田大学との間でも学部図書のデリバリーが活発に行われるようになった。当センター所蔵図書に対しては教職員には延滞金はかかっていたが、既に医学メディアセンター、湘南藤沢メディアセンター（以下、SFC）所蔵図書については、教職員からの延滞金を10年以上課していた。そのため、三田キャンパスの教職員が、SFCから図書を取り寄せて貸出を受け、返却期限に遅れた場合は、延滞金が課されるという現象が発生していった。まさに、当センターにおける異文化の進入であり、歓迎すべきことで

あった。当時、当センター所蔵図書に対する教職員の図書延滞は罰則が無いことも伴って日常茶飯事になっており、他の利用者に対する弊害要因にもなっていた。このことは一部の若手教員からも指摘され、当センター所蔵図書についても延滞を防止するためにSFCと同様に延滞金を課してほしいという意見も時々聞くようになってきた。そこで、全塾で公平な罰則にするため、あわせて当センター所蔵図書の延滞を減らすため、教職員に対する延滞金導入をめざし、2001年度に各学部図書委員会との交渉にはいった。その際に、当センターとしては、教職員の貸出制限冊数を35冊から50冊へ増冊すること、貸出中図書の返却期限前に通知サービスを行うこと、電話での継続更新サービスを行うこと、という新しいサービスを追加することで了解を得ていった。またこの過程で、当センターと同様にまだ教職員から延滞金を徴収していなかった日吉メディアセンター、理工学メディアセンター、経営管理研究科図書館においても同時期に歩調を合わせることができ見通しが得られた。さらには学内理事懇談会においても担当常任理事から各学部長に対して、懇談事項として了解を得ていただいた。

了解が得られたその後、該当キャンパスの非常勤講師を含む全教職員に対して、2002年度から全塾のメディアセンター所蔵図書が延滞金の対象になるという案内を発送した。また、移行期間として従来からの貸出中図書で延滞になっている場合は、一括変更で返却期限日を2002年3月31日に一律修正した。これによって、これらの図書が4月1日以降に返却されれば、自動的に1日1冊10円という延滞金が課金される環境を作った。こうして昭和37年の延滞金制度発足後、40年目にして教職員にも同じ延滞金制度が適用されることになった。

3. おわりに

その他にも同時期には、次のような ILL を含めたサービスを展開してきた。

- 閲覧、ILL 業務への業務委託スタッフの導入を開始
- 他大学図書館への図書館図書および学部図書の現物相互貸借を開始
- 通信教育部生へのサービス拡大（秋学期夜間スクーリング生への図書貸出サービス開始、夏期スクーリング生のスクーリング期間中における貸出期間の延長と塾内現物 ILL 開始）
- 修士論文複写許諾制度を開始
- 塾内のどのメディアセンターにおいても貸出中図書を返却できるサービスを開始
- ホームページでの塾内オンライン図書取り寄せ申し込み受付を開始
- 海外 ILL 文献複写受付サービスを開始

これらの事柄についても、当センターにおけるエポックメイキングな事例であったが、誌面の関係で、項目の列挙で留めておきたい。

〈参考文献〉

- 1) 慶應義塾大学三田情報センター、慶應義塾図書館史。東京、慶應義塾大学三田情報センター、1972、p.267.

〈2002.9.14 受理〉

たとえば図書システムの立上げ —私のアイデンティティ，数理科学科図書室—

いりた えつこ
入田 悦子

(2002.3まで理工学メディアセンター(数理科学科図書室))

数理科学科図書室(以下、数理科図書室と書きます)は、理工学部数理科学科の学科専用図書室として1978(昭和53)年に設立されました。図書・雑誌等の購入は、全て学科の図書予算によって賄われており、設立から24年を経た現在の蔵書数は、図書が約17,500冊、雑誌が約430タイトル、全体の約95%を洋書が占めています(2002年3月時)。この図書室の管理には、代々、理工学メディアセンター所属の嘱託職員1名が配属されることになっており、1999年4月から2002年3月までの3年の任期の間、私とその職務にあたることになりました。

1. もんだい

初めて訪れた数理科図書室は、とても「懐かしい」感じのする図書館でした。確か、私が大学生の頃(10年くらい前?)、既に図書館(現メディアセンター)ではシステム化が進み、貸出業務は勿論、図書の検索にもパソコン(OPAC)が使われ始めていたと思うのですが、数理科図書室では、図書の管理も検索も貸出も、全てカードによる手作業で行われていました。いまだにこんな図書館があるんだなあ…。感心しているうちは良かったのですが、仕事を始めてみて幾日も経たないうちに、代々の司書さんたちも苦勞(苦惱)してきたのであろうこの図書室の抱える様々な問題に、私も直面することになりました。

原因はやはり図書の管理方法そのものにあるように思えました。図書の受人管理が、担当者(私を含め、図書館業務未経験者も少なくありません)の「自己流の」手作業によって行われているということ、担当者の任期が2年または3年と短く、どうしても「その場限り」「その場凌ぎ」的な作業になってしまいがちなこと、また、統一された方法での管理が行われない(にくい)こと。にも関わらず、きちんとしたマニュアルもなければ徹底された引継ぎ

を行う余裕もないこと…。そういった問題を抱えたまま、また、そういった方法のまま、たったひとりでも図書室の管理にあたらなければならない状態にも、ボリューム的に、そろそろ限界が来ていました。

結果、数理科図書室には、「(本はあるのに検索カードが整備されていないために見つけてもらえない)埋もれ本」「(誤った請求記号をつけられたまま配架された)間違い本」などが溢れ…。それらの発見修正・整理作業だけでも自分の任期は終わってしまうのではないか。出るのは深い溜息ばかりでした。が、同時に、学科の大切な財産でもある数理科図書室を、今よりもっと「楽しく」「便利に」かつ「有効的に」利用してもらえ、生きた、生き生きとした図書室に変えることはできないのだろうか…。私は強く強くそう思ったのです。

2. はいけい

数理科図書室のシステム化の話は私が来て初めて持ち上がった話ではありませんでした。そう、もう何年も前から、幾度となく立案検討されては実現まで至れずにきた様々な事情と経緯がありました。そんなわけで、着任から1年4ヶ月、いよいよシステム化に向けての具体的な第一歩を踏み出せることになる2000年8月までの間は、下記のようなシステム化を意識した下準備的な作業を精一杯進めておくことで時間は過ぎていきました。

①図書室・雑誌書庫の大整理／未登録・未整理のままにされていた図書・雑誌の受入と整理を行いました。②蔵書点検／間違い本の発見に効果大でした。③手書き図書原簿の廃止／受入方法を統一するため、また、所蔵する図書の情報をより有効に活用できるようにするため、原簿をデータ化して保管することにしました。④間違い本の修正作業／骨の折れる作業でしたが、システム化の際には避けて通れない問題だったのでシラミつぶしに根気よく行いま

した。⑤数理科図書室ホームページの作成／システム化にさきがけ、図書(室)の情報を外部からでも見られるように数理科図書室のホームページ(www.math.keio.ac.jp/~library/)を作りました。おおまかな構成は、図書室案内、図書案内、(蔵書検索、)所蔵雑誌一覧(オンラインジャーナルの閲覧サービスも新たに開始しました)、リンク集。図書システムが完成し次第、蔵書検索もここからできるようにしようと思いました。⑥「Library-S News」の刊行／数理科学科の教員・学生を対象に、図書室からのお知らせ、新着図書のリスト等をE-mailで送信するサービスを始めました。

3. プロセス

システム化にあたっては、メディアセンター本部、理工学メディアセンターの助力(全面的バックアップ?)をいただきました。

提案されたのは、将来KOSMOS(現在のメディアセンターの図書システム)に移行する可能性を残した上で、より手軽で安価な数理科独自のシステムの構築で、システム化によって実現する機能は、目録作業(書誌所蔵登録・書誌所蔵検索)及び閲覧業務(貸出返却・利用者管理)。図書原簿や延滞者リスト等の自動出力も可能になりました。

作業は、外注により作成されたAccess(Microsoft)をベースとしたデータベースプログラムを使って、SQLサーバー(OSにはWindows2000 Serverを使用)にNacsisWebcat(国立情報学研究所総合目録データベース)からダウンロードしてきた書誌データと数理科図書室独自の所蔵データ(BookID、請求記号、購入日・価格等の受入情報)をセットしたものを蓄積していくかたちで行われました。図書システム完成までの主な作業プロセスは下記のとおりです。

- 2000.8／システム化最終方針決定。
- 2000.9／ハードウェア・ソフトウェア関係の準備。作業環境の整備。
- 2000.10／仮の図書システム納品。
- 2000.11／仮の図書システムを使った図書の受入登録開始。目録カードの作成を中止。遡及本へのバーコードシールの貼付作業・「書誌情報(さしあたってBookIDのみ)十所蔵情報(さしあたっ

て請求記号のみ)データセット」作成作業開始。

- 2001.3／バーコードシール貼付作業終了。本システム納品。「書誌十所蔵データセット」の完成。データベースシステムへのロード作業。
- 2001.4／遡及本の書誌データ蓄積作業開始。
- 2001.5／数理科図書室ホームページ公開。蔵書検索サービス開始(数理科学科内でのみ利用可能)。
- 2001.7／閲覧業務(貸出返却サービス)開始。
- 2001.10／登録(検索可能)書誌データ50%達成。
- 2002.3／登録(検索可能)書誌データ98%達成。

私が在職中に携われたのはここまででした。一応なんとか完成までこぎつけることはでき、数理科図書室は所蔵する本の情報を確実かつ有効に蓄積することのできる、生きた図書室へと生まれ変わりました。しかし、まだ多くの課題や問題点が残されたままなのも事実でした。幸い、頼もしい後任の方が引き継いでくださり、現在は図書システムの精度の向上・学科外へのOPACの公開準備などのために日々奮闘してくださっているようです。

4. おわりに

「どうしたら利用者にとってもっと便利になるのか」。「どうしたら利用者に喜んでもらえるのか」。「管理者よがり」じゃいけない、常に利用者の立場に立ったサービスというものを追求しながら、この3年間、思いついたことはかたっぱしから実行してきました。数理科図書室のシステム化は、私が実現したかったことのほんの一例に過ぎません。まだまだ他にもやりたかったこと、やり残してしまったことはたくさん。反省も尽きません。しかし…。

「入田さんが来てから図書室が素晴らしく変わったよ、ありがとう。」作業中に通りがかった先生、本を借りに来た学生が、ふっとそんな言葉を投げかけてくれたことがあります。仕事の苦勞など、一瞬にして吹き飛んでしまうと同時に、その場で融けてしまいたい気分になる。ああ、この言葉を聴くために私は頑張ってるんだなあ…。司書冥利に尽きる幸せな瞬間。こちらこそありがとうございます。数理科図書室は私のアイデンティティそのものでした。

〈2002.9.10 受理〉

コレクション『創想ライブラリー』

みやいり あきこ
宮入 暁子

(理工学メディアセンター課長代理)

理工学メディアセンター（以下、当館）に2001年9月に誕生した教養コレクションが『創想ライブラリー』である。研究や学習の合間に気軽に読んで、リラックスしたり、思索にふけったりすることのできる図書を中心に構成されている。入退館ゲートの側に3段5連の低書架を設置。通常の図書予算は使用せず、寄附金での購入図書と寄贈図書で展開されているミニコレクションである。

1. 誕生の背景と経緯

当館は、理工学専門図書館としての蔵書構築に努める一方、限られた図書予算と書庫スペースの問題から人文・社会科学等の資料は、隣接する日吉キャンパスの日吉メディアセンターでの利用を念頭においている。また塾内蔵書OPAC検索機能も発達し、塾内現物相互貸借も可であり、他センターの蔵書も研究関連を中心に利用されている。しかし利用者から「矢上の学生・院生は夜遅くまで実験・研究で忙しく日吉も利用できない」という声があるのも事実である。また「科学技術に対する高度な専門性のみならずグローバルな思考や深い洞察力、さらに豊かな人間性が求められている」利用者のために、幅広い知識修得や他センター蔵書利用への橋渡しとなるような教養ミニコレクション構築を思案したが、厳しい図書予算はそれを阻んでいた。しかし利用者より『技術移転』で得られた資金の一部を指定寄附して頂いたのをきっかけにスタートすることができた。

そして創想館（2000年完成理工学部新棟。「創造」と「想像」の舞台）1階に拡張されたスペースに書架を新設できたので、このコレクションが、創想や創発に繋がる広い視野を養うきっかけとなれば幸いと思い『創想ライブラリー』と名付けた。

2. 蔵書の特徴と運用

- 選書方針：幅広く学ぶことで、真の独創性が生まれる。利用者の知的好奇心を誘うような図書。内容的には日吉の一般書のような図書。
- 選書方法：館員全員・一部の教員からの『私が薦める図書』より選書した。なお、慶應義塾大学出版会からの寄贈図書（新刊書）からも選書。

- 3段5連の低書架の範囲で構築し、永久保存対象外とする。2002年8月現在蔵書251冊。近く100冊増加。
- 書架の関係で、小型本（文庫・新書）は対象外。
- 資金の関係で、一過性の図書は対象外。
- ブックカバーの上にフィルムコーティングして書店より納品してもらい、書店の棚のイメージを残し、利用者の知的好奇心を誘う。
- OPAC検索可能の他、タイトルリストを当館HP掲載(<http://www.lib.st.keio.ac.jp/coll/ssl.html>)
- 請求記号はSS@使用。貸出は来館のみ。どこでも返却不可。和書貸出は2週間。



3. 利用状況

開設以来11ヶ月の貸出回数は1位25回（当館全体でも1位）、2位19回（同5位）であり、合計1361回である。受入が2001年9月128冊、2002年3月123冊であることを考えると、利用者に好評のようである。普段から約50%の在架状況である。

4. 今後の課題と展開

魅力ある Working Collection を維持するためには、資金面が一番の課題である。通常の図書予算は厳しい状態にあるため、現時点では使用しない方針である。賛同を得た方からの資金のご厚意を期待する他、選書方針にあった図書、その中でも新刊書等を、ご寄贈頂けたら幸いと思っている。

〈2002.9.10 受理〉

SFCにおけるマルチメディアサービス

せき ひでゆき
関 秀行

(湘南藤沢メディアセンター課長
兼 湘南藤沢インフォメーションテクノロジーセンター事務長代理)

1. はじめに

湘南藤沢メディアセンターのマルチメディアサービス担当(以下、マルチメディアサービス)はその規模、サービス内容において、図書館組織を中心としたメディアセンターの一部門としては異質な存在と言える。メディアセンター開設当初は、センター内で小規模にオーディオビジュアル(以下、AV)機器を提供するのみであったが、その後キャンパスのニーズに呼応して業務を拡張してきた。現在ではキャンパス全域のAV機器の維持・利用サポートを中心業務としている。湘南藤沢キャンパス(以下、SFC)におけるマルチメディアサービスの業務について変遷を紹介し、その意義と課題を述べる。

2. 主要業務の変遷

主要業務の変遷は以下のようにまとめられる。

● コンテンツ作成機器の提供

メディアセンター内で数台のVHSビデオデッキを接続して、ビデオ編集ブースとして設置したところから始まり、規模の大幅な拡大、アナログ編集からデジタル編集への移行を経て、現在はメディアセンター外の環境も含めてキャンパス全体で100台以上のパソコンでビデオ編集ができる環境を提供している。また、開設当初は機器がなかった地下1階のスタジオエリアにも業務用レベルの映像・音響編集システムを設置したほか、昨年は人間の動きを三次元データとして取り込むためのモーション・キャプチャー・システムを導入し、授業でも活用されている。スタジオ設置機材については、利用者向け講習会を実施している。

● 機材貸し出し

当初学事担当で貸し出しをしていたVHSビデオカメラ3台がメディアセンターに移管され、需要の高まりに応じて年々増強を図ってきた。現在ではデジタルビデオカメラ60台、デジタルスチルカメラ15台を貸し出ししているほか、音の素材録りのため

のDATレコーダも揃えている。メディアセンター1階のAV専用のカウンターでこの機材貸し出しに対応しており、AV機器利用の質問窓口としても活用されている。

● 教室AV環境

各教室に設置されているプロジェクタ、ビデオデッキなどの単体機器のほか、操作システム全体について、1995年頃から長期休業期間中の定期点検を担当することになった。その後教室への関わりを深めていき、日常業務として教室AV環境の維持・利用サポートを行うようになった。機器トラブル対処・取扱説明を行うほか、改修計画立案や遠隔授業サポートなど運営全般に責任を負うまでに業務は拡大している。

このように多岐に渡るサービスを行うに至った背景には、活発なAV機器利用が求められるSFC特有の授業カリキュラムがある。映像・音像そのものをテーマとする授業が多く、それ以外でも課題としてビデオカメラの利用やビデオ編集・オーディオ編集が求められることが少なくない。キャンパス内のパソコンでも、ワープロソフトや表計算ソフトの使用と同じ次元でビデオ編集が行われることを想定しなければならない。

「コンテンツ作成機器の提供」「機材貸し出し」については、規模の違いはあるが他キャンパスのメディアセンターでもサービスが行われている。SFCのマルチメディアサービスが他センターと異なる点は、「教室AV環境」の維持・利用サポートに携わっている点である。なぜマルチメディアサービスが教室AV環境と関わるようになったか、その要因について整理してみたい。

3. 教室AV環境との関わり

近年、教室のAV機器整備はどのキャンパスにおいても積極的に進められているが、SFCでは開設当

初からすべての教室にAV機器が設置され、授業でのAV機器の活発な利用が浸透していた。その後ラップトップコンピュータ、プレゼンテーションソフトの普及によって、授業でのプロジェクタを始めとするAV機器の利用頻度はさらに増え、求められるサポート内容も多彩かつ高度になっていった。SFCではAV技術に詳しい教員・学生が多く、専門的な質問・要求が度々寄せられる。メディアセンターが教室AV環境に関わり始める以前は、総務担当と学事担当が維持・利用サポートを行っていたが、このように高まる要求への対応に苦慮していた。そしてこのことを背景に、メディアセンターが授業サポートに関わり始めた。

はじめは総務担当・学事担当を技術面で支援するというスタンスであったが、より効果的・効率的な利用サポートを追求していった結果、第一義的な窓口としての機能がメディアセンターにシフトしていったのである。

組織の再編成をせずに大きな業務を部署間でシフトすることは、相当な困難を伴うのが通常であろうが、

- 1) 技術スタッフの存在
- 2) 組織の垣根を越えた協力体制構築の下地の存在
- 3) AV環境委員会の存在

があったためにスムーズに進められたと考える。

- 1) は最大の要因であるが、元々はメディアセンター内の編集環境の維持・管理を目的に常駐していた委託スタッフのAVスキル活用への期待であった。
- 2) については、当時のSFCの事務組織が、総務担当・学事担当・研究担当のほかにはメディアセンターだけで、「メディアセンターがサービス機関としてキャンパスに貢献できる部分があれば前向きに対応していく」というコンセンサスが成立しやすい状況にあったと言える。特に、同じメディアセンターの一部門であった当時の情報システムサービス担当（現在の湘南藤沢インフォメーションテクノロジーセンター、以下ITC）はキャンパス開設当初からキャンパス全域のインフラストラクチャーの維持・管理を行っており、この点からもメディアセンター外へのサービス展開は

自然な流れであった。

- 3) のAV環境委員会（現在は教育IT委員会）は主に教員で構成されるメディアセンター専門委員会の一つであるが、当初の役割はメディアセンター内のコンテンツ作成機器についての方向性を議論・審議する場であった。この委員会の中心テーマがメディアセンター内の話から「教室AV環境の改善」へと変化してきたことが、より積極的に教室環境に関わる大きな推進力となった。単なる維持・利用サポートにとどまらない、教室の設計という段階まで踏み込むに至ったのは、委員会の示す方向性を実践していった結果であった。

4. 教室サポートの意義と問題点

AV機器についての迅速なサポートを最優先とするマルチメディアサービスの存在はスムーズな授業運営に貢献していると確信するが、マルチメディアサービスが主体となって担当することの一番のメリットは、AVの専門部署として持っている知識・スキルを最大限に活用できる点であろう。設置済みのAV機器のトラブル対処・取扱説明に加え、新しい技術の応用にも対応できるよう技術動向にも目を向けている。教室改修計画においても、一部の設計者の自己満足や業者任せの単なる機器の組み合わせに終始するのではなく、日常のサポート業務を通じて把握できる教員・学生の利用実態や新しいニーズに配慮した設計を反映させることができる。そういう意味では、遠隔授業や授業のオンライン化など教育へのAV技術の新たな活用が進む今、マルチメディアサービスがキャンパス全体のサポートを担うことの意義がより明確になってきたと言える。

一方マイナス点として、マルチメディアサービスがAV業務を一手に引き受けることによって、元々教室AV環境と深い関わりがあった総務担当と学事担当が意識の面で一步引いた立場になってしまっているのではないかという危惧がある。マルチメディアサービスはAV機器利用という視点から教室を捉えているが、施設の維持・管理という視点からの総務担当の関わり、授業カリキュラムとの連動という視点からの学事担当の関わりが、教室AV環境のより効果的な運営のためには不可欠であると感じてい

るからだ。このため、昨年度から学事担当と定期的に情報交換のためのミーティングを持ち、意思疎通を図っている。利用者のニーズを部署間で埋もれさせることのないように心がけており、その成果は教室改修計画などに反映され始めている。

5. 課題：人材の確保

マルチメディアサービスにとって最大の課題はAVスキルを持った人材の確保である。現在の人員構成は、事務職員1名、委託スタッフ3名（うち1名は非常勤事務スタッフ）である。このほか、AVスキルを持った学部学生をコンサルタントとして採用し、カウンターでの相談・機材貸出サービスを中心に常勤2名で担当してもらっている。

業務全体の中では教室サポートにかかる比重が圧倒的に大きくなってきている。教室機器の拡充、授業スタイルの多様化とともに守備範囲は年々広がっており、マンパワーが十分かどうかは常に意識しなければならない。

スキルの面においては委託スタッフに頼るところが大きい。AVのあらゆる分野に精通した人材を確保することは困難である。コンピュータ業界とは異なり、AV技術スタッフの人材派遣はまだ盛んではない。したがって常に進み続ける動きに対応するには、日常業務と平行して新しい技術を習得する、という姿勢でスタッフの育成を図らねばサービスが成り立たない。この問題についてはスタッフのモチベーションの維持・向上を図る一方で、ITCとの連携が欠かせない。この数年の間にAVとコンピュータの融合は進んでおり、ビデオ編集環境の提供、遠隔授業サポートなどマルチメディアサービスとITCの共同業務による成果は多い。ITCとの強い協働体

制なしには、「教育IT化」などの面で今後の先進的なサービス展開はなし得ないと考えている。

また事務職員については、図書館職員枠となっているが、現場のマネージメントのためにはAVについての一定水準以上の知識・スキルを身に付ける必要がある。専門知識を持たないところからのスタートになるため一人前になるまでには時間を要し、結果として人事の硬直化を招いている。数年経ったら定期的に人事異動という体制ではなかなかプロフェッショナルの域に達し得ないも事実であるが、AVに対するニーズの伸びを見据えれば、専門知識を持った職員の育成は急務と言える。これまで通りOJTによって既存の人材の中から輩出していくことも必要であるが、適性を持った技術経験者の採用も視野に入れるべきであろう。

6. おわりに

マルチメディアサービスは、図書館サービスのよ様な歴史的な積み重ねがなく、ケースバイケースの対応を迫られることが少なくない。所定のルールと例外への対応の間で落としどころを見出しながら業務をこなしているのが現実である。これは担当者にとってはつらい部分でもあるが、一方ではますます複雑・多岐になってくるニーズに対して臨機応変を信条として臨むことができるという強みとなっている面もある。マルチメディアサービスの今の姿はまさにキャンパスのニーズに柔軟に应运ってきた結果なのである。これまで通りの身軽なフットワークの必要性は言うまでもないが、その流動的な状況下で今後の足場作りも開始しなければならない段階に来ていると考えている。

〈2002.9.17 受理〉

闘病記つれづれ

こいけ ともこ
小池 智子

(看護医療学部専任講師)

「ホームページに闘病記を公開していますのでご覧下さい」。ある自治体の難病相談の相談員をしていた頃、患者さんからホームページ開設の案内をよくいただきました。多くは、病気の発症から治療の様子、症状の困難さや周囲の励ましに対する自分の思いなどを、日記風に実に克明に記した読み応えのある内容です。短い相談時間では推し量れない、療養生活の様子や家族との葛藤などを知ることが多く、次の相談に生かすなど、大変勉強になります。

また、低脂肪で繊維の少ない食事が必要な方は、工夫を凝らしたレシピとメニューの写真を公開するなど、療養の知恵と工夫を紹介するコーナーもあり実に情報が充実しています。さらに、eジャーナルや医学学会のホームページなどから、最新の研究成果や治験薬の効果に関する情報を入手し紹介する方も増え、まさに、賢く治療とケアを選択するe患者の出現です。そのようなe患者のひとりKさんは、外来受診の度に主治医から「ところで、新しい治療情報があったら教えてよ。最近では、患者さんのほうが詳しいんだよね」と聞かれるのだと、少し誇らしげに苦笑していました。

在宅で療養している患者さんや家族の方々の様子を、日常的にリアルタイムで知ることになったのは最近のことで、ほんの数年前までは、手紙や手記、著作などで、それもずいぶん後になってから、知ることが多かったのです。

図書館には、病気との付き合い方や治療の記録が数多く並んで、同じような境遇にある方や治療やケアを行っている医療従事者の励ましとなっています。私が看護師として勤めていた病棟のささやかな図書コーナーには、出版された本だけではなく、患者さんやご家族の方から寄贈された闘病記や体験記、遺作集が置かれていました。多くは、親しい者だけに配るため非売品として製本されたもの、手書きの手記をコピーして冊子にしたものです。

短い入院の間に、時に辛い治療を支え、時には看取った方々の鮮やかな印象は、残された作品によって意味付けられることがよくありまし

た。ある方は、呼吸停止の後、意識が十分に回復せず、記憶などが断片的なのですが、子供と夫そして周りの人々に非常に穏やかな表情と仕草で、感謝の言葉を添えるのを忘れることがありませんでした。亡くなられた後、寄贈された画文集には、彼女が発病して以来、画きとどめてきた草花や子供たちのスケッチ、これまでの人生への感謝と満足、死への静かな覚悟を詠んだ俳句や随筆がしたためられていました。人は最後のひとときまで、その人が生きてようにそこに在るものなのかもしれません。

また、闘病を記したものではありませんが、その方の生きようが偲ばれる作品もありました。

Bさんは、胃がんの末期で、食事が十分取れない上、吃逆しゃっくりがとまらず、たいへん閉口していました。或るとき病室を訪れると、いつまでも

困らされているのもしゃくだから、吃逆しゃっくりを題材とした文学作品を探していたところ、ついに、森鷗外の作品の中に見つけたとのこと、「彼のような文豪がこうして吃逆しゃっくりについて書いているなんて、僕も慰められるよ」と満

足そうにウィンクを投げよこしました。それからというもの、病室を訪問するたび、「いくつか俳句を見つけたけど、こっちのほうが断然ユニークで感じが出ていると思う」などどいう、私のいいかげんな批評を、Bさんはうんうんと目を細め実に楽しそうに聞き、吃逆しゃっくり文化論に花を咲かせておりました。

桜のつぼみがほころびかけた陽春のある日、あれほど困らされた吃逆しゃっくりと永遠にお別れをし、Bさんはお亡くなりになりました。数日後、彼が編纂した歳時記が病棟に送られてきましたが、それは、日々にふさわしい詩や短歌、俳句、漢詩を365日分集めたとても素晴らしい歳時記でした。趣味で吃逆しゃっくりという主題を文芸作品に求めていたのではなく、まさに驚くばかりに博学の文学者の仕事だったのです。調子に乗ってとぼけた文芸批評を繰り広げていたのかと、顔から火が出るとともに、彼一流の懐深いユーモアに心から涙した1日でした。

<2002.9.30 受理>



図書館・情報学科開設50年

たむら しゅんさく
田村 俊作
(文学部教授)

2001(平成13)年は、図書館・情報学科が開設されて50年目にあたる節目の年であった。同年6月30日には、三田キャンパス北館ホールで記念式典を挙行了た。

帝国図書館付設の文部省図書館員教習所として出発した現在の筑波大学図書館情報学群とともに、わが国を代表する図書館情報学の研究教育機関として、1951(昭和26)年に開設して以来のその歩みは、わが国の図書館情報学の歴史の重要な一部となっていることは、関係者の等しく認めるところであろう。

本稿では、開設前後の動向を中心に、図書館・情報学科の五十年の歩みを振り返ってみたい。もっとも、厳密で歴史的な記述をするつもりは毛頭なく、私見が大いに入っているので、読者は眉に唾をつけてお読みいただきたい。なお、記念式典にあわせて慶應義塾図書館で開催した記念展示「戦後図書館改革と日本図書館学校の開設」の解説文を一部利用していることをお断りしておく。また、1999(平成11)年度の文学部改組により、現在の正式名称は人文社会科学学科図書館・情報学系図書館・情報学専攻であるが、まだ十分なじみがないため、本稿では使い慣わしてきた「図書館学科」、「図書館・情報学科」、あるいは単に「学科」という呼称を用いることとする。

1. 「日本図書館学校」の開設

図書館・情報学科誕生のきっかけとなったのは、米国の大きな影響のもとに戦後行われた一連の図書館改革である。1948(昭和23)年の国立国会図書館開館、1950(昭和25)年の図書館法、1953(昭和28)年の学校図書館法などは、こうした戦後図書館改革の一環として捉えることができる。

図書館改革の出発点となったのは、戦後間もない1946(昭和21)年3月に来日し、教育改革に大きな

影響を与えたと言われている第一次米国教育使節団である。使節団には図書館関係者としてレオン・カーノフスキーシカゴ大学図書館学大学院教授が参加し、わが国の図書館事情を調査した。使節団の報告書(同年4月)には、公共図書館及び大学図書館のあり方に関する勧告などとともに、図書館専門職員の養成について、「図書館専門職員の養成のためには、なるべく優良図書館施設を有する大学に付属せしめた図書館学校を設置するのもまた良いであろう」との勧告がある。わが国の戦後民主改革を遂行する上で、図書館は有益な施設であり、整備が必要であるが、そのためには専門職員を養成することが不可欠である。養成は大学で行われるべきで、演習や実習を行う関係上、良い図書館を持つ大学で行われることが望ましい。こうした認識が、米国図書館関係者の間に戦後早い時期から存在したことがわかる。

その後も、国立国会図書館設立の際に顧問として1947(昭和22)年12月に来日し、国立国会図書館法を実質的に作り上げたクラブとブラウンや、同館開館後に特別顧問として1948(昭和23)年7月に来日し、同館の運営の方向に大きな影響を与えたダウンズなども、総合大学に図書館学校を設けることを提言している。

当時の日本では、すでに述べた帝国図書館付設の文部省図書館員教習所に始まる上野の文部省図書館職員養成所が唯一の専門職員養成機関であったが、これは1950(昭和25)年頃には短期大学程度とされていたようである。大学では、東大・京大をはじめとするいくつかの大学で図書館学の講義が行われていた。1950(昭和25)年の図書館法成立後は、同法に言う専門的職員(司書及び司書補)を養成する必要から、全国各地の大学で図書館学の課程が設置されたり、講習が行われるようになった。こうした機運を背景に、日本側でも、米国人による種々の勧

告に応えるかたちで、例えば、東京大学の南原繁総長に、東大中央図書館に図書館学研究所を付設し、将来は大学院課程に展開する構想のあったことが、最近の研究で紹介されている。

慶應に図書館学科が開設されるに至った直接のきっかけがどのようなものであったのかを裏付ける資料は、現在までのところ見出されていない。初代主任教授ロバート・L・ギトラーは、自伝の中で連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）民間情報教育局のドン・ブラウンが、陸軍省占領地域局のワゴナー大佐に図書館学校開設を提言したことから始まったと回想している。開設が検討されるようになった背景には、先述の米国人図書館関係者からの度重なる勧告とともに、図書館法の成立や、民間情報教育局の図書館（アメリカン・センターの前身）が全国各地に設けられたことなどにより、図書館専門職員が必要になるとの認識などもあったものと思われる。

いずれにせよ、1950（昭和25）年5月頃、陸軍省は図書館学校設立に向けて、米国図書館協会に打診した。協会はこれに応じて、同年6月にプロジェクトの予備申請を提出、プロジェクトを開始する前に、しかるべき人物を日本に派遣して、予備調査を行う必要があることを指摘した。その結果、すでに来日経験のあるダウンズが同月に再度来日、東大、慶大、早大、日大、京大、同志社の六大学を視察した。7月17日付の報告書では、図書館学校は米国のような大学院課程でなく、学部課程に開設するのが適当であることなど、基本的な運営のあり方に関して勧告し、さらに、設置すべき大学としては、東大を第一候補、京大を第二候補として推薦した。慶應が誘致に熱心であることは認められていたが、私立大学であるなどの理由から、特に推薦はされていない。

ダウンズ報告を受けて、米国図書館協会は8月に日本図書館学校（Japan Library School: JLS）プロジェクトを公式に申請、諮問委員会の組織や主任教授（Director）の選任などの作業を開始し、10月には州立ワシントン大学図書館学大学院主任教授であったギトラーが主任教授に選ばれた。

ギトラーはJLSの立ち上げに向けた業務を開始、11月には5人の専任教員と図書室司書1名の採用

を決定した後、12月30日に来日、大学の最終的な選考に入った。候補を東大、京大、慶大の3大学に絞り、幾度かの訪問の後、さまざまな項目について三者を評価、1951（昭和26）年1月21日付の報告書で、最終的に慶大を候補として推薦した。

ギトラーが塾を訪れたのは1月10日、福澤先生誕生記念日であった。翌日付ダウンズ宛書簡によれば、訪問は昼食をはさんで午前10時から午後2時半に及び、潮田塾長等と熱心に懇談した。このときに贈られた英訳福翁自伝（訳者である外事部長清岡瑛一はあいにく風邪を引いていたため当日は欠席していた）を読んで感銘を受けたことが、塾に決定する際に大きな影響を与えたとは、後年ギトラーがしばしば言及したところである。実際、報告書では、西洋式の教育理念の受容度に関する項目（評価項目1）で塾は5ポイント評価の1（最高）、東大は5（最低）であった。

これにより、JLSは塾に開設されることが決まった。公式の通知は2月5日、塾からの受諾の返信は8日であった。その後、文部省への設置認可申請（3月10日）、塾評議員会の承認（3月23日）、入学試験（4月4日と11日の2回）、開設式（4月7日）を経て、4月16日に授業が始まった。米国による全面的な資金援助のもと、慶應義塾大学文学部図書館学科とJapan Library Schoolという二つの名前を持ち、文学部長と主任教授の共同管理下に置かれる、という異色の学校のスタートであった。

2. 発足後の苦闘とロックフェラー財団の援助

JLS発足時の陣容は、5人の専任教員と司書1名が米国人で、他に主任補佐1名、書誌学助手1名、事務・通訳・翻訳・司書等の事務職員が計12名、タイピスト5名、用務1名という大所帯であった。文字通りの米国式の‘library school’だったわけである。事務室や教室は現在の図書館の位置に当時あった五号館に設けられた。別に旧図書館1階に図書室が置かれた。米国人教授による講義は英語で行われ、日本人による通訳がつけられた。シラバスが作成され、レポートがひんばんに課されるなど、米国式の授業が行われた。提出されたレポートや答案もすべて翻訳された。

こうしたJLSの活動とともに、米国人教授団は各

地で講習会の講師を務めるなど、わが国の図書館専門職員養成に向けて精力的に活動し、例えば、神戸市立図書館長志智嘉九郎の「今以てCheney教授をreferenceに関する限り我が師であると思っているのである」という言に示されるような大きな影響をわが国図書館界に与えたのであった。

教育活動では順調であったものの、運営面でJLSは設立直後から大きな困難に直面することになる。当初の契約では、米国政府による援助は1952(昭和27)年6月末までの15ヶ月間で、それ以降は慶應が引き継ぐこと、とされていたが、その程度の短時日のうちに慶應が自己資金で日本人の教授団による同一レベルの学校を維持できるようになる筈もないことは、開設後かなり早い時期から関係者の認識するところとなっていたように思われる。

そこで、ロックフェラー財団に資金の援助が打診された。折しも、サンフランシスコ講和条約が1952(昭和27)年4月に発効して、連合国軍による占領が終了するのに伴い、援助も予定より早く4月で打ち切られることになったため、まず緊急援助の支給を受けた後、7月から4カ年に渡る援助計画が始まった。財団による援助は毎年減額され、徐々に慶應の拠出分を増やして行き、最終的には完全に慶應の経営下に入る、という計画であった。日本人の手によって運営できるように、米国人教員は日本人教員に徐々に置き換えられてゆき、援助計画が終了した1956(昭和31)年6月末には、最後の一人となったギトラー主任教授も退任して、JLSは完全に塾の1組織としての道を歩むことになったのである。

なお、ロックフェラー財団による援助はこの後も続き、訪問教授の招聘、留学生の派遣、生物医学図書館員特別養成プログラムの開催など、さまざまな活動を支援した。財団の援助は、発足間もないJLSを存続・発展させる上で決定的な役割を果たしたのであり、その貢献にはいくら感謝してもし過ぎることはないであろう。

3. 「図書館・情報学科」の誕生

ギトラーの跡を継いで、JLS開設時以来の塾学務担当常任理事であった哲学の橋本孝教授が1956(昭和31)年7月1日から図書館学科主任教授に就いた。同主任の下で、学科は新たな途へと踏み出し

てゆく。

1961(昭和36)年の創立十周年記念式典の後、翌1962(昭和37)年には新築された西校舎に移転した。校舎の北翼2階部分に、教室、研究室、図書室、視聴覚室、事務室を配置した専用スペースである。

この時期に、学科は、ドキュメンテーションから情報学へと急速に変貌しつつあった科学技術系の情報活動への傾斜を次第に鮮明にしてゆく。さらに、1963(昭和38)年の三田図書館学会設立に見られるように、研究面での整備も進められた。

このような動きの帰結が、1967(昭和42)年度の大学院修士課程図書館・情報学専攻の開設である。これは米国において、情報技術の急速な進歩にあわせて、従来のlibrarianship, library scienceとdocumentationとを情報学のもとに統合し、library and information scienceを形成する動きにいち早く呼応したもので、「情報」の名を冠した学部・学科としてはわが国初であった。開設時の修士課程教員10名(非常勤を含む)の顔ぶれを見ると、当時科学技術情報活動の第一線で活躍していた人材を軸に、情報技術関係の人材などを交えて構成していることがわかる。

翌1968(昭和43)年には、修士課程にあわせて学科の名称を「図書館・情報学科」に改称、さらに開設20年に当たる1971(昭和46)年には、米国からパーカー・モーハートの両博士を迎えてカリキュラムの見直しを行い、その結果をもとに翌年学部・修士課程のカリキュラムの抜本的改訂を行った。資料・資料組織・検索・システムという四本柱からなるカリキュラムで、現在に至る学科カリキュラムの基本となるものであった。

1975(昭和50)年には博士課程が開設、学科の研究教育体制は一応の完成を見たのである。

その後の世界的な情報化の進展を見ると、いち早く「図書館・情報学」への脱皮を行った学科の先見性は高く評価されるべきであろう。また、この時期は全塾の図書館資源を統合的に運用する「慶應義塾大学研究教育情報センター」制度が発足した時期であり、学科の変化は全塾規模の図書館の情報化への変化に対応する動きでもあった。他方、同時期に公共図書館界もまた日野市立図書館の活動などをきっかけとする革新を成し遂げつつあったが、これに対

しては特に対応した様子はない。こうした点からも、この時期の学科の方向付けを見て取ることができる。

4. 文学部の1専攻として

学科の主任教授は、その後澤本孝久、小林胖と変わったが、塾組織内での意義がなくなったため、1978(昭和53)年に廃止され、名称は対外的に学科の代表者という意味で慣例的に用いるようになった。

1982(昭和57)年、新図書館の完成にともなって、学科の研究室は研究室棟に、図書室は新図書館5階にそれぞれ移転し、事務室は廃止、教室は一般教室に統合されることとなった。主任制の廃止に続き、研究室・事務室・教室・図書室を一体となって運用する組織上の単位としての「学科」はここに消滅し、文学部の他専攻と同様、単に教員組織としてのみ学科は存続することになったのである。文学部の組織にとって米国式の school は異質なものであっ

たから、これはJLSの慶應への統合の完成として、いつかは起こるべきことではあったであろう。

その後では、1993(平成5)年にカリキュラムを再度改訂し、図書館・メディア・検索の3コースを設けて、学生が履修する際の選択の幅を拡げた。学生の志望にあわせて、図書館員養成のためのカリキュラムから、メディアや情報検索・情報技術への志向にも対応するように図ったのである。

開設以来の 'library school' としての性格を堅持しつつ、メディアや情報技術への幅広い研究関心の中にそれを位置づけてゆくことが、わが学科に科された継続的な使命であると私は思っている。この両者は決して両立不能な2方向なのではなく、むしろ共に内容を豊かにしてくれるような、学科に不可欠の2側面であると私は信じている。次の50年もまた、両者の緊張関係を維持しつつ、いっそう広く深い研究と教育を行ってゆく存在でありたいと思う。

〈2002.11.4 受理〉

慶應義塾図書館貴重書展示会

内 容：『辞書の世界—江戸・明治期版本を中心に—』

慶應義塾図書館の蔵書を中心に、平安時代から明治期に至るまで、わが国でよく利用された辞書を100点余り選び、印刷文化との関わりも含め、展示解説を行なった。来場者は2,350名。

主 催：慶應義塾図書館

協 力：慶應義塾大学斯道文庫

協 賛：丸善株式会社

会 期：2002年1月28日(月)～2月2日(土)

会 場：丸善・日本橋店4階ギャラリー

講演会：1月28日(月)「辞書と版本」	常任理事	関場 武
1月29日(火)「辞書と索引の歴史」	文芸評論家・作家	紀田順一郎
1月30日(水)「『広辞林』から『広辞苑』へ」	評論家	武藤 康史
1月31日(木)「中国の百科全書と日本の古典」	斯道文庫助手	住吉 朋彦
2月 1日(金)「歌書・歌語・歌枕—和歌と辞書」	斯道文庫教授	川上新一郎

アダム・スミス自筆書簡をめぐる一選定から資料保存まで

いちご けんじ
市古 健次

(三田メディアセンター課長代理)

1. アダム・スミス自筆書簡

"My Lord I am extremely obliged to your Lordship for the very polite ..."で始まる書簡がある。これはあの有名なアダム・スミスの1769年1月15日付けのヘイルズ卿宛書簡である。この書簡が慶應義塾図書館に保存されている。慶應義塾が購入した経緯は、慶應義塾大学経済学部の小池基之教授による『日本経済新聞』(1970.2.10朝刊)の「アダム・スミスの手紙一所を得て慶應義塾図書館にも二通」と言う記事において詳細に語られている。1968年7月9日付けの朝日新聞において、雄松堂書店の新田満夫社長がロンドンのサザビーズのオークションでアダム・スミスの自筆書簡4通を落札し、その内3通はこれまでに知られていなかったのものであるという記事を読んだのが購入のきっかけであったと言う。

アダム・スミスと慶應義塾との関係は古い。『国富論』の日本語訳は福澤諭吉門下の石川暎作によって1884年から88年にかけて翻訳されている。また煉瓦造りの図書館が開館(現旧図書館)する直前の1911年には、「アダム・スミス記念会」が開かれ、開館記念として購入してきたアダム・スミス関係書、百数点が展示されたという。『国富論』の異版、各国語訳などのアダム・スミス関係本を購入しそして、今回取り上げた自筆書簡を含め、現在に至るまで異版、各国語訳を購入してきている。

農業経済が専門である小池教授は、学説史も担当され、スミスと大きな関わりを持っていた。4通の書簡は、慶應義塾図書館が1769年1月15日付けと、3月12日付けを購入し、3月5日付け書簡は竹内謙二氏、5月16日付けは京都外国語大学が購入した。販売と同時に雄松堂書店は、ファクシミリ版を製作し、配布していた。慶應では購入後、小池教授は、『三田学会雑誌』¹⁾に全文を載せた論文を書いている。

私がアダム・スミスと慶應との関係を調べるきつ

かけになったのが、展示であった。レファレンス・ルームの一角に展示ケースがあり、図書館員で構成されている展示委員会が企画を行い、展示スペースは余りないものの、年に10回ほど展示を行っている。図書館長の飯田裕康経済学部教授が館長を退任される時期の展示なので、館長の専門である学説史に関係して「アダム・スミス展」を企画することになり、『国富論』の初版、『国富論』の異版、『国富論』の各国語訳、そして自筆書簡を展示することに決まった。そこで、展示がらみで、資料保存、OPAC検索のことから、さらに選定、書簡、文書について少しまとめてみることにしたのである。

2. 現状とその対策

1) 資料保存

2通の書簡は以前から書庫の棚にあり、茶封筒に入っていることを知っていたが、中を覗いたことはなかった。というのは高価だし、希少価値があり、目的もないのに見る行為は資料保存と背反するし、安易に見ることを躊躇させた。しかし今回、展示するにあたり、実際に書簡を取り出して見る必要に迫られた。大型の茶封筒に厚紙があり、保存紙に挟んであった。古い茶封筒や、台紙である保存紙は酸性紙に対する認識がなかったころのもので、取り替える必要があった。そのため、ある程度書簡をガードするような中性紙でできたケースと台紙を業者に早速発注した。本来は真空パック、エンキャプレーション(カプセル化)でやるべきであろうが、本格的にエンキャプをやるには資料自体を脱酸処理する必要があり、高価な資料を余り現状を変えたくないことと、過去に経験がなく、知識不足も伴って決められないでいる。

2) OPAC 検索

図書館において図書と利用者と結び付けるものは OPAC である。それは文書でも同じである。大英図書館のような文書が多い図書館は、図書を調べる OPAC のほかに、文書専用の OPAC がある。大学で文書を扱っている所は、学史資料を管理・保存している大学史資料センターか、図書館の特殊資料室(貴重書室)かである。慶應義塾大学が前者に属している。図書館も福澤関係文書を管理・保存しているが、OPAC 化は進んでいない。図書館で文書というと、議会、外交文書などの公文書と、日記、書簡原稿なので私文書に分かれ、公文書は整理ができていくらか OPAC でアクセスしやすいが、私文書となると、未整理のままであったり、OPAC 化されていなかったり、あるいは一般図書と混在してアクセスしにくい場合がある。

今回取り上げたアダム・スミス書簡の場合、利用者にとって、アクセス・ポイントとして必要なのは、差出人としての「アダム・スミス」、宛先人として「ヘイルズ」、日付としての「1769年1月15日」、差出人住所である「カーカルディ」、宛先人住所である「エディンバラ」、そして欲を言えば、書簡中の「キーワード」である。しかしながら、慶應義塾所蔵のアダム・スミス書簡について、目録がとられていず、事務用カードがあるのみなので、早急に OPAC に入力する必要がある。

ところが、アダム・スミス書簡を含む私文書や中世古文書の零葉などのカタログリングは私自身慣れていない。AACR2R や古刊本用の DCRB を準拠すればよいことは分かっているが経験がない。そんな状況の中、2002年の夏、米国のプリンストン大学図書館へ行く私用があり、ついでに手稿のカタログリングについて教を請うことにした。会ったバスラーさんは、AACR2R と DCRB (Descriptive Cataloging of Rare Books) を元にした "Descriptive Cataloging of Ancient, Medieval, Renaissance, and Early Modern Manuscripts" (AMREMM) のコピーを示しながら、それが参考になると教えてくれた。そしてサンプルとして持っていた慶應所蔵の 14 世紀の手稿(コピー)を USMARC フォーマットにしたがってバスラーさんに記述してもらった。それを参考にしてアダム・スミス書簡のカタログリングをしようと考えて

いる。帰国してから知ったことであるが、プリンストンは全米でも有数の中世・ルネサンス手稿の所蔵館で、道理でバスラーさんはいとも簡単にオールド・フレンチを読み、ろくに調べずにわずか 15 分くらいで USMARC フォーマットを作成したわけである。

3) サービス

アダム・スミスの書簡の書誌データは、OPAC をはじめとする目録で検索できないものの、そのほかのツールで所蔵を確認できる。しかしながら、それは、書簡と所蔵を直接的に結びつけるものでないので、利用者は行き着くのは難しい。

雄松堂は、サザビーズのオークションで入札し、日本での購入先が決まると、4 通の書簡のファクシミリ版を顧客先に配布している。また慶應義塾大学の経済学会の紀要『三田学会雑誌』において小池教授は書簡を紹介するとともに、書簡を活字化している。さらにイギリスのケンブリッジ大学出版は、ムンスターとイアンが編集した『アダム・スミス書簡集』²⁾ を出版されている。それは手書きの書簡を活字化したもので、編者により校訂が施されており、信頼できる書簡集として、スミスの現存している自筆書簡を 300 余り掲載している。スミス研究者にとってこの『書簡集』は研究に不可欠な存在となっている。

自筆書簡という「唯一」しかないものだが、ファクシミリ化、活字化・出版化されると、所蔵館としてその存在の意義が半減してしまうと感じざるを得ないが、ファクシミリ化、活字化・出版化は、研究における貢献度は高い。複製化を認めず、「唯一性」、「保守性」、「閉鎖性」は、理想としては「公開」を「館是」とすべき大学・研究図書館において無用な言葉である。

ファクシミリ化、活字化・出版化された自筆書簡について、所蔵館としてやるべきことは、まず OPAC に入力すべきだろう。そしてデジタル化を行い、閲覧者にはまずデジタル化したものを閲覧してもらい、そして実物を見て確認してもらうことであろう。さらにデジタル化されたものをウェブ上に載せ、アダム・スミスに興味を持っている不特定多数の人々に見る機会を提供することも考えられる。

3. 選定

アダム・スミスの自筆書簡が貴重なのは、アダム・スミスという偉大な業績を残した人物の自筆で唯一しかないという稀少性のためであろう。自筆書簡、日記などの私文書を図書館は余り多く所蔵しているわけでない。図書館では、とりわけ歴史のある私学では創始者の書簡、文書、書などを所蔵している場合が多い。慶應義塾もその例外でなく、多くの福澤諭吉関係文書を所蔵している。その多くは『福澤諭吉全集』、『福澤諭吉書簡集』で活字化されている。そうした状況にある図書館でどのような文書を選定、所蔵していけばよいのだろうか。

慶應義塾図書館には内規として『選書基準』があり、それには貴重書、図書の選定基準は書かれているが、稀少な文書についてはそれほど言及されていない。貴重書については、次のような基準が設けられている。研究に使うもの、コアとなっている分野、パピルス・粘土板・羊皮紙など教育的価値のあるサンプルとして図書館が保存しておくべきものである。また準公共的機関である図書館として人類の知的遺産である図書の購入・保存もある程度含まれている。

選定というものは、普遍的ではない。研究動向に左右されるし、また予算の増減に左右される。予算が潤沢である場合は、4番目にあげた「人類の知的遺産」に類する図書も購入可能である。逆に予算が厳しい状況にある場合は、大学図書館であれば、「研究」に用いる図書を優先させなければならない。したがって、4本柱があるものの、やはり研究と、残りの3つの柱との組み合わせが好ましい。例えば「研究とコア」というように。

それでは、稀少な文書をどのような基準で選定すべきであろうか。図書と同じに考えられないが、文書は研究とコアでだろう。そのコアもその大学に関

連する文書に限定されよう。アダム・スミスの自筆書簡を選定した当時をみると、アダム・スミス研究を小池教授が研究されていた事実がある。またアダム・スミス関係図書はコア・コレクションとして所蔵してきた。福澤文書に関しては自明の理である。誰も研究者がいない、その大学に関係ない文書は所蔵する必要はないと思われる。文書は、基本的にその文書に関係する機関、「本拠」が所蔵すべきである。ケンブリッジ大学出身の経済学者ケインズが、同大学出身の物理学者ニュートンの文書を買取り、ケンブリッジ大学図書館に寄贈した如く。

4. 終わりに

アダム・スミスの自筆書簡はファクシミリ化、活字化・出版化、研究がある程度終わったことを考慮すると、いかにして自筆書簡を良い状態で後世に伝えるかという資料保存の問題に尽きる。アダム・スミスの書簡は、本来であるならば、スミスゆかりの地、英国のグラスゴー大学図書館にあった方が資料の散逸という観点で見ると、ベストであろう。一方、異国である日本、とりわけアダム・スミス研究が盛んな日本においてはサンプル、基本的関連資料として所蔵していきたい願望は強い。そうして考えると、所蔵している図書館は、資料保存という国際的な使命を負わされているのである。

- 1) 小池基之. "1769年のAdam Smith—Adam Smithの Sir David Dalrymple, Lord Hailes宛未刊の手紙について". 三田学会雑誌. Vol.63, No.5, p.26-34 (1970. 5).
- 2) Mossner, Ernest Campbell & Ian Simpson Ross. The Correspondence of ADAM SMITH. Oxford: Clarendon, 1987(1st ed.:1977)
- 3) 小池基之. "Adam Smith書簡雑感". KULIC. Vol.11, p.8(1978).

〈2002.9.19 受理〉

スタッフルーム

思い出つれづれ

もりその しげる
森園 繁

(三田メディアセンター調査役)

1. 三田の風情

その頃、と云うのは昭和30年代、私が学生時代を送り、慶應義塾図書館（現在の慶應義塾図書館・本館、通称旧館のことで、以前は全館が図書館であった）に就職した当時の三田の山の風情は、今とは随分違っていた。

慶應と云えば、その「稍デコレイテッド・スタイル、即ち華麗式に則った」図書館を連想した。そう、町のどこからでも図書館が見えた、田町浜松町を走る省線の車窓からも、ひときわその優美な姿を楽しめた。あれが三田の山、福沢先生の慶應義塾、と誰にもその在り所を教えてください。

実際石箱のような図書館、石畳の坂道と黒板の塀越しに白壁づくりの土蔵、慶應帽ツメ襟の学生が往来し、三田通りには都電が通り、桜の木が春夏秋冬の趣を添え、大正時代の新派の舞台の一場面を覗いているような、そんな形容も大袈裟には感じられない風景が、そこにはあった。

もちろん、丘の上からはピルの向こうにそう広くはないが、とにかく品川の海が望めた。福沢先生が新銭座から「芝の三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で海浜の眺望も良い」ので移って来たのが明治4年。さすがに浜辺は目にはできなかったが、先輩達が海原を見やっては、「乃公出でずんば」の気宇を養い、新生日本での立身に思いを馳せ得る環境であったろうことは、十分に理解できた。

ところで戦後も暫くは、戦前からの伝統としては大学図書館なるものは、いわゆる古色蒼然として、キャンパスの一隅に森閑としていれば、学問蓄積の牙城のシンボルであれば、それで良いと云う雰囲気があった。文学部の一学科として昭和26年誕生した図書館学科 Japan Library Schoolは当初すべてアメリカ人教授陣、彼らには慶應義塾図書館は、固陋の代名詞のように見えたのではないか。図書館学科のスタッフ、ま

たその卒業生達の改革への努力も、伝統ある慶應義塾図書館に、少しは波風を立てる効果はあったが、流れを曲げるまでには至らなかった。

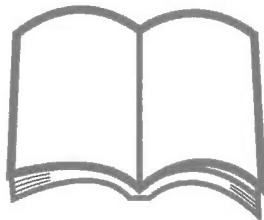
2. 図書館の風景

図書館を利用するのに、入口から出入りするのは当たり前と思われるが、昭和30年代中頃までの慶應義塾図書館はそうではなかった。正面入口は教職員に限られ、学生などの利用者は、入口わきの階段を降り地下室への扉を開け、そこから入館を許されるのであった。また、入館者は座席数だけに限られていたので、満席の際は当然入館待ちとなる。館内の静粛を保ち勉学

環境を整えるための措置であり、学生も当然のように規則に従っていた。閲覧席は、今の旧図書館大会議室であるが、私語はほとんど聞かれなかった。たまに私語する者がいると、周りの利用者がすぐ「シー」と注意するのであった。

もちろん全館閉架制、利用したい図書は利用願いに記入して、閲覧台に申込みのである。試験時の混乱は相当なもので、それでも図書が無事出納されれば良いが、ない場合の落胆は大きく、確認のため自分で書架まで行けない焦りをかみしめるのみであった。入庫を許されているのは教職員と博士課程のみ、書庫に入り直接図書に触れるのは一大特権であった。それでも若干の専門辞書、百科事典の類は、たしか参考調査室と呼んでいた部屋に、これはさすがに開架図書として並んでいた。また、勉学用のコンサイス各種語学辞書は、出納台横の網戸棚に背を向けて並んでいるので、利用したい辞書を指で網越しに押して、これも利用願いに記入の上利用するのであった。

すでに利用者本位の活発な活動を展開している四谷の北里記念医学図書館と、ことあるごとに比較され、医学と人文・社会科学と、学問の違いから来る影響が大きいと知ってはいても、



第三者には三田は眠っているように見えたのであろう、図書館への批判が絶えなかった。たしかに今振り返ると、利用の面では苦言が残るであろうが、しかし収書面では特に和古書の収集では、天理大学図書館と並んで館界を二分すると評価される程の活躍振りであった。

さして多い予算とは思えないのであるが、今その頃受入れた蔵書の価値を思うと、資料を見分ける利き目とその判断力には一段と敬服させられる。当時の古老—と表現しても差し支えないと思われる人達は、実に良く古書の世界に通曉していた。いずれも戦前に教育を受けた方々だが、特に和漢の造詣が深く、旧制高等学校または旧制大学での一般教養の高さが偲ばれた。そうした良質での本の虫の方々、いわば旧いタイプの図書館人の時代と最後のところで一緒に職場になれた、そうした雰囲気貴重な体験になったと、今は思うのである。

「慶應義塾図書館史」の伊東弥之助さんは副館長の要職に付かれており、そうした批判の矢面に立たされる立場にあったが、ご本人はそうした対人関係に神経を減らす行政面より、古書に埋もれていたりする方が、好みであった。また、周りの人もそう見ていた。よく「三田評論」や「慶應義塾報」の古い号を調べては、何事かメモを取られ、原稿用紙を万年筆でうめられていたが、やがて瀟洒な図書館史が出版された。「やや読物風に記述した」と謙遜されているが、その滋味あふれる筆使いの中身が、とかく難物になりがちなこの種のテーマを、読ませる本として立派に成功し、しかも内容が豊富かつ正確であるのは誰でも認める所である。以来職場に一冊、拙宅に一冊座右の書としているが、読む度に教えられることばかりである。

太田臨一郎さんは、時事新報の記者を経験され高等学校の先生をされながらの常勤嘱託であった。和漢の書籍に通じ、また洋書にも詳しかった。幸田文庫の整理を業務とされており中央公論社の「幸田成友著作集」全8巻が出版される時は、その編集委員になるほどの実力派でもあった。「三色旗」に毎号「塾の稀観書」を連載され東西の良書を紹介されていたが、その

文章は如何にもジャーナリズム出身の方のものであった。すでに知っている図書でも太田さんの紹介を読み終わると、その古書を、実物をまた見たくなるのであった。また、太田さんは服装にくわしく、東京オリンピックの時警視庁から依頼されて、婦人警察官のスカートの長さを膝うえだか、膝しただかの何センチにきめたら、それが大変好評であったのが自慢であった。後に「日本服制史」全3巻の大著を書かれたが、ご自分の服装には全くの無頓着、周囲の迷惑も一向気になさらないのであった。書庫を住家ときめたからには、「何を着んと思ひ煩うなかれ」なのであろう。

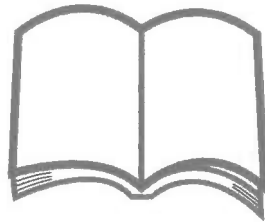
阿部隆一先生は元は図書館の司書であったが、その後斯道文庫に異動され、図書館学科に出講されていた。幸田成友の学問を尊敬され教科書も幸田著「書誌学」を使用され、名著であると評価されていた。私はたまたま既に読んでいた

ので、授業への興味も倍加したのを思い出す。授業以外にも神田の一誠堂など古書店巡りにもお供させていただいた。善版本探索には労力をいとわず、国内外を博搜された。ご自分の体験からか、「図書館に勤める者は、まず足腰が丈夫でなければなら

ない」が持論で授業の折もそう話されていた。図書館と足腰が特別の関係にあるとも思われないが、当時には現実味のうすかった高齢化社会の出現ともなれば、たしかに大事なことであるには違いない。先生の「慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題」は、司書時代30歳代の労作であるが、その学識の深さを窺がい知るには、数頁を閲読すれば充分であらう。

3. 新図書館構想

昭和40年代も近づくと、追いつけ追い越せの時代の追い風もあり、図書館を何とかしなければとの危機感は急カーブで盛り上がり、各種委員会、会議が頻繁に開催された。かつて、Japan Library Schoolの改善申し入れが外部からのもので自然腰も重かったが、今度は図書館内部、塾当局からの改善への姿勢なので、意気込みが全く違っていた。現状分析の為アンケート調査が実施されたが、諸報告の内「新図書館計画のた



めの調査 利用者調査報告(三田地区) (昭和37年)が調査結果の内容をよく分析、纏めており理解しやすかった。ちなみに、同調査によると図書館の3大欠点は「書庫に入れない。館外借出しができない。カウンターでの出納に時間が掛かる」であった。また、新図書館への3大要望は「蔵書が豊富、多様であること。書庫に入れること。館外借出しができること」であった。こうした要望は、新図書館構想で実現した図書館と研究室図書室が組織上合体した「三田情報センター」(昭和45年)を経て、現在の慶應義塾図書館・新館の完成(昭和57年)へと受け継がれていった。

ところで、「情報」という言葉が多用されるようになったのは昭和40年ころからであろうか。同時にドキュメンテーションという語も目につくようになり、今迄の「図書や雑誌」という言語表現が多様になった。時を経てみると、ドキュメンテーションはほとんど日常から姿を消した一方、「情報」は必須語となっているが、40年前はそうではなかった。「広辞苑」(昭和39年版)を引いても、わずかに半行にも満たない説明で「事情のしらせ」とあり、これでは何のことか判らない。固有名詞として、戦時中の「情報局」が掲載されているのが暗示するように、諜報活動と関連づけられてのイメージが強かった。だが、やがて情報科学の普及などと共に新世代を荷うキーワードとしてたちまちのうちに、日常生活に定着したが、それでも情報の定義となると種々分かれ難解な科学用語での解説で理解に苦しんだ。筆者などは、「報(しらせ)に日本的な情(じょう)を加味したもの」との意味づけに感心したりした。

とにかく、図書館というと館(やかた)と図書の群れを連想するが、「情報」は館を越え他の人々と共通項を結びやすい融通性があり、コンピューター世代へ橋渡しする新鮮さを感じさせた。

野村館長以来の伝統重視の傾向も、高村館長、前原館長と時代が経つにつれ変化を見せはじめ、そうした傾向を進める活性剤として「情報」は、とかく閉鎖がちの空間に風穴を空けるのにまことに都合が良かった。

既述のように慶應義塾図書館と三田研究室図書室を同一管理下におく案が実行され、新組織三田情報センターが誕生したのが昭和45年(1970)。その後は、業務の改革が常態となり、情報が情報を生み、またそれが改組変更の端緒となり、止まるところを知らない。

業務の改組を計るのはそれなりの理由がある、今その一面を収書についてみると、三田情報センター発足以来平成13年度の31年間に受入れた図書は約120万冊強、製本雑誌は40万冊強。大学図書館を一館増設した分量に等しい。これに過去の蓄積が加算され、170万冊強の図書と46万冊の雑誌を管理するのであるから、その運営には多大の知識とエネルギーを消費せざるを得ない。ベストの組織作りには不断の研鑽が欠かせない。電子機器のメンテナンスには多大の時間暇を要する。

しかし、こうしたことすべてを考慮しても、

往時の人にはなお教えられる。コンピューターの偉力は精確に作品を2次元の世界に再現し、仮想世界を演出してくれる。しかし、それは要するに複製品である。もちろん、ここでは複製品の価値を云々しているのではない。しかし、図書館の存在価値が後

世への文化遺産の継承であるならば、3次元の作品である資料を収集し、その適否を見極めるのはまた別世界の事象であり、その意味を認識することが大切で、結果として「オリジナルマテリアル収集」の重要性を認識することが欠かせないーと感じるのであり、また「慶應義塾図書館史」の教えるところであると思うのである。

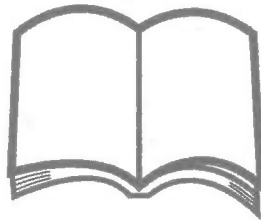
学生時代より40有余年親しんできた慶應義塾図書館に区切りをつける時が近づいているが、書庫の匂いまでが憶い出されてそう簡単には離れられそうにもない。

図書館の前に沈丁咲くころは

恋も試験も苦しかりにき

吉野 秀雄

<2002.9.17 受理>



大学院生として体験したノースカロライナ大学 チャペルヒル校の図書館情報サービス

さかい ゆきこ
酒井 由紀子

(医学メディアセンター係主任)

1. はじめに

筆者は1999年8月から2001年5月の約2年間、慶應義塾による職員向け長期国外研修の機会を得て米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校(University of North Carolina at Chapel Hill, 以下UNC-CH)に留学、情報図書館学校(School of Information and Library Science, 以下SILS)に大学院生として在籍し情報学修士を取得した。この間UNC-CHで学んだことは、修士課程での学習や研究、日常生活や様々な人々との出会いといった貴重な体験を通して数々あるが、本報告では利用者である大学院生として体験した図書館情報サービスを中心に述べてみたい。

以下、UNC-CHとその図書館情報サービスの概要、大学院生活と情報行動に続き、快適だったサービスの本質について図書館員の立場から若干の考察を加えて報告としたい。

2. UNC-CHとその図書館情報サービス

UNC-CHは1789年に創立された米国で最古の州立大学である。25,000人あまりの学生、2,600人の専任教員を有する医学部、法学大学院、ビジネススクールを含む大規模な総合大学で、16大学からなるそれぞれ独立運営のUNCシステムの中でも最古最大規模の大学である。米国の首都Washington, DCから飛行機で1時間ほど、ノースカロライナ州州都のローリー(Raleigh)市近郊にあるローリー・ダーラム(Raleigh/Durham)国際空港から車で30分ほどのチャペルヒル市に740エーカー(約3平方キロメートル)の広大なキャンパスがある。チャペルヒル市(図1)は人口約49,000人、大学とともに歴史を歩んでいるいわゆる大学町で、留学生や訪問研究員などの大学構成員のために国際色も見られるが、基本的にはホスピタリティあふれる南部文化の色濃い地域で、治安は比較的良く、引退後の居住地としても人気が高い。UNC-CHの図書館は、北米の



〔図1〕チャペルヒル市の中心街

大規模大学図書館を中心とした112機関を会員とする研究図書館協会(Association of Research Libraries以下, ARL)に所属しているが、蔵書数は520万冊あまりでARLの中で20位、スタッフはフルタイム換算で328名(うちプロフェッショナルは4割)の職員と86名の学生アシスタントで18位の位置を占める。物理的には16箇所にも20を越える図書館やコレクションが存在するが、組織としては、中心となる人文社会学の総合研究図書館Walt Davis Library(以下Davis図2)や、筆者が最も良く利用したSILSの図書館を始め多くの図書館が属するAcademic Affairs Library(以下AAL)と、独立した2つの専門図書館—医学、薬学、歯学、看護学、公衆衛生の5専攻の分野を対象とするHealth Sciences Library(以下HSL)およびKathrine R. Everett Law Library(以下Law)—が3大システムで、他にいくつかの小規模な独立した図書館がある。付近のDuke University, North Carolina State University, North Carolina Central Universityの図書館とは、Triangle Research Library Network(TRLN)のコンソーシアムメンバとしてデータベースの共同利用や相互貸借、研修活動などの密接な協力関係がある。

図書館情報サービスの一環として、切り離せない

コンピューティングサービスの利用者用施設としては、寮や図書館内を含め15箇所のコンピュータラボ、図書館内のWeb専用のマシンが設置されたInformation Commons, CD-ROM端末機器, 図書館や教室, 寮に配された情報コンセント, 無線LAN, 教室内のビルトインコンピュータがあり, ラップトップPCと無線LANカードの貸出もされていた。これらは, Information Technology Services(スタッフ数約200名)の傘下で研究教育部門をサポートするAcademic Technology & Networks(ATN)という組織が管理運営している。SILSは専攻が図書館学および情報学であることから, 独自のハイエンドのコンピュータラボと教室(PCは53台でSILS学生5名に1台の割合), 教員のオフィスのコンピュータとネットワークを2名の専任スタッフと数名の学生アシスタントで運営していた。

なお, 一定レベルのコンピュータを個人所有することが現在は全学生に義務付けられているが, 当時はまだ学部生に限定されていた。しかし大学院生が中心のSILSの学生はすでに93%がコンピュータを自宅に所有していた。大学ではインターネット接続のためのダイヤルアップサービスを提供していないので, たいてい月19.95ドル無制限接続可の56Kのプロバイダサービスを契約しており, 筆者もこの範疇であった。

3. 大学院生活と情報行動

UNC-CHのSILSの修士課程は, 米国図書館協会認定の北米54校に設置された課程のうち最も卒業要件が厳しい学校のひとつで, フルタイムの学生が2年間で終了するようデザインされており, 48単位以上の取得, 卒業試験, 修士論文の提出が義務付けられる¹⁾。筆者は必須の7コースにマネジメントや医学医療情報, いくつかの情報技術関連のコースとあわせて19コースを履修, 平均的な学期は4コースのために週4日, 8コマの授業があった。最終学期はオンラインコースと修士論文を履修したので, 残りの1コースのために夜間2コマ続きの授業が週1日だけあった。

学校へは授業の日と, 調べもの, チームプロジェクトのうちあわせや教員との面接のために必要ときに登校した。自宅のアパートから3マイル(約5



〔図2 Walt Davis Library〕

キロ)のキャンパスへは昼間はバス(20分), 夜間は便がまばらで週末はないので, 駐車場が開放される午後5時以降と週末は自家用車(10分)で通った。SILSの授業が行われる教室, 事務と教員のオフィス, 図書館, 併設のコンピュータラボなどすべての機能が収まっている, キャンパスの中心に位置するManning Hallでほとんどの用事が足りた。教室以外で大半の時間を過ごしたのはコンピュータラボである。自宅にも日本から持参したコンピュータは備えていたが, マシンやネットワークの環境がハイエンドで, 印刷も高速の装置が設置されていたことと, オンキャンパスの設置マシンなのでプロキシの設定など気にせずにデータベース検索や電子ジャーナルの原文入手ができたので, ここでできる限りのデータベース検索から原文のプリントアウトまでは済ませていた。著作権処理済みの電子リザーブは, AALが運営しているシステムはキャンパスからのみアクセス可能だったので, やはりラボで出力した。一方, 教員が独自に作ったパスワード方式の電子リザーブは自宅からも開くことができた。また, 頻繁にスケジュールや課題のチェックのためにコースのWebページやメーリングリストは自宅, ラボともにコンピュータに向かうたびに行った。さらに, 課題のプロダクト作成として, 作業的なものはこのハイエンドマシンで効率的にこなした。特に自宅のコンピュータに搭載していなかったソフトウェア(統計処理とマルチメディア編集)が必要な課題はここで処理せざるを得なかった。

図書館へ赴くのは, ラボで入手できなかった印刷版の資料を求めためであることが多かった。SILSの図書館では, リザーブの図書や"PAM Box"と呼ばれるパンフレットボックスに納められたリザーブ

のコピー資料も利用した。また、SILSの閲覧室はコミュニティのサロンのように開放されていたのでテキストの売買やチームプロジェクトのうちあわせ、ちょっとした雑談や待ち合わせにも利用した。その他の図書館で度々訪れたのは、Manningとすぐ背中あわせにあるDavisと、徒歩10分の医学部・大学病院エリアにあるHSLである。それぞれ、マネジメントのクラスのためのビジネス分野の資料や修士論文で扱ったコミュニケーション分野の資料、医学医療情報サービス関連の資料と、たいていはそこにしかない資料を求めて訪れた。Davisは書庫が広く静かで、SILSの図書館のように友人と出会う可能性も少ないので、学校でリーディングが必要なときは、集中するためにも時折こもっていた。その他訪れたことがあるのは、分子生物学分野の研究者を対象とした修士論文執筆のために、彼らの業績を掲載した雑誌を求めて訪れた生物学の図書室と、純粋に見学目的で行ったLawの図書館など6箇所ほどである。

ILLサービスは十数回、Davisのレファレンスデスクで利用したが、在学の途中からILLiad (WebベースのILLシステム)を導入してくれたので、申込みは自宅か学校のコンピュータラボで行った。

自宅では、集中力が必要なリーディングと作文が中心の課題のプロダクト作成につとめた。リーディングのマテリアルはたいてい学期最初にリストが公開されると同時に集中作業で、できる限りをプリントの形で入手しコース別日付順にフォルダに納めて用意していた。どこでも読めてマークや書き込みができるプリントが好ましかったからだ。また、コースのホームページやメールのチェックは自宅でも頻繁に行った。履修登録などの事務手続きも自宅コンピュータから行うことが多かった。ファイルのやりとりには、学校のファイルサーバも利用したが、セキュリティが十分でなかったことと、オフキャンパスからはダウンロードのみ可だったので、ラボの全台に内蔵されていた米国で普及している大容量メディアのZipを自宅用にもドライブを購入して利用した。

課題の提出は、レポートであれば、ほとんどの教員は印刷物の提出を求めた。読むためには結局印刷するためと、評価のコメントを直接書き込むためである。よって課題の最終プロダクトは高速かつ美麗

なプリントが可能なラボでプリントアウトをすることがほとんどだった。課題には、データベースやWebなどの作品そのものを中心に、ファイルの形で提出するものもあり、方法は添付メール、Webサブミッション、URLをメールで通知するなどであった。試験は4コースと卒業要件のひとつとして実施されたComprehensive Examのうち、3コースは伝統的な紙の試験だったが、1コースはコースウェアのWebにサブミットする形で行われ、卒業試験はメールの受送信によって実施された。なお、一部のレポートで提出前に英語のチェックを受けたが、ESL(English as Second Language)の担当教員や友人のボランティア、大学のWriting Centerなど、依頼する相手によって面接、添付メール、Webサブミッションと方法は様々だった。

4. 快適な図書館情報サービスを支える要素

以上のような大学院生活を支えてくれた、快適だったUNC-CHの図書館情報サービスについて、資料入手の容易性および迅速性、電子リソース・サービスが使いやすい環境、そしてサービスの基本という3つの視点から、図書館員として整理、考察してみたい。

4.1. 必要な資料が容易に迅速に手に入る

大学院生活にまず必要だったのは、ごく基本的であるが、コースワークで課されるリーディングや課題のための資料を手に入れることであった。UNC-CHでは容易にかつ迅速にこれを実現していたが、これにはいくつかの要因がある。

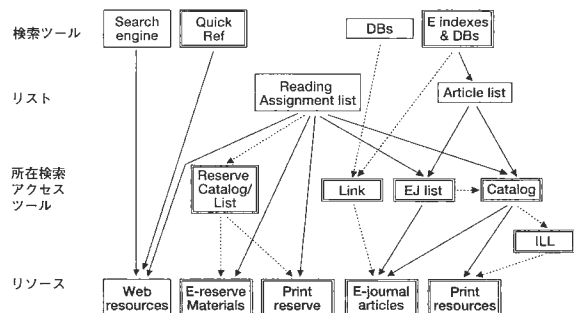
図書館が提供するリソースやツールが豊富であることは、伝統的な指標であるが520万冊あまりという蔵書数(学生1人あたり250冊)がまず示している。総合大学で広大な敷地ながらキャンパスがひとつで、電子リソースも後述のように多く導入されているため重複資料を購入する必要がないこと、また大部分は英語の資料で翻訳本が必要ないことを考え合わせると、その網羅性は日本の大学図書館よりさらに高くなるであろう。授業で課されるリーディング資料はリザーブ制度で入手が保証されているので、筆者の専門分野が学際的な面もあったにもかかわらずILLで依頼したのは図書1冊、論文十数件と少ない。2年間で読んだ資料のコピーの容量は段

ボール3箱あまりだったが、そのごく一部である。

さらにリソースシェアリングのしくみも充実しているので、他大学図書館の資料も容易に利用できる。TRLN内の現物取り寄せであれば翌日受け取れるし、直接訪ねていけばUNC-CHの学生証提示で先方での貸し出しの手続きが可能である。ILLで依頼しても、事務処理のシステムと画像転送のArielを利用して、迅速で、3,4日内には受領できた。大学図書館が所蔵、契約しているリソース・ツールに加え、英語であれば、学術的な情報から政府組織による統計データなどの一次資料、PubMedに代表されるデータベースなど、無料でWeb公開されているリソースやツールが多いことも入手可能性に大きく貢献している。サーチエンジンから有用なリソースに到達することも多々あったし、図書館のリンク集(QuickRef)から便利な辞書などの無料データベースを見つけたこともあった。

資料入手の容易さ、迅速性はリソースとサービスの電子化に依存するところが大きい。²⁾ 筆者は主にキャンパスのラボで利用したが、キャンパスに来ることがまれなパートタイムの学生にはなおさらオフキャンパスからも利用できる電子リソースは必需品である。特に原文がコンピュータで取れることで簡便性が大きく向上する。無料公開のWebリソースはもとより、大学によって豊富に導入された電子ジャーナルはありがたかった。筆者もまず電子版があることを前提に検索を実施していた。自由課題や修士論文でよく利用した書誌データベースも、Web of Science, FirstSearch, ProQuest, Science Direct, EBSCOなど代表的なものが内容の重複に関わらずすべてそろっており、利用者は好みに応じたインターフェースでデータベースを利用できた。途中でオンラインになったILL申込みも、一連の資料入手がコンピュータからの作業に集約でき、非常に便利に思えた。

資料入手まではさまざまな経路(図3)があるが、電子版、印刷版を問わずリソースへ到達するためのツールのポータル的なインターフェースも重要である。これらに必要な多様なツールが統合的に搭載され、組織化がわかりやすいAALの統合Webページ(図4)は日常的に活用した。筆者は利用しなかったが、オンラインのレファレンスサービスや情報リテ



〔図3〕 資料入手までの経路 * 二重線内が図書館で提供されていたリソースとツール]

ラシー学習のインタラクティブWebページなどもあわせて搭載されている。

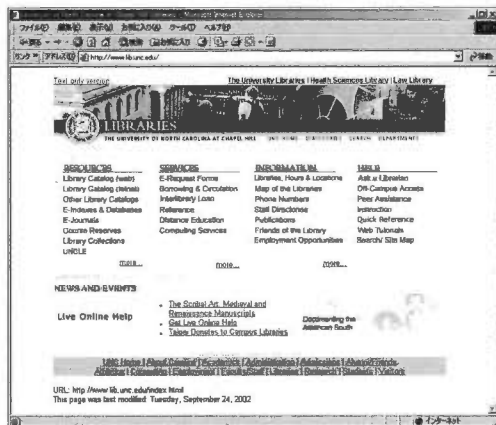
電子リソースに依存する弊害として、コンピュータから取れない情報は切り捨てて取り上げないという危険性も指摘されている³⁾が、図書館に併設のコンピュータラボがあり、図書の貸出、コピー機とプリンターの支払いが磁気ストライプ付きのIDカード1枚で済むなど、電子版と印刷版の両方のリソースを利用する便宜がはかられていたように思う。

4. 2. 電子リソース・サービスが使いやすい周辺環境

電子リソースやサービスが使いやすかったのは、資料の入手だけでなく、コースの情報提供や学事の手続きなど大学院生活全体が電子化されていた⁴⁾、一元的にコンピュータとネットワークを通じて処理できたことと、これを利用する環境が整っていたことも大きな要因である。キャンパスではラボを始め施設が充実していて、コンピュータないしは情報リテラシーの教育機会もATNやSILSのコースやオンラインで多数提供されていた。さらに、米国の日常生活もコンピュータネットワークを介したサービスが浸透していて、オンラインショッピングや税金の支払い、必要な生活情報の検索など同じようにWebのインターフェースで図書館情報サービスを利用することは自然であった⁵⁾。

資料へのアクセスの容易さには、伝統的なサービスが充実していることも大きく貢献している。思い立って資料を求めて夜間や週末、図書館へ行ったことも少なくないが、それはキャンパスが至近であるという居住環境もさることながら、図書館の開館時間が長く、たとえばSILSとDavisはそれぞれ平日23時までまたは24時間で、週末も開いているおかげでもある。貸出サービスも冊数制限なし、期間も3ヶ月と十分で、貸出の更新がオンラインでできる。

また、貸し出し中の資料はリコールをかけてもらえるなど手厚い。キャンパスがひとつで所属や専攻の壁がなく、どこの図書館でも同じように入館、資料



[図4 AALのWebイニシャルページ]

貸出ができるのも魅力的だった。

4.3. サービスの基本：学習研究空間、ホスピタリティとフィードバック

学習研究空間としての図書館もすばらしかった。Davisの2000の閲覧席とキャレル1000室は、キャンパスの寮に多くが居住する学生の学習スペースとしても十分である。スペースにゆとりがあり、キャンパス内に談笑の場などは別に設けられているので、館内も静かである。興味深いのは蓋のある飲み物だけ許されていることで、長時間の滞在にはありがたい。一方、SILS図書館のオープンスペースである閲覧席は多少の会話も許されるコミュニティの情報交換の場として有効であった。

また、南部のホスピタリティのみならず、図書館サービスにもホスピタリティは随所に感じられた。たとえば貸出のルールの中で、延滞金は身分に関わらず発生するが、猶予期間が設けられ、期限後一定期間は延滞金が発生しない。という通りの利用者への温情である。

飲み物もちこみOKのルールは利用者である学生を含む組織で話し合われて決められたルールだそう。教室内での飲食も許されている米国ならではの、ホスピタリティを迫及したことでフィードバックを尊重する姿勢が感じられる。他にもフィードバックを求め生かす姿勢は特筆すべきものがある。たとえば、筆者はたまたま発見したオンラインカタログから電子ジャーナルへのリンクのミスがメールで指摘したが、その日のうちに目録担当の

ヘッドから御礼とリンクを修正した旨の報告がメールで送られてきた。図書館情報サービスに限らず、授業や大学院プログラム全体に対してもアンケート調査があったり、SILSの図書館員を募集した際に候補者の評価に学生が加わったりと、学生であっても随所にフィードバックを送る機会があった。

5. 最後に

図書館員としてすでに長いキャリアを持つ筆者にとって、まったくの学生として扱われ、利用者の目をもって先進の米国の大学で図書館情報サービスを受けたことは新鮮な感動であった。同時に、高度な情報技術に裏付けられた研究・教育そして日常生活の環境の中で、どのように利用者の情報行動が変化していくのかを、身をもって体験したことは実に有意義であった。帰国後、現場の大学図書館員として、実際に受け効果的と思えたサービスを日本でも実現する、という目標を持てたことは、やりがいのある挑戦である。

最後になったが、筆者の長期国外研修の実現にあたっては、長い準備期間からプログラムの完結まで、義塾、上司や同僚、友人や家族、書ききれないほど多くの方に直接間接にご支援を頂戴した。ここに記して謝意を表したい。〈2002.9.24 受理〉

参考文献・注記

- 1) 北米の図書館情報学教育プログラムについては以下に詳しい。酒井由紀子. 北米の図書館情報学教育の現況. 情報の科学と技術. 52, 2002. p. 354-363.
- 2) 北米の大学図書館サービスの電子化については以下に詳しい。河野悦子. 大学図書館におけるe-サービスのこれから：北米大学図書館の事例から. 大学図書館研究. 63, 2002. p.1-8.
- 3) Tennant, R. The Convenience catastrophe. Library journal, 126, 2001, p.39-40.
- 4) 大学学事などの電子化については以下に詳しい。酒井由紀子. ノースカロライナ大学チャペルヒル校での大学院生活. 塾監局紀要, 28, 2001. p. 18-23.
- 5) 日常生活の電子化と大学図書館については以下に詳しい。酒井由紀子. Eビジネスと大学図書館サービス. 国立情報学研究所共同研究 社会コミュニケーションの研究 2001年度研究報告書. 東京：国立情報学研究所, 2002. p.98-105.

サンディエゴ生活

わだ こういち
和田 幸一

(湘南藤沢メディアセンター課長代理)

筆者がUCSDのあるサンディエゴに滞在したのは、2000年6月末から翌2001年1月初めまでである。UCSDとの交換協定が始まってから慶應から3人目の派遣で、筆者の後2002年9月までに2名、計5名が派遣されている。

5人の研修内容は全く異なっており、住んだところもそれぞれであった。宿泊施設は用意されていなかったもので、住居は各人がそれぞれ探したのである。これ自体、1つの「研修」であった。筆者以外の4名は、ルームメイトとして既に他の個人が住んでいるアパートに同居していた。筆者は「前任者」の部屋を引き継ぐという選択もあったが、「自分」の家が欲しくて、独自に探すこととした。

サンディエゴに到着してから最初はホテル住まいだった。UCSD内の貸部屋案内を中心に、新聞、インターネットでいろいろな部屋案内を見て、10件程電話やメールで問い合わせをした。しかし、情報が古いのか入居者が決まっていた。それで、UCSD近辺を歩き回って、10以上のアパートに直接あたる。敷地内のオフィスを訪ねるのである。アパートと言っても、タウンハウス形式もあり、全体としては大型の賃貸マンションを想像してもらうのがよい。最終的に決めたのはUCSDまで歩いて30分ほどの304部屋あるアパートだった。米国到着から数えて8日目の決定で、入居したのはさらに8日後だった。

住居決定後すぐに、銀行口座の開設、電気・ガス、水道、電話の契約と同時に、生活備品の入手も開始した。部屋には、電子レンジ、冷蔵庫、洗濯機等が備付だった。「前任者」から、炊飯器、毛布、台所用品等を引き継いだ。それだけでは不十分である。レンタルではなく、米国らしく、Moving SaleかGarage Saleで中古品を入手することとした。Saleを行っているかわからなかったが、まず「前住者」からの購入を考え、入居予定の部屋を訪ねた。しかし、既に引越しが終わっていた。次に街中やキャンパスの張り紙や新聞の三行広告欄を見て、片端から問い合わせたが、「既に売ってしまった」と

いう回答が20件程続いた。最終的に購入したのは、スペイン人の家族からであった。張り紙をしてから1時間もしないうちの電話だったとのことで驚かれ、「全部がほしい」と言う筆者の希望にさらに驚かれた。すぐにその人の家に行った。値引き交渉をする余裕はなく、「ほとんど全部を買うから、自動車で運んでさらに部屋への搬入を手伝ってほしい」ことをお願いした。最初に\$3と言われた室内用物干を途中から\$10と言われ、「どうしてだ」と詰め寄ると、スペイン語で室内用物干を「tendal」と言うそうで、筆者が「ten dollar」と聞き間違えたという一幕もあった。結果、購入した品々は、スペイン人の協力アパートの入居初日に運び込んだ。ベッド3つ、布団3組、ダイニングテーブルセット、ソファセット、食器5セット、スタンドなど、4人家族の生活用品である。これ以外に購入した大型の生活用品はテレビだけだった。

帰国時にはこれらを同様にMoving Saleで処分した。20枚ほどの張り紙をしてから、翌々日にはほとんどが片付いた。10人程度に売つたろう。売れ残りを心配して、低めの価格を設定したが、値切りが当たり前のこともあり、もっと高めに設定すればよかったと反省したものである。大型の家具を買ってくれた人の多くはアパートの住人で、ベッドや布団を出発の日に渡すことができたのは幸運だった。

こうして、自分で家を探して、Moving Saleで売り買いをしたことはいい思い出である。研修はもちろんのこと、これら生活面でもUCSDの図書館スタッフにはずいぶん力を貸していただいた。保証人になっていただいて初めてアパートに入居できたし、荷物の運搬や電化製品などの買い物にも自動車を貸していただいた。筆者のMoving Saleでも多くの品物を買っていただいた。初めての米国で7ヶ月間何事もなく暮らすことができたのは、UCSDの図書館スタッフのお蔭である。研修の土台となる生活に力を貸していただいたことで初めて研修が成り立った。UCSDのスタッフの皆様へ改めて感謝したい。

<2002.9.21 受理>

UCSDでの6ヶ月

こが りえこ
古賀 理恵子

(三田メディアセンター)

2001年1月から半年間、UCSDでの研修の機会を頂いた。初めてのアメリカ、一人暮らしがサンディエゴで始まることになり、わたくし的には派手な新世紀の幕開けとなった。

【研修】

三田メディアセンターでレファレンスを担当しているの、図書館における研究支援、教育支援、利用者教育というテーマの下、主にメインライブラリーである Geisel Libraryの人文社会学系図書館で研修をさせて頂いた。カウンターでの実習はもちろんだが、研修中という身分の特権から興味ある各種ミーティングや勉強会に参加させて頂いたこと、そしてスタッフの方々へのインタビューで得るものが非常に大きかったように思う。自らの専門に対する徹底したプロ意識と集中力の高さは、見ている者にある種快感を与えるものだ、と思った。

また特にインストラクションについて、後に訪問した大学図書館と比較しても実践的・積極的に取り組んでいる印象を受けた。私は人文社会学部生向けの Library classと大学院のラテンアメリカ研究の授業にオブザーバーとして出席させて頂いた。いずれも図書館員 (Instruction specialist, 及びラテンアメリカ主題専門家) が受け持つ卒業単位として認定されている授業である。資料の探し方・論点の見つけ方・情報の評価の仕方を紹介しつつ最終的にはかなり本格的なレポートの提出を要求するもので、“教員”として担当する図書館員に相当の知識とエネルギーが必要とされることを再認識した。このような形の授業を持っている大学は私が訪問した大学の中ではUCSDが唯一だった。

【他大学見学とALA総会への参加】

5月の終わりから6月の初めにかけては他大学へ見学旅行に出かけた。つてが見当たらなかった大学にいきなりメールを出してアポを取るのには勇気が必要だったが、トピックを提示するとその周辺もフォローするようなアレンジをして、各部署・プロジェ

クトのトップの方々とのミーティングを組んだアジェンダなるものを返信してくれた。そのホスピタリティや「知りたい」と思う人に真摯に接する責任感に感銘を受けつつも出発前はかなりビビってしまった。大変内容の濃い贅沢なものだっただけに、もっと勉強して臨めていたら、という後悔の念も残る。

東方面へは10日間の日程で「アジェンダ」を抱えた一人旅だった。サンディエゴを離れるのが不安で、それまで周囲の方々がいかに強く私をサポートしてくださってきたかを感じさせられたときでもある。

ALA総会(2001.06.14-20, サンフランシスコ)では各社のブースが展開しているExhibition会場と周辺ホテルで同時にいくつも開かれているミーティングを行き来する。IDを首から下げた数万人の図書館員が、参加したいミーティングへと町中を渡り歩いていく光景は壮観ともいえた。パネルディスカッション形式のミーティングでは会場からもさかんに意見が出され、「図書館」や「情報」を研究し、今後のサービスを模索する態度から刺激を受けた。

【最後に】

半年の研修では図書館の中にとどまらないたくさんの方のことを学ぶことができた。まがりなりとも生活者として滞在することで体験した「異文化」は得がたいものであった。ありきたりな表現だが、私の固定観念を見事に打ち破ってくれるような人や出来事に会った充実した時間だったと実感する。時間が経ってから是非再び訪れてみたい場所になった。

研修期間にはホストライブラリアンの方をはじめ、図書館内外のスタッフの方、友達になった学生たち等多くの方にお世話になった。最後にこのような貴重な機会を与えてくださった三田メディアセンターの方々に感謝の言葉を述べたい。

〈2002.9.13 受理〉

アメリカの図書館員から学んだこと

さんべ みわこ
三瓶 美和子

(湘南藤沢メディアセンター)

はじめに

太平洋の大海原を日本とは反対側の岸から眺めるとまったく眺めが違う。アメリカでの体験をたった一言で表現するとこのような印象であった。

2001年9月から翌2月末までカリフォルニア大学サンディエゴ校(以下UCSD)図書館での研修の機会を得た。慶應義塾図書館からの派遣者は今回の私で6人目であった。それ以前の渡航歴が少なく、語学力にも自信のない私には、毎日が緊張と不安の連続であったが、幸いにして数多くの素晴らしい方々との出会いに恵まれ、物心両面から支えられて一生の思い出となる貴重な半年間を過ごすことができた。本当に感謝である。アメリカの図書館員との交流を通じて、日米の違いや共通点について考えを深める絶好の機会となった。特にサンディエゴに到着して2週間後の9月11日には史上最悪の同時多発テロ事件が発生した。西海岸では目に見える大きな影響はなかったが、キャンパス内で追悼の集会や平和の祈りを捧げる学生たちの姿を度々目にし、精神的打撃の深さを思った。この試練の時をこの国の人々と共有するというまことに貴重な海外研修となった。

UCSDの図書館については、すでに何人かの方が報告済なのでここでは割愛させていただき、私が参加した2つの会議に焦点を絞って報告したい。

1. 多言語電子図書館についてのワークショップ

10月11,12日の2日間、UCSDのIR/PS(International Relations/Pacific Studies)図書館が主催のワークショップが開かれた。これは、東アジア、ラテンアメリカ研究の専門図書館員が、英語とは文字体系の異なる資料の電子化に関しての技術的および政策的問題について共通の認識を持ち、意見交換を行うことを目的としていた。カリフォルニア大学内外から約50名が参加した。その8割が中国系の図書館員で、アメリカでの中国人のパワーに圧倒された。カリフォルニア電子図書館プロジェクトやOCLCの推進しているCJK資料のメタデータの

標準化に関する最新情報の一端を知識として得ることができた。日本では国立情報学研究所が中心となって国内の目録データの整備はかなり進んできた感があるが、海外の図書館から見るとまだまだ利用しやすい状況にはなっていない。今後、日本の学術情報が国際的に貢献するためには、目録データの国際的な標準化が急務であり、そのためのダイナミックな視点での情報化政策の必要性を痛切に感じた。

2. ALAのMidwinter meeting (2002/1/18-23)

年が明けた1月中旬、サンディエゴから約6時間の空の旅をして、ミシシッピ川のほとり、ジャズの流れる町ニューオーリンズへ出かけ、アメリカ全土から図書館員が集まる大会に参加した。ここではいろいろな講演会や小グループでのミーティングに潜入し、アメリカの図書館員たちの議論の様子を観察した。私は単独で行動していたが、様々な場所でUCSDでお世話になった図書館員たちに声をかけられ心強かった。この大会で最も印象に残ったのはALAの会長が企画したパネルディスカッションであった。「図書館員はインターネット社会のゲートキーパー」というテーマで、現代の個人情報機密保持や知的所有権の問題などについて専門家2名の講演が行われ、多くの参加者から意見が出された。図書館員が高度情報化社会の中で果たすべき重要な役割について考えるきっかけを与えられた。またこの大会中、キング牧師記念日(1月21日)早朝、有志による集会が行われた。土地柄、大多数が黒人の図書館員であった。平和へのメッセージの後、最後に参加者全員が手をつないで輪になり「我々は打ち勝つことができる」と全員が祈りとともに歌い始めたのには仰天した。この瞬間、日本人とはどこか違う、アメリカの図書館員の精神的な支えとなるものを理解できたような気がした。

最後に研修中、支援してくださったSFCメディアセンターの皆さんに感謝の意を表し結びたい。

<2002.9.17 受理>

環太平洋電子図書館会議について

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務長)

はじめに

カリフォルニア大学サンディエゴ校（以下UCSD）のカール・ロー氏から連絡があり、環太平洋にある大学図書館を中心に共同プロジェクト（今で言うコンソーシアム）を組みたいとの連絡を1997年1月にいただいた。

その当時、慶應義塾図書館としては、環太平洋経済学データベースの構築に向けて事業を開始していたこと、図書館員研修のための正式な交換プロジェクトのアグリーメントをUCSDと結ぶことを考えていたこともあり、会議に参加することを決定した。

1. 第1回会議の経緯

1997年7月に最初の会議がカリフォルニア大学サンディエゴ校で開催された。第1回の会議には13の参加館があり、日本からは慶應義塾図書館と国文学研究資料館が参加した。

当時の目的は次のとおりであった。

- 学術的資料へのアクセスを促進する
- 環太平洋にある図書館の相互協力を人的・経済的に促進する
- 図書館間の相互協力協定締結を促進する
- この連合に対する助成金を獲得する

会議の特徴としては次のようなことがあげられていた。

- 会費無料の努力
- 各種委員会の立ち上げ
- 相互協力のパイロットプロジェクトの実施
- パイロットプロジェクトの失敗の容認
- 効率維持のため連合の固定化
- コンセプトによる非連合機関との協力

会議にでた内容は次のようなことであった。

- ネットワークの技術的な問題
- 知的財産の構築と分担：電子時代の知的財産の保護

- カリフォルニア大学の電子図書館構想
- デジタルアーカイブスの蓄積
- 台湾のアカデミックシニカにおけるネットワークと電子図書館の戦略計画
- 環太平洋大学間の交流

会議後採択したもの

- メンバーのアドレスの共有
- Z39.50の開発
- 連合図書館における総合目録の作成
- 図書館員の交換協定の締結
- 保存プロジェクトの実施
- デジタルプロジェクトの実施
- 重複資料の交換
- 雑誌記事のオンラインデリバリーサービスの実施
- ローカルオンライン、データベースのデリバリーの促進
- ミラーデータベースのサイトの拡大
- 相互協力による図書デリバリーの支援
- デジタル化された資料のデリバリーの支援
- メンバーの活動を支える基金の充実
- 設備の共有化
- 他のメンバーとのインターネットを使用したコミュニケーションの確立
- 特に東アジアの研究資料の保存やデジタル化
- メンバー間の電子的な連絡網の確立
- 学術出版物の交換
- 次の世代を見据えたバーチャルライブラリーの構築

環太平洋電子図書館会議の次の展開として以下のことが確認された。

- 当面カリフォルニア大学サンディエゴ校がまとめ役になる
- 各参加館は、アクセスや保存のためにデジタル化を促進する
- さらに4大学図書館（UCパークレー等）に対

して参加の打診をする

2. 第2回会議以降の経過および東京会議終了後の提案について

第2回会議が1998年にサンディエゴで(本部:入江, 三田:村上が参加), 第3回がワシントン州シアトル(本部:田辺, 三田:筒井が参加), 第4回が北京(本部:田中, 三田:加藤が参加), そして第5回の会議が2002年7月11日~12日に慶應義塾図書館にて開催された。19名(17機関)の参加があり, 次の事柄を確認して終了した。

- 各参加大学, 機関が行っているデジタル事業のオンライン・イベントリーを行い, 各参加館が情報の共有化を行う
- オンライン・デジタルプロセスの充実とメンバー間のベンチマークを徹底させコストと時間の効率の良い運用を目指す
- 環太平洋電子図書館会議の役割, 使命をより明確にすると同時に, 参加館を増やす
- UCSDのスーパーコンピューターセンターを利用することで, 白書類のアーカイブ化を目指す
- テクニカル部門のエキスパートによる参加館へのアドバイスや研修を実施する
- 参加館間でのスタッフのインターンシップを実施する
- アジア・パシフィックのICOLC(International Coalition of Library Consortia)の実現を目指してニーズ調査を行う

3. 今後のスケジュールとメディアセンターのスタンス

2003年は, バンクーバー(ブリティッシュコロンビア大学), 2004年が台北, 2005年が北アメリカ, 2006年はソウルで開催することが決定された。

現在, 多種多様なコンソーシアム活動がグローバルに動いている。ICOLCには, 150のコンソーシアムが参加しており, 2001年の声明では, 次のとおり提案している。

- ①多様な価格設定と購入モデル
 - ②電子ジャーナル利用の便の向上
 - ③長期的アクセス保証とアーカイビング
- 同時に, 政策展開としては,

- ①資料収集: 分担収集, 共同購入
- ②資料組織化: 書誌ユティリティ
- ③資料提供: 相互協力, 相互貸借, 文献提供等
- ④資料保存: 分担保存
- ⑤図書館運営: 資金調達, 人材育成
- ⑥基盤整備: ネットワーク整備, 法的基盤等があげられている。

このICOLCへのアジアからの参加は, 全体の4%で, 日本からは唯一, 国立大学図書館協議会が参加しているが, 今年の3月の年次大会(ラスベガスで開催)には私立大学から早稲田大学あるいは慶應義塾大学が参加する。

また, SPARC(Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition)活動が米国, 欧州について日本にも波及し, 学術雑誌の価格引き下げの交渉や文部科学省からの補助金あるいはポータルシステム構築による学術情報の電子的発信の開発も始まっている。

2004年の国立大学の独立行政法人化, COE21による大学間の競争, あるいは統合による横断的な研究手法に変化が現れてくるであろう。このことは, 確実に大学図書館のサービス体制および国公私立大学図書館の枠組みの変化をもたらすであろう。その意味では, 環太平洋電子図書館会議におけるメディアセンターのかかわりあい方およびはたす役割を見直す時期にきている。

参考資料

- 1) 村上泰子. "International Coalition of Library Consortia (ICOLC)の動向" 情報の科学と技術, 52巻5号, p.266~271.
- 2) 第1回環太平洋電子図書館会議議事録
- 3) 第5回環太平洋電子図書館会議議事録

〈2002.9.27 受理〉

スタッフルーム

メディアセンターでの二年半

おかばやし たかし
岡林 隆

(塾監局参事)

今年の2月、理工学部で稲崎学部長やその他の先生方と、文部科学省生涯学習政策局の山中政策課長の講演を聞く機会があった。生涯学習が標榜される世の動きに応じて、理工学部として、何か社会貢献できるテーマはないか、という趣旨から開かれたものである。

私もかつて同じような仕事をしていたけれども、山中課長の話聞いて驚いた。世の中の動き、変化は考えている以上に早く、大学が考えた案を世に問う時には、世の中はさらに先を行って、その案は陳腐になることが多いことなど、実例を交えての話である。最近彼が東大法学部を卒業して20年ぶりのクラス会に出席してみると、卒業時に就職した会社や役所に、今も勤めている友人は殆どいなかったと言う話もしていた。会社は潰れたり統廃合されたり、自ら転職したり、子会社に出されたり、動きがないと思われる役所でも行政改革などが行われ、まず同じところに勤めている者がはるかに少なかった、と言うのである。

現役真っ盛りの彼の周りがある程度であれば、テレビや新聞で報道される以上に、実際の世の移り変わりは激しいのだと改めて実感させられた。私たちが現代に生きる以上は、生き抜くための能力のブラッシュ・アップは絶えず必要であるということを感じた次第である。

大学は、どちらかと言えば、教員が社会事象を批評し、社会に向かっていろいろな提言などをする割には、自らのことになる社会の動きに疎いと言われている。もちろん学問分野にもよるが、教育研究を担っていることから考えると、大学が世の動きに振り回されるのは問題である。ましてやメディアセンターはこの教育や研究をじっくり支えていかなければならない役割があることからすれば、尚更である。

私はこの5月まで、2年半ほどメディアセンター本部の事務長をさせて貰った。僅かな期間ではあったが、それでも初めと終わりでは仕事に取り組む難しさは格段に違っていたように思う。

メディアセンターは、これまで予算の面では他の部署と異なり前年増で優遇されてきたと言える。私の在任中は塾当局と3回の予算折衝を

行なったが、後半は前年増どころか図書費、図書資料費、事業費などは、前年を割り込まないように折衝するのが精一杯であった。私学のリーダーとして慶應の立場から当然と考えていた予算措置も、当局からすると背に腹はかえられない、ということなのだろう。しかし、図書館関係の仕事は、毎年の実績の上にコツコツ積み上げられていく仕事で主流であるし、タイミング良く蔵書を構築し、蔵書以外の情報も役立つように常に更新し続けていかなければ、結局は、後から大きな出費を伴うことにもなりかねない。大学のためには、図書館関係の予算は、出来る限り特別な配慮がなされて然るべきである、と今でも考えている。

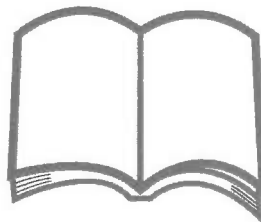
メディアセンターの中で働いている職員についても、正職員は極力減らし、嘱託や非常勤、さらに外部委託に依存せざるを得ない体制がより強くなっていったと言える。各地区合わせて、メディアセンター全体で、かつて200人いた正職員も現在では半分になっているわけであるから、サービスの質から考えると、絶えず

これで良いのかなという疑問を抱えながらの日常であった。しかし、メディアセンターで働く正職員やその他の方々も非常に勤勉で良く働いていたのには頭の下がる思いであった。やるべき仕事は格段に増えているにも拘らず、大きな苦情も出ずにメディアセンターの運営がなされていたのは、これらの人達の有能さと頑張りによるところが大きかったと思っている。

情報化の著しい進展は、図書館の管理やサービスにも急速な勢いで変革をもたらしていた。大学の教育研究が、今後どう変わっていくかにもよるが、情報環境の整備は、経費、人手などから考えて、他大学との連携協力は不可欠になりつつあるように思う。

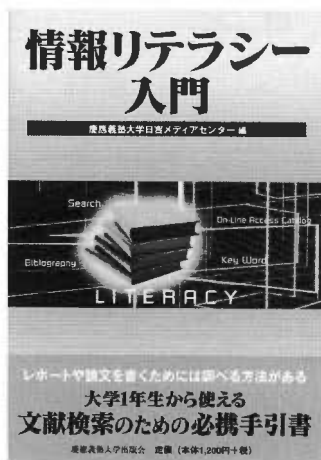
問題が山積する時期に、事務長として、楽しく仕事をさせて貰ったことを関係者に感謝するとともに、変革、変動の下にあるメディアセンターの今後の充実と発展を心から願うものである。

〈2002.9.10 受理〉



資料紹介：慶應義塾大学日吉メディアセンター編

『情報リテラシー入門』



(慶應義塾大学出版会,
2002年5月刊, [6], 119p)

平尾 行藏

(メディアセンター本部事務次長)
(2002.10まで日吉メディアセンター事務長)

山田 雅子

(日吉メディアセンター係主任)

藤井 康子

(日吉メディアセンター係主任)

大学図書館は高等教育機関の一部署として学習・研究支援サービスを担っていますが、その役割は時代とともに次第に変化しています。在籍する学生が大学1～2年生だけという特色を持ったキャンパスの図書館の、今日的使命は何でしょうか。私たちは、「情報リテラシー」の意義と必要性を、図書館からの働きかけによって認識させることだと考えています。

情報リテラシーとは、情報を収集し評価し活用する能力のことです。これについて、従来は、卒業論文を書く段階や大学院で研究活動を行うようになってはじめてその重要性に気がついて、個人の努力で解決されることが多かったと思われます。私たちは、それを、1年生を対象に学習活動の入り口で、カリキュラムとして、取り上げてはどうかと提案し、実施してきました。

情報リテラシー教育は、教育の一環として、すべての大学生に必須の技能を身に付けさせる教育課題であるという点で、顕在化した図書館利用者を対象とする利用者教育と異なっています。

情報リテラシーに取り組むことによって日吉メディアセンターは教育の一翼を担うことになりました。2001年度は4学部の学生約3,800名に対し、6名の職員によって、延べ45回の講義を行いました。学部により実施科目は異なりますが、「情報リテラシー入門」と題した90分1回の講義内容はほぼ同一です。

講義の準備として、配布用印刷テキスト(A4版平均25ページ程度)・パワーポイントによる画像テキスト・講師用台本という3種の資料を作成し、1997年度以来、毎年改訂を重ねてきました。講義にかかわった職員は、他部署に異動した者も含め10

名以上に及びます。今回本書を実際に執筆したのは私たち3名ですが、日吉メディアセンターという一つの部署に、業務を通じて蓄積された知識があって、はじめて形を成すことができた、ということは特に強調しておきたい点です。

本書は以下のような構成になっています。

1. 情報リテラシーとは
2. 文献を探す前に
3. 図書を探す
4. 雑誌論文・雑誌記事を探す
5. 新聞記事を探す
6. その他の情報を探す
7. 書誌情報の書きかた

コラム編(「書誌」「OPAC」「件名」など11項目)

学生諸君に伝えたかったのは、あらゆる事象には書誌、索引などの情報源が存在するという、そしてそれらの情報源を駆使して求める資料・情報にアクセスするという基本的な学習・研究態度を養いましょうということでした。また、本書では、今日の大学の情報利用環境を最大限に活用して情報リテラシーを身につけることを目指しました。そして紙媒体の資料やウェブ上に公開されたページは、補完的なものとして位置づけたので大きく取り上げることはしませんでした。

記述の前提となっている情報利用環境は一私大のもので、しかし日本の多くの大学の環境に準用できることも念頭において書きました。私たちは、塾生だけでなく、全国の大学生を読者として迎えられよう願ってやみません。

<2002.9.18 受理>

スタッフによる論文発表・研究発表

2000.8 ~ 2002.7

論文発表

本部

- 入江 伸.“図書館システムの現状と課題”. **情報の科学と技術**. Vol.51, No.2, 2001.2, p.121-116.
- 入江 伸.“慶應義塾大学メディアセンターにおける整理部門の集中処理センターの現状と方向性”. **大学の図書館**. Vol.20, No.5, 2001.5, p.66-68.
- 入江 伸.“経営指標としての業務統計を目指して”. **情報の科学と技術**. Vol.51, No.6, 2001.6, p.318-323.
- 田邊 稔.“システムライブラリアンの現状と今後～イケてる図書館員を目指して”. **情報の科学と技術**. Vol.51, No.4, 2001.4, p.213-220.
- 田邊 稔.“連携: INFOPRO への HOP! STEP! 第8回図書館システムで効率アップ!?”. **情報の科学と技術**. Vol.51, No.9, 2001.9, p.495-498.
- 田邊 稔.“ドキュメントデリバリーサービスの実際と応用(概説)～グローバル ILL/DDS を目指して”. **現代の図書館**. Vol.39, No.3, 2001.9, p.159-166.
- 平吹佳世子.“慶應義塾大学における電子ジャーナル利用状況統計分析”. **医学図書館**. Vol.49, No.2, 2002.6, p.160-166.

三田

- 加藤好郎, 保坂 睦.“慶應義塾図書館(メディアセンター)における図書館員の国際交流”. **大学図書館研究**. No.59, 2000.9, p.40-49.
- 加藤好郎.“慶應義塾図書館が21世紀に目指すものー専門職としての図書館員”. **大学図書館研究**. No.60, 2001.2, p.24-28.
- 加藤好郎.“専門職としての図書館員の育成ーコンソーシアムへの展望”. **図書館雑誌**. Vol.95, No.2, 2001.2, p.102.
- 加藤好郎.“私立大学図書館協会の国際協力”. **海外における日本資料提供の協力体制**. 東京. 国際交流基金. 2001.3, p.67-74.
- 加藤好郎.“国際図書館協力の現状と将来”. **平成12**

- 年度全国図書館大会記録**. 2001.3, p.60-61
- 加藤好郎.“図書館を最大限に活用して知識, 技能を習得しよう”. **大学ランキング 2002 年版**. 東京, 朝日新聞社, 2001.5, p.116-118.
- 加藤好郎.“日本複写権センターと大学図書館との交渉経過と今後の見通し”. **私立大学図書館協会会報**. No.116, 2001, p.101-106.
- 加藤好郎.“専門職としての大学図書館員の現状と将来”. **現代の図書館**. Vol.39, No.1, 2001.3, p.38-44.
- 加藤好郎.“大学図書館における複写問題: 日本複写権センターとの対応と著作権”. **日本農学図書館協議会誌**. No.123, 2002.2, p.1-8.
- 加藤好郎.“大学図書館案内 慶應義塾図書館ー大学図書館における専門職制度導入の必要性”. **情報管理**. Vol.45, No.3, 2002.6, p.202-205.
- 市古健次.“22世紀のためにー資料保存”. **書物とともに迎える二十一世紀ー慶應義塾第二回世紀送迎会記念文集**. 慶應義塾大学 HUMI プロジェクト, 2000.12, p.16-17.
- 松本和子(講演要訳).“ナレッジマネジメントに挑む情報専門職の役割と領分”. **専門図書館**. No.184, 2000.11, p.24-28.
- 松本和子.“アーカイブとしての電子ジャーナル: JSTOR”. **専門図書館**. No.194, 2002.10, p.17-21.
- 梁瀬三千代.“職員研修制度: 政策・メディア研究科に在籍して”. **塾監局紀要**. No.27, 2000.10, p.77-80.
- 梁瀬三千代.“新聞記事データベースの実態”. **図書館雑誌**. Vol.94, No.11, 2000.11, p.901-903.
- 梁瀬三千代(共著).“大学図書館著作権問題ワークショップ(報告)”. **大学図書館研究**. No.64, 2002.3, p.64-71.
- 金子康樹.“図書館Webサイトにおける情報表現形式”. **専門図書館**. No.184, 2000.11, p.1-12.
- 五十嵐由美子.“慶應義塾大学医学メディアセンターにおける相互貸借業務の現状と改善”. **医学図書館**. Vol.47, No.3, 2000.9, p.256-261.
- 保坂 睦.“よみがえるアレキサンドリア図書館”.

季刊・本とコンピュータ第二期, Vol.2, 2001.12, p.52-57.

日 吉

杉山良子. “慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターにおける蔵書移管について”. **専門図書館**. No.190, 2001. 11, p.19-24.

小澤ゆかり. “初期の「医学図書館」掲載記事から”. **医学図書館**. Vol.47, No.4, 2000.12, p.394-400.

小澤ゆかり. “旅の思い出, ひいきのお店”. **医学図書館**. Vol.48, No.2, 2001.2, p.146-147.

小澤ゆかり. “NLMのWeb ページ紹介”. **医学図書館**. Vol.48, No.2, 2001.6, p.182-186.

藤井康子. [村井のり子 (国学院大学法学部資料室), いしかわまりこ (バーチャル法情報資料室) との共著], “図書館へ行こう!”. **別冊法学セミナー 法学入門 2001**. No.169, 2001.4, p.147-157.

藤井康子. [村井のり子 (国学院大学法学部資料室), いしかわまりこ (バーチャル法情報資料室) との共著], “図書館へ行こう!”. **別冊法学セミナー 法学入門 2002**. No.175, 2002.4, p.129-139.

信濃町

長谷川博子. “MeSH との出会い”. **医学図書館**. Vol.49, No.2, 2002.6, p.112-113.

館田鶴子. “医学史を調べるツール (Q&A)”. **医学図書館**. Vol.47, No.4, 2000.12, p.459.

岡野純子. “医学メディアセンターにおける研修の一例”. **医学図書館**. Vol.48, No.1, 2001.3, p.26-29.

岡野純子. “慶應義塾大学医学部・JMLA加盟館への図書館広報活動に関するアンケートを実施して”. **医学図書館**. Vol.49, No.1, 2002.3, p.22-28.

酒井由紀子, 角家永. “第3章: 医学分野における動向”. **電子メディアは研究を変えるのか**. 倉田敬子編. 東京, 勁草書房, 2000.11, p.59-97.

酒井由紀子. “21世紀の医学・医療情報サービスの始動: 米国日本人留学生のみたロンドン 8ICML= Digging deep: health science information services for the 21st century: 8ICML in London”. **医学図書館**. Vol.47, No.4, 2000.12, p.427-34.

酒井由紀子. “E-Commerceの動向と図書館: サービス志向の電子図書館の実現 = Reshaping library

services in aspects of electronic commerce and a service-oriented digital library”. **情報の科学と技術**. Vol.51, No.1, 2001.1, p.27-37.

酒井由紀子. “ノースカロライナ大学チャペルヒル校での大学院生活”. **塾監局紀要**. No.28, 2001, p.18-23.

酒井由紀子. “IAIMSプロジェクトのための人と組織”. **医学図書館**. Vol.48, No.3, 2001.9, p.257-266.

Sakai, Y. “Metadata for Evidence Based Medicine Resources”. **Online proceedings of International Conference on Dublin Core and Metadata Applications 2001**. 2001.10.

<http://www.nii.ac.jp/dc2001/proceedings/product/paper-12.pdf>

酒井由紀子, 桜木貴子 (記録). “北米の図書館情報学教育: ノースカロライナ大学チャペルヒル校での経験を中心に”. **Journal of library and information science**. Vol.15, 2001, p.45-54.

酒井由紀子. “e ビジネスと大学図書館サービス”. **国立情報学研究所共同研究 社会コミュニケーションの研究. 2001年度研究報告書**, 2002.3, p.98-105.

Tillett BB. 三浦敬子 (翻訳) 鹿島みづき, 酒井由紀子 (翻訳協力). “FRBRモデル (書誌レコードの機能要件) =The FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records) model”. **日本語, 中国語, 韓国語の名前典拠ワークショップ記録第3回 2002年3月14-18日**. 東京: 国立情報学研究所, 2002.3, p.98-116.

Tillett BB. 三浦敬子 (翻訳) 鹿島みづき, 酒井由紀子 (翻訳協力) “バーチャル国際典拠ファイル = A Virtual International Authority File”. **日本語, 中国語, 韓国語の名前典拠ワークショップ記録第3回 2002年3月14-18日**. 東京: 国立情報学研究所, 2002.3, p.140-153.

Tillett BB. 酒井由紀子 (翻訳) “AACR2の電子リソースに関連したアップデート: 国際的目録規則の対応のケーススタディとして = AACR2's updates for electronic resources: response of a multinational cataloguing code”. **日本語, 中国語, 韓国語の名前典拠ワークショップ記録第3回 2002年3月14-18日**. 東京: 国立情報学研究所, 2002.3,

p.174-180.

酒井由紀子, 原直実, 角家 永, 石川裕幸, 裏田和夫, 野添篤毅, 磯野威. “日本および米国における医療情報資源, 情報機関, マンパワーの比較研究: 臨床家編”. 厚生科学研究費補助金医療技術評価総合事業 日本における EBM のためのデータベース構築および提供利用に関する調査研究 平成 13 年度報告書. 2002.3, p.47-59.

酒井由紀子. “北米の図書館情報学教育の現況 =Library and information science education in North America: expanding the programs for information professionals in broader environments”. 情報の科学と技術. Vol.52, No.7, 2002.7, p.354-363.

矢 上

B.L. ホーキンス, P. バッテン編, 廣田とし子他訳. デジタル時代の大学と図書館. 玉川大学出版部. 2002. 370p.

木下和彦. “大学図書館から見た図書館情報学教育”. 平成 12 年度 (第 86 回) 全国図書館大会記録. 2001. 3, p.231-233, 239.

湘南藤沢

和田幸一. “日本の大学図書館員の専門職性: 米国との比較”. 情報の科学と技術. Vol.51, No.4, 2001.4, p.208-212.

河野江津子. “大学図書館における e-サービスのこれから”. 大学図書館研究. No.63, 2001.12, p.1-8.

研究発表

本 部

入江 伸. “図書館関連システムにとっての Z39.50 プロトコル”. IBM 図書館システム研究会. 2002. 8. 22 於 東京 日本 IBM

入江 伸. “Z39.50 プロトコルの意味と標準化の動き”. 私立大学図書館協会東地区部会情報交換会. 2001. 12. 6 於 愛知工業大学

平吹佳世子. “電子ジャーナルの利用統計分析”. 第 3 回図書館総合展示シンポジウム—電子ジャーナルの諸問題フォーラム— 2001. 11. 16 於 東京国際フォーラム

三 田

加藤好郎. “図書館員の役割とは”. 東京都司書教諭講習会. 2000. 8. 於 東京

加藤好郎. “私立大学図書館における国際交流”. 全国図書館大会. 2000. 10. 於 沖縄

加藤好郎. “大学図書館における著作権問題”. 音楽図書館協議会. 2000. 11. 於 東京

加藤好郎. “私立大学図書館のリエンジニアリング”. 長崎大学附属図書館研修会. 2001.2. 於 長崎

加藤好郎. “大学図書館と日本複写権センターとの対応”. CALIS 研究会. 2001. 2. 於 名古屋

加藤好郎. “専門職としての図書館員とは”. 三田図書館情報学会月例会. 2001. 3. 於 東京

加藤好郎. “日米ドキュメントデリバリーサービス”. 私立大学図書館協会東地区研修会. 2001. 6. 於 東京

加藤好郎. “大学図書館の著作権問題”. 日本農学図書館協議会. 2001. 7. 於 東京

加藤好郎. “グローバル・リソース・シェアリングとは”. 東京司書教諭講習会. 2001. 8. 於 東京

加藤好郎. “大学図書館の現状と役割”. 大学行政管理学会. 2001. 9. 於 名古屋

加藤好郎. “21 世紀における図書館員の役割とは”. 国立国会図書館研修会. 2001. 10. 於 東京

加藤好郎. “学校図書館における司書教諭の役割”. 東京都中高教頭研修会. 2001. 11. 於 東京

加藤好郎. “学術情報の流通”. 東京都高等学校教員研修会. 2002. 1. 於 東京

加藤好郎. “私立大学の図書館経営戦略”. 東京大学附属図書館研修会. 2002.3. 於 東京

加藤好郎. “SPARC とは”. 三田メディアセンター研修会. 2002. 2. 於 東京

加藤好郎. “デジタル・ライブラリアン講習会とは”. 三田図書館情報学会. 2002. 3. 於 東京

加藤好郎. “学術情報基盤整備とその充実”. 三田メディアセンター臨時研修会. 2002. 4. 於 東京

加藤好郎. “大学図書館と著作権”. JASRAC 寄付講座. 2002. 6. 於 東京

市古健次. “体験的稀観書論”. 西洋古版本分科会. 2001. 6. 21. 於 明治大学図書館

松本和子. “インターネットで人物検索”. データベース東京 2000. 2000. 10. 20. 於 東京国際フォーラム

筒井利子. “古典籍担当者の育成を考える：慶應義塾図書館における和装本研修の試みの中から”. 私立大学図書館協会東地区部会 2001 年度第 2 回研修会. 2001. 11. 9. 於 早稲田大学

保坂 睦. “慶應義塾大学三田メディアセンターにおける電子情報サービスの現状”. 東京西地区大学図書館相互協力連絡会 2001 年度研修. 2001. 10. 於 武蔵野女子大学

日吉

山田雅子. “慶應義塾大学日吉メディアセンターにおける情報リテラシー教育”. 初年度における情報リテラシー教育の改善に関する研究会. 2000. 12. 於 名古屋大学

山田雅子. “大規模大学の 1 年生に対する情報リテラシー教育と図書館”. 第 18 回大学図書館研究集会. 2001. 9. 於 一橋大学

信濃町

館田鶴子. “論文間のリンクサービス”. 第 2 回図書館総合展 JMLA フォーラム「電子ジャーナルの諸問題」. 2000. 11. 17 於 東京国際フォーラム

館田鶴子. “EBM のための Web による文献検索法”. 第 29 回日本救急医学会総会・学術集会教育講演. 2001. 11. 9 於 ホテルパシフィック東京

酒井由紀子. “ノースカロライナ大学チャペルヒル校におけるキャンパスライフ”. 人事部主催研修報告会. 2001. 7. 19 於 慶應義塾大学

Yukiko Sakai. “Metadata for Evidence Based Medicine Resources”. International Conference on Dublin Core and Metadata Applications 2001. 24-Oct-01 Tokyo: National Institution of Informatics

酒井由紀子. “北米の図書館情報学教育：ノースカロライナ大学チャペルヒル校での経験を中心に”. 愛知淑徳大学図書館情報学会. 2001.11.28 於 愛知淑徳大学 (愛知)

酒井由紀子. “e ビジネスと大学図書館サービス”. 国立情報学研究所共同研究 社会コミュニケーションの研究 軽井沢ワークショップ. 2002.1.12 於 国立情報学研究所国際高等セミナーハウス (軽井沢)

野添篤毅, 酒井由紀子. “Evidence Based Medicine を支える図書館員の役割”. 第 4 回リサーチライブラリアン・ワークショップ. 2002.1.22 於 九州大学附属図書館 (福岡)

酒井由紀子. “米国大学サービスのデジタルソリューション”. 丸善デジタルソリューションフェア 2002. 2002.6.27 於 東京

酒井由紀子. “EBM 実現のための情報専門職教育”. 第 19 回医学情報サービス研究大会. 2002.7.7 於 静岡県立短期大学 (静岡)

矢上

廣田とし子. “変わりゆく大学図書館 — 「改革・再編」の向こうに見えるもの (パネルディスカッション)”. 第 10 回大図研オープンカレッジ. 2001. 6. 於 日図協会館.

関口素子. “事例研究 — 電子ジャーナルの利用”. 専門図書館協議会関東地区協議会電子資料研究会. 2001. 9. 於 東京商工会議所

関口素子. “情報 (電子ジャーナルも含む) の収集・分類・整理・保管 — 事例紹介”. JST 情報管理研修会 Basic コース. 2002. 6. 東京

関口素子. “情報 (電子ジャーナルも含む) の収集・分類・整理・保管 — 事例紹介”. JST 情報管理研修会 Basic コース. 2002. 6. 大阪

湘南藤沢

村上篤太郎. “図書館業務とアウトソーシング：予算編成の実際”. デジタルライブラリアン講習会. 2001.11. 於 紀伊国屋書店

村上篤太郎. “図書館サービス業務のアウトソーシング”. 私立大学図書館協会東地区研究部パブリック・サービス分科会. 2002.7. 於 慶應義塾大学三田メディアセンター

村上篤太郎. “パブリックサービスのアウトソーシング実践”. 大学図書館問題研究会第 33 回全国大会分科会. 2002.8. 於 千葉大学

河野江津子. “インターネット時代の E-service”. 大学図書館問題研究会神奈川支部例会. 2001.7. 於 鶴見大学図書館

年次統計資料〈平成12年度〉

1. 図書費〈平成12年度実績及び13年度予算〉

慶應義塾大学メディアセンター

内訳	平成12年度実績〈単位：円〉			平成13年度予算〈単位：千円〉		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
各地区メディアセンター						
本 部		40,232,035	40,232,035		43,786	43,786
三田メディアセンター	692,265,640	61,410,324	753,675,964	690,910	73,128	764,038
図 書 館	307,916,701	61,410,324	369,327,025	300,093	73,128	373,221
学 部*	383,016,939		383,016,939	390,817		390,817
(私大研究設備相当額)	1,332,000		1,332,000			
日吉メディアセンター	181,268,937	18,819,866	200,088,803	179,431	18,929	198,360
図 書 館	56,919,323	13,439,133	70,358,456	56,150	15,177	71,327
学 部*	114,273,003	5,380,733	119,653,736	123,281	3,752	127,033
文部省私大研究整備 整備費補助金	10,066,611		10,066,611			
指 定 寄 付 金	10,000		10,000			
医学メディアセンター	184,143,120	31,301,519	215,444,639	227,680	18,778	246,458
指 定 寄 付 金						
理工学メディアセンター	203,294,486	32,036,403	235,330,889	214,085	38,000	252,085
指 定 寄 付 金						
湘南藤沢メディアセンター	160,999,717	46,399,767	207,399,484	161,000	50,032	211,032
指 定 寄 付 金						
合 計	1,421,971,900	230,199,914	1,652,171,814	1,473,106	242,653	1,715,759

*印…特別図書費は含まない

2-1. 蔵書統計<年間受入及び所蔵冊数>

各地区メディアセンター	内訳	単行書			製本雑誌			合計
		和	洋	計	和	洋	計	
年間受入冊数	三田メディアセンター	18,079	20,972	39,051	6,036	7,034	13,070	52,121
	図書館	9,959	11,586	21,545	4,096	1,761	5,857	27,402
	学部	8,120	9,386	17,506	1,940	5,273	7,213	24,719
	日吉メディアセンター	14,502	5,240	19,742	2,131	2,472	4,603	24,345
	図書館	11,705	449	12,154	1,752	347	2,099	14,253
	学部	2,797	4,791	7,588	379	2,125	2,504	10,092
	医学メディアセンター	2,032	990	3,022	3,074	6,355	9,429	12,451
	理工学メディアセンター	2,968	920	3,888	1,166	4,208	5,374	9,262
	湘南藤沢メディアセンター	12,656	3,962	16,618	3,145	2,063	5,208	21,826
合計	50,237	32,084	82,321	15,552	22,132	37,684	120,005	
所蔵冊数累計	三田メディアセンター	803,781	888,531	1,692,312	213,782	234,073	447,855	2,140,167
	図書館							
	学部							
	日吉メディアセンター	363,332	187,212	550,544	49,861	63,767	113,628	664,172
	図書館	270,758	26,223	296,981	32,888	4,054	36,942	333,923
	学部	92,574	160,989	253,563	16,973	59,713	76,686	330,249
	医学メディアセンター	48,049	46,400	94,449	74,496	159,313	233,809	328,258
	理工学メディアセンター	71,171	36,952	108,123	50,328	141,856	192,184	300,307
湘南藤沢メディアセンター	138,745	89,128	227,873	33,472	26,032	59,504	287,377	
合計	1,425,078	1,248,223	2,673,301	421,939	625,041	1,046,980	3,720,281	

2-2. 蔵書統計<逐次刊行物：タイトル数>

各地区メディアセンター	カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	5,918	4,552	10,470	6,268	4,260	10,528	20,998
図書館							
学部							
日吉メディアセンター	933	841	1,774	1,245	1,646	2,891	4,665
図書館							
学部							
医学メディアセンター	1,770	1,786	3,556	1,289	1,967	3,256	6,812
理工学メディアセンター	1,201	1,331	2,532	3,179	5,734	8,913	11,445
湘南藤沢メディアセンター	1,356	1,181	2,537	642	770	1,412	3,949
合計	11,178	9,691	20,869	12,623	14,377	27,000	47,869

2-3. 蔵書統計<非図書資料>

内訳		種別	光学・磁気媒体	A-V資料	合計	
各メディアセンター						
年間新規	三田メディアセンター	タイトル数	263	331	594	
		筒数	5,887	636	6,523	
	日吉メディアセンター	タイトル数	218	467	685	
		筒数	674	806	1,480	
	医学メディアセンター	タイトル数	78	86	164	
		筒数	109	417	526	
	理工学メディアセンター	タイトル数	98	49	147	
		筒数	184	139	323	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	339	428	767	
		筒数	773	665	1,438	
	合計		タイトル数	996	1,361	2,357
			筒数	7,627	2,663	10,290
累計	三田メディアセンター	タイトル数	2,961	8,940	11,901	
		筒数	89,364	17,144	106,508	
	日吉メディアセンター	タイトル数	1,432	4,483	5,915	
		筒数	11,684	11,584	23,268	
	医学メディアセンター	タイトル数	545	1,846	2,391	
		筒数	2,501	4,280	6,781	
	理工学メディアセンター	タイトル数	780	311	1,091	
		筒数	1,230	746	1,976	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	1,563	2,832	4,395	
		筒数	13,760	5,182	18,942	
	総累計		タイトル数	7,281	18,412	25,693
			筒数	118,539	38,936	157,475

3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>

各メディアセンター	内訳	館外貸出				計	館内閲覧		前年度比 館外貸出
		教職員	学生	その他	塾外		一般図書	貴重書	
三田メディアセンター		18,767	163,118	7,110	2,348	191,343		541	1.03
日吉メディアセンター		12,854	136,391	5,378	74	154,697			0.96
医学メディアセンター		50,129	18,062	32	50	68,273			0.93
理工学メディアセンター		2,615	61,916	101	0	64,632			1.16
湘南藤沢メディアセンター		4,019	101,759	933	0	106,711			1.02
合計		88,384	481,246	13,554	2,472	585,656		541	1.01

3-2. 利用統計<相互貸借(複写依頼を含む)>

各メディアセンター	内訳	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)		
		国内	国外	計	国内	国外	計
三田メディアセンター	現物(冊)	1,229	11	1,240	641	345	986
	複写(件)	5,745	21	5,766	2,531	376	2,907
日吉メディアセンター	現物(冊)	187	0	187	148	27	175
	複写(件)	628	1	629	507	44	551
医学メディアセンター	現物(冊)	57	0	57	47	0	47
	複写(件)	27,899	130	28,029	2,524	83	2,607
理工学メディアセンター	現物(冊)	10	0	10	19	0	19
	複写(件)	16,958	0	16,958	2,843	105	2,948
湘南藤沢メディアセンター	現物(冊)	205	0	205	225	0	225
	複写(件)	649	0	649	762	13	775
合計	現物(冊)	1,688	11	1,699	1,080	372	1,452
	複写(件)	51,879	152	52,031	9,167	621	9,788

参考データ：早慶ILL(内数)

依頼を受けた(貸)

	現物(冊)	複写(件)
三田メディアセンター	631	943
日吉メディアセンター	104	123
医学メディアセンター	16	523
理工学メディアセンター	8	644
湘南藤沢メディアセンター	51	122
合計	810	2,355

依頼した(借)

	現物(冊)	複写(件)
三田メディアセンター	469	1,152
日吉メディアセンター	75	153
医学メディアセンター	0	65
理工学メディアセンター	16	699
湘南藤沢メディアセンター	47	219
合計	607	2,288

3-3. 利用統計<複写サービス>

内訳 各メディアセンター	種別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	3,545	46,504	6,116	72,107	9,661	118,611
	電子コピー(セルフ式)	/	3,441,807	/	/	/	3,441,807
	OHP・スライド作成	6	18	/	/	6	18
	マイクロ資料コピー	1,349	68,106	612	25,116	1,961	93,222
	簡易印刷	126	51,069	/	/	126	51,069
日吉メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	491	3,040	628	3,894	1,119	6,934
	電子コピー(セルフ式)	/	1,135,900	/	/	/	1,135,900
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	79	4,130	8	492	87	4,622
医学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	14,624	81,317	85,656	478,422	100,280	559,739
	電子コピー(セルフ式)	/	505,907	/	/	/	505,907
	OHP・スライド作成	15	66	/	/	15	66
	マイクロ資料コピー	6	47	1	8	7	55
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	770	7,946	16,958	128,558	17,728	136,504
	電子コピー(セルフ式)	/	809,738	569	20,030	/	829,768
	OHP	331	1,678	/	/	331	1,678
	マイクロ資料コピー	/	/	/	/	/	3,229
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	607	4,553	556	4,538	1,163	9,091
	電子コピー(セルフ式)	/	450,064	/	/	/	450,064
	OHP・スライド作成	28	616	/	/	28	616
	マイクロ資料コピー	/	0	/	/	/	0
	簡易印刷	1,045	1,172,178	/	/	1,045	1,172,178
合 計	電子コピー(オペレーター付)	20,037	143,360	109,914	687,519	129,951	830,879
	電子コピー(セルフ式)	/	6,343,416	569	20,030	/	6,363,446
	OHP・スライド作成	380	2,378	0	0	380	2,378
	マイクロ資料コピー	1,434	72,283	621	25,616	2,055	101,128
	簡易印刷	1,171	1,223,247	0	0	1,171	1,223,247

* 斜線は計上不能

参考データ：電子コピー枚数

	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田メディアセンター	118,611	3,441,807	3,560,418
日吉メディアセンター	6,934	1,135,900	1,142,834
医学メディアセンター	559,739	505,907	1,065,646
理工学メディアセンター	136,504	829,768	966,272
湘南藤沢メディアセンター	9,091	450,064	459,155
合 計	830,879	6,363,446	7,194,325

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
利用者別

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	2,591	20,481	5,434	28,506
日吉メディアセンター	974	3,916	323	5,213
医学メディアセンター	2,299	454	1,772	4,525
理工学メディアセンター	1,534	8,779	2,573	12,886
湘南藤沢メディアセンター	242	2,549	117	2,908
合 計	7,640	36,179	10,219	54,038

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
業務内容別

	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田メディアセンター	10,391	890	15,156	2,069	28,506
日吉メディアセンター	1,334	270	3,609	0	5,213
医学メディアセンター	1,349	1,630	1,546	0	4,525
理工学メディアセンター	8,275	169	4,107	335	12,886
湘南藤沢メディアセンター	117	34	2,754	3	2,908
合 計	21,466	2,993	27,172	2,407	54,038

年次統計資料〈平成13年度〉

1. 図書費〈平成13年度実績及び14年度予算〉

慶應義塾大学メディアセンター

内訳 各地区メディアセンター	平成13年度実績〈単位：円〉			平成14年度予算〈単位：千円〉		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
本 部		41,113,762	41,113,762		44,386	44,386
三田メディアセンター	692,140,275	63,931,892	756,072,167	663,093	71,528	734,621
図 書 館	307,914,284	63,931,892	371,846,176	300,093	71,528	371,621
学 部*	382,840,991		382,840,991	363,000		363,000
(私大研究設備相当額)	1,385,000		1,385,000			
日吉メディアセンター	173,430,871	18,928,871	192,359,742	173,431	20,117	193,548
図 書 館	56,149,911	15,176,989	71,326,900	56,150	16,177	72,327
学 部*	117,280,960	3,751,882	121,032,842	117,281	3,940	121,221
文部省私大研究整備 整備費補助金	0		0			
指 定 寄 付 金	0		0			
医学メディアセンター	164,577,943	50,974,447	215,552,390	211,680	34,778	246,458
指 定 寄 付 金						
理工学メディアセンター	195,066,704	42,522,755	237,589,459	209,085	43,000	252,085
指 定 寄 付 金	500,000		500,000			
湘南藤沢メディアセンター	143,551,455	66,293,306	209,844,761	154,000	57,032	211,032
指 定 寄 付 金						
合 計	1,368,767,248	283,765,033	1,652,532,281	1,411,289	270,841	1,682,130

*印…特別図書費は含まない

2-1. 蔵書統計<年間受入及び所蔵冊数>

各地区メディアセンター		内訳	単行書			製本雑誌			合計
			和	洋	計	和	洋	計	
年間受入冊数	三田メディアセンター		18,151	23,249	41,400	3,224	9,844	13,068	54,468
	図書館		12,288	10,806	23,094	1,751	1,594	3,345	26,439
	学部		5,863	12,443	18,306	1,473	8,250	9,723	28,029
	日吉メディアセンター		16,449	4,429	20,878	2,187	2,487	4,674	25,552
	図書館		13,557	391	13,948	1,700	445	2,145	16,093
	学部		2,892	4,038	6,930	487	2,042	2,529	9,459
	医学メディアセンター		2,173	769	2,942	1,819	5,681	7,500	10,442
	理工学メディアセンター		4,340	1003	5,343	1,043	2,906	3,949	9,292
	湘南藤沢メディアセンター		10,666	2,804	13,470	1,943	1,434	3,377	16,847
合計			51,779	32,254	84,033	10,216	22,352	32,568	116,601
所蔵冊数累計	三田メディアセンター		821,573	911,518	1,733,091	214,909	243,146	458,055	2,191,146
	図書館								
	学部								
	日吉メディアセンター		372,510	191,054	563,564	46,665	60,407	107,072	670,636
	図書館								
	学部								
	医学メディアセンター		50,120	47,150	97,270	76,291	164,992	241,283	338,553
	理工学メディアセンター		75,295	37,934	113,229	51,369	144,759	196,128	309,357
	湘南藤沢メディアセンター		147,447	82,893	230,340	34,345	26,594	60,939	291,279
合計			1,466,945	1,270,549	2,737,494	423,579	639,898	1,063,477	3,800,971

2-2. 蔵書統計<逐次刊行物：タイトル数>

各地区メディアセンター	内訳			カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	6,080	4,656	10,736	6,537	4,899	11,436	22,172			
図書館										
学部										
日吉メディアセンター	961	869	1,830	1,247	1,581	2,828	4,658			
図書館										
学部										
医学メディアセンター	1,756	1,751	3,507	1,358	2,031	3,389	6,896			
理工学メディアセンター	1,202	1,350	2,552	3,209	5,755	8,964	11,516			
湘南藤沢メディアセンター	1,380	1,205	2,585	709	787	1,496	4,081			
合計	11,379	9,831	21,210	13,060	15,053	28,113	49,323			

2-3. 蔵書統計<非図書資料>

各メディアセンター	内訳	種別	光学・磁気媒体	A-V資料	合計	
年間新規	三田メディアセンター	タイトル数	464	201	665	
		筒数	3,668	201	3,869	
	日吉メディアセンター	タイトル数	417	491	908	
		筒数	1,716	810	2,526	
	医学メディアセンター	タイトル数	85	31	116	
		筒数	97	419	516	
	理工学メディアセンター	タイトル数	81	45	126	
		筒数	181	85	266	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	259	420	679	
		筒数	683	773	1456	
	合計		タイトル数	1,306	1,188	2,494
			筒数	6,345	2,288	8,633
累計	三田メディアセンター	タイトル数	3,424	9,141	12,565	
		筒数	93,032	17,345	110,377	
	日吉メディアセンター	タイトル数	1,801	4,881	6,682	
		筒数	13,288	12,264	25,552	
	医学メディアセンター	タイトル数	626	1,872	2,498	
		筒数	2,592	4,409	7,001	
	理工学メディアセンター	タイトル数	859	356	1215	
		筒数	1,405	831	2,236	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	1,795	3,141	4,936	
		筒数	14,373	5,783	20,156	
	総累計		タイトル数	8,505	19,391	27,896
			筒数	124,690	40,632	165,322

3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>

各メディアセンター	内訳	館外貸出				館内閲覧		前年度比 館外貸出	
		教職員	学生	その他	塾外	計	一般図書		貴重書
三田メディアセンター		20,555	166,681	10,085	2,482	199,803		595	1.04
日吉メディアセンター		15,897	136,602	5,331	30	157,860			1.02
医学メディアセンター		43,688	16,877	78	38	60,681			0.88
理工学メディアセンター		2,944	62,759	81	18	65,802			1.01
湘南藤沢メディアセンター		4,879	107,136	193	1629	113,837			1.06
合計		87,963	490,055	15,768	4,197	597,983		595	1.02

3-2. 利用統計<相互貸借(複写依頼を含む)>

各メディアセンター	内訳	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)		
		国内	国外	計	国内	国外	計
三田メディアセンター	現物(冊)	1,315	9	1,324	698	241	939
	複写(件)	5,842	13	5,855	2,235	301	2,536
日吉メディアセンター	現物(冊)	219	0	219	161	16	177
	複写(件)	568	0	568	468	141	609
医学メディアセンター	現物(冊)	22	0	22	20	0	20
	複写(件)	25,956	84	26,040	2,241	122	2,363
理工学メディアセンター	現物(冊)	47	0	47	56	0	56
	複写(件)	15,910	2	15,912	3,052	107	3,159
湘南藤沢メディアセンター	現物(冊)	197	0	197	208	0	208
	複写(件)	641	0	641	1,000	22	1,022
合計	現物(冊)	1,800	9	1,809	1,143	257	1,400
	複写(件)	48,917	99	49,016	8,996	693	9,689

参考データ：早慶ILL(内数)

依頼を受けた(貸)

	現物(冊)	複写(件)
三田メディアセンター	564	862
日吉メディアセンター	119	128
医学メディアセンター	10	721
理工学メディアセンター	10	568
湘南藤沢メディアセンター	60	114
合計	763	2,393

依頼した(借)

	現物(冊)	複写(件)
三田メディアセンター	472	973
日吉メディアセンター	80	127
医学メディアセンター	0	61
理工学メディアセンター	33	709
湘南藤沢メディアセンター	52	381
合計	637	2,251

3-3. 利用統計<複写サービス>

各メディアセンター	内訳 種別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	3,567	48,062	6,122	70,616	9,689	118,678
	電子コピー(セルフ式)		3,302,391				3,302,391
	OHP・スライド作成	11	46			11	46
	マイクロ資料コピー	1,002	48,273	535	24,994	1,537	73,267
	簡易印刷	110	54,912			110	54,912
日吉メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	616	4,665	568	4,295	1,184	8,960
	電子コピー(セルフ式)		1,109,091				1,109,091
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	49	2,521	1	475	50	2,996
医学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	16,917	108,658	85,939	516,042	102,856	624,700
	電子コピー(セルフ式)		487,938				487,938
	OHP・スライド作成	21	73			21	73
	マイクロ資料コピー	3	29	5	102	8	131
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	1,024	10,938	15,912	116,935	16,936	127,873
	電子コピー(セルフ式)		676,930		27,262		704,192
	OHP	109	512			109	512
	マイクロ資料コピー						1,159
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	510	6,231	664	4,961	1,174	11,192
	電子コピー(セルフ式)		387,570				387,570
	OHP・スライド作成	5	63			5	63
	マイクロ資料コピー		2,012				2,012
	簡易印刷	1,018	1,089,032			1,018	1,089,032
合 計	電子コピー(オペレーター付)	22,634	178,554	109,205	712,849	131,839	891,403
	電子コピー(セルフ式)		5,963,920	0	27,262		5,991,182
	OHP・スライド作成	146	694	0	0	146	694
	マイクロ資料コピー	1,054	52,835	541	25,571	1,595	79,565
	簡易印刷	1,128	1,143,944	0	0	1,128	1,143,944

* 斜線は計上不能

参考データ：電子コピー枚数

	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田メディアセンター	118,678	3,302,391	3,421,069
日吉メディアセンター	8,960	1,109,091	1,118,051
医学メディアセンター	624,700	487,938	1,112,638
理工学メディアセンター	127,873	704,192	832,065
湘南藤沢メディアセンター	11,192	387,570	398,762
合 計	891,403	5,991,182	6,882,585

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
利用者別

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	2,564	19,054	5,082	26,700
日吉メディアセンター	760	3,141	268	4,169
医学メディアセンター	2,815	372	1,392	4,579
理工学メディアセンター	1,227	8,279	681	10,187
湘南藤沢メディアセンター	418	3,025	131	3,574
合 計	7,784	33,871	7,554	49,209

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
業務内容別

	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田メディアセンター	9,470	1,275	14,278	1,677	26,700
日吉メディアセンター	1,103	213	2,850	3	4,169
医学メディアセンター	1,443	1,575	1,561	0	4,579
理工学メディアセンター	7,277	374	1,703	833	10,187
湘南藤沢メディアセンター	283	71	3,216	4	3,574
合 計	19,576	3,508	23,608	2,517	49,209

看護医療学図書室 年次統計資料 <平成13年度>

1. 図書費<平成13年度実績及び14年度予算>

平成13年度実績 <単位：円>			平成14年度予算 <単位：千円>		
図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
16,407,997	1,089,331	17,497,328	13,500	4,000	17,500

2-1. 蔵書統計<年間受入及び所蔵冊数>

	単行書			製本雑誌			合計
	和	洋	計	和	洋	計	
年間受入	3,420	88	3,508	286	167	453	3,961
蔵書冊数	14,687	5,471	20,158	344	167	511	20,669

2-2. 蔵書統計<逐次刊行物：タイトル数>

カレント			ノンカレント			合計
和	洋	計	和	洋	計	
121	35	156	13	20	33	189

2-3. 蔵書統計<非図書資料>

	種別	光学・磁気媒体	A-V資料	合計
	年間新規	タイトル数	47	272
箇所数		58	606	664
累計	タイトル数	320	685	1,005
	箇所数	378	1,659	2,037

3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>

館外貸出				計
教職員	学生	その他	塾外	
1,697	3,141	10	0	4,848

3-2. 利用統計<相互貸借（複写依頼を含む）>

	依頼を受けた（貸）			依頼した（借）		
	国内	国外	計	国内	国外	計
現物（冊）	0	0	0	14	0	14
複写（件）	131	0	131	332	11	343

3-3. 利用統計<複写サービス>

電子コピー （セルフ式）	学内		学外		合計	
	件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
		6,602				6,602

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス> 利用者別

学内者		学外者	合計
教職員	学生		
191	471	8	670

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス> 業務内容別

文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
45	79	546	0	670

三田図書館・情報学会月例研究会

- 第105回** 発表者：三輪眞木子氏(株式会社エポックリサーチ)
2000年12月9日(土) テーマ：情報問題解決プロセスにおけるユーザ行動文法
- 第106回** 発表者：入江伸氏(慶應義塾大学メディアセンター本部課長)
2001年1月20日(土) テーマ：図書館グループ内での実践的な研究開発機能の必要性
- 特別** 発表者：Ms. Carol Collier Kuhlthau(米国、ラトガース大学教授)
2001年3月23日(金) テーマ：The Information Search Process (ISP):
Search for meaning rather than answers
- 発表者：Mr. Pertti Kalevi Johannes Vakkari
(フィンランド、タンペレ大学教授)
テーマ：Task-based end-user searching:
Tactics, terms and search results
- 第107回** 発表者：加藤好郎氏(慶應義塾大学三田メディアセンター事務次長)
2001年3月24日(土) テーマ：21世紀の専門職としてのライブラリアン(研修計画の実際)
- 第108回** 発表者：原田隆史氏(慶應義塾大学文学部)
2001年7月14日(土) テーマ：21世紀の図書館協力
ー図書館コンソーシアムとドキュメントデリバリー
- 第109回** 発表者：長野由紀氏(国際基督教大学オスマー図書館館長)
2001年12月1日(土) テーマ：ICUからの報告・(ICU図書館見学)
- 第110回** 発表者：土屋俊氏
(千葉大学附属図書館長、文化審議会著作権分科会図書館WG委員)
2002年2月2日(土) テーマ：図書館をめぐる著作権法運用の動向
コーディネータ&コメンテータ：
糸賀雅児氏
(三田図書館・情報学会プログラム委員、文化審議会著作権分科会図書館WG委員)
- 第111回** 発表者：糸賀雅児氏
2002年3月30日(土) (デジタル・ライブラリアン研究会代表、慶應義塾大学教授)
小林是綱氏
(同副代表、NPO地域資料デジタル化研究会理事長)
加藤好郎氏
(同副代表、慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)
テーマ：デジタル・ライブラリアン講習会の成果と今後
- 第112回** 発表者：伊藤義人氏(名古屋大学附属図書館長)
2002年6月15日(土) テーマ：大学図書館の連携について
ー電子ジャーナルコンソーシアムの形成と維持ー
- 第113回** 発表者：金子昌嗣氏(早稲田大学)
2002年9月21日(土) テーマ：大学図書館における研究開発
- 第114回** 発表者：三輪眞木子氏(メディア教育開発センター)
2002年12月20日(金) 二村健氏(明星大学)
※デジタル・ライブラリアン 桂啓杜氏(駿河台大学)
研究会と共催 テーマ：図書館・情報学教育におけるe-ラーニングの動向

編集後記

『MediaNet』9号をお届けいたします。本来であればこの9号は2001年秋に発行されるはずでした。諸般の事情で1年以上も刊行が遅れ、そのため2001/2002年版として2年分の内容を盛り込むことにいたしました。この間、学内のみならず、学外からも直接あるいは間接的にお問い合わせやお叱りを頂戴いたしました。編集委員会を代表し、この場を借りてお詫び申し上げます。

9号では図書館をめぐる新しい動きについて特集しました。IT化の波によって従来の図書館の運用は構造的な変革を余儀なくされています。その動きは日本を含む世界的な経済不況の影響と相俟って複雑な様相を呈しています。情報そのものについて言えば、予算的な制約のなかで従来の紙媒体とデジタル情報をどう蓄積・管理していくかという問題があります。情報へのアクセスという点では世界標準の組織化やインターフェースの提供が必要となります。図書館の外では出版社の倒産や寡占が進み、内側ではアウトソーシングが進んで業務の空洞化が囁かれています。こうした現象は、ひとつの図書館が単独で利用者の情報要求に応える時代が終わったことを示唆しています。

この先の図書館を予測することはたいへん困難ですが、複数の図書館が連携して効果的にサービスを提供する、という新しい動きの一端を探ることで少しでも展望が開ければと思います。

(酒井 明夫)

MediaNet 第9号 2003年3月31日 発行

編集 MediaNet 編集委員会
発行者 天野 善雄
発行 慶應義塾大学メディアセンター本部
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
電話 03-5427-1644
表紙デザイン 株式会社 AXHUM (藤田 明浩)
印刷 共立コミュニケーションズ (株)

MediaNet 編集委員会

編集長 酒井 明夫 (本部)
編集員 平吹佳世子 (本部) 小松 雅高 (三田) 岡本 聖 (三田) 森 三枝子 (日吉)
上原 順子 (医学) 玉村 文子 (理工学) 中村 亜日香 (湘南藤沢)
E-mail: z-medianet@lib.keio.ac.jp

慶應義塾大学メディアセンター

MediaNet^{NO.9}

2001/2002



www.mita.lib.keio.ac.jp
三田メディアセンター



www.hc.lib.keio.ac.jp
日吉メディアセンター



www.lib.med.keio.ac.jp
医学メディアセンター



www.lib.st.keio.ac.jp
理工学メディアセンター



www.sfc.keio.ac.jp/mhtml
湘南藤沢メディアセンター



Keio University
MediaCenter